ISSN 0288-4801

教養諸學研究

第百五十三号
（2024年度・１号）

〈急進的啓蒙〉とホッブズ
——イスラエルとマルコムの論争——
……上田悠久

普通话非轻声两字组声调组合的变调机理研究
——基于音高曲线调形和调高变化的分析
……呉　志剛

新型コロナワクチンを含む遺伝子治療の商品化をめぐる考察
—資本による心身内奥の包摂—
……花岡龍毅

【研究ノート】
Kikou Yamata dans la presse japonaise féminine d'après-guerre : l'exemple du mensuel Fujin Gahō
……Anne-Aurélie SEYA

早稲田大学政治経済学部
教養諸学研究会
２０２５

目　次

〈急進的啓蒙〉とホッブズ
——イスラエルとマルコムの論争——
……上　田　悠　久……1

普通话非轻声两字组声调组合的变调机理研究
——基于音高曲线调形和调高变化的分析
……呉　　志　剛……25

新型コロナワクチンを含む遺伝子治療の商品化をめぐる考察
—資本による心身内奥の包摂—……花　岡　龍　毅……79

【研究ノート】
Kikou Yamata dans la presse japonaise féminine
d'après-guerre : l'exemple du mensuel Fujin Gahō
……Anne-Aurélie SEYA……105

〈急進的啓蒙〉とホッブズ

――イスラエルとマルコムの論争――

上　田　悠　久

はじめに

啓蒙思想研究において昨今注目を集めているのが、ジョナサン・イスラエルの〈急進的啓蒙〉（Radical Enlightenment）に関する議論である。服部美樹の整理によると、〈急進的啓蒙〉とは、科学と結びついた無神論および理神論的立場から、あらゆる伝統的要素に異議申し立てをする思想である。その代表格がスピノザである。〈急進的啓蒙〉は、旧来の思想や信仰と新しい思想との発展的総合を目指す、啓蒙思想の主流派たる〈穏健な啓蒙〉（moderate Enlightenment）とは鋭く対立し、啓蒙思想の周縁に追いやられていた（服部 2009,70-71）。しかしイスラエルは、〈急進的啓蒙〉こそ近代デモクラシーを支える中核的価値、すなわち平等、個人自由、表現の自由、世俗化、政教分離の原理を生み出したものであり、現代にも強い影響を与えていると主張する（Israel 2009, vii-x; 邦訳 4-6 頁）。彼はこうした主張を、『急進的啓蒙』（*Radical Enlightenment,* 2001）、『啓蒙論争』（*Enlightenment Contested,* 2006）、『民主的啓蒙』（*Democratic Enlightenment,* 2011）という、いずれも大著の三部作において展開している。

イスラエルの、〈急進的啓蒙〉こそが民主的社会の基礎だとする主張に対しては、既に多くの評価が為されている。日本でも、これら大著のダイジェスト版ともいえる『精神の革命』（*A Revolution of the Mind,* 原著 2009）が 2017 年に翻訳されたのを機に書評が多数出たが、その多くは研究史上の意義を認めつつも、〈急進的啓蒙〉論に対し様々な懸念を表明していると言えよう。例え

ば川出良枝は、〈急進〉と〈穏健〉の「仕分け」が恣意的に行われていると指摘した上で、思想の「多様な水脈」を地道な実証研究などにより明らかにしてきた、近年の思想史研究の動向からの「先祖返り」に懸念を示す。そして、理念を実現するための制度や政策に無関心であり、哲学的急進主義と政治的急進主義のつながりを実証できていないとも指摘する（川出 2018）[1]。上野大樹は端的に、「近代主義的で進歩主義的な啓蒙観への回帰であり、ある種の先祖返りである」と評する（上野 2021、1 頁）。関口佐紀は、啓蒙の一体性よりも〈急進〉と〈穏健〉の相克に注目し、大きな物語としての啓蒙を復活させ、啓蒙と現在の連続性、そして哲学と政治の連関を強調し、啓蒙に批判的なポストモダン的言説に対し啓蒙の現代的意義を見出したイスラエルの功績を認める。一方で、テクスト選択や評価に見られる恣意性、仏革命に見られる暴力と感情の連関への視点の欠如、そして現在的価値の起源を過去に求める普遍主義の限界を指摘する（関口 2018）[2]。

ただしこうした評価でもあまり検討されていないのが、〈急進的啓蒙〉とホッブズとの関係である。そもそもホッブズは、〈急進的啓蒙〉の物語では脇役に甘んじている。スピノザの影に隠れたホッブズは、イスラエルの著作においては〈急進的啓蒙〉を徹底できていないとの烙印を押されているのである。

だがイスラエルはホッブズをめぐって、ホッブズ研究の第一人者であるノエル・マルコムと、一種の論争を繰り広げていた。マルコムは『ホッブズの諸相』（*Aspects of Hobbes*, 2002）において、イスラエル『急進的啓蒙』におけるホッブズへの低評価に対して反論を試みたのである[3]。マルコムは既に 1991 年に

---

1 川出は、そもそも「啓蒙の世紀」に「啓蒙」の語は使われていなかったとして、啓蒙の語を安易に使う風潮に警鐘を鳴らす。

2 なお『精神の革命』の訳者である森村敏己も訳者解説において、イスラエルへの批判にむしろ共鳴する立場から、啓蒙の二分法の是非、思想史研究としての方法論的不備、そしてポストモダニズム批判の妥当性を批判的に検討する。その上で、啓蒙研究全体を活性化させた意義を認めている。

3 スプリングボーグは『ホッブズの諸相』に対する長い書評において、この本全体がイスラエル『急進的啓蒙』への応答なのだと喝破する（Springborg 2004）。

「ホッブズとスピノザ」と題する論攷を出し、オランダの「ホッブズ的共和主義」の思想潮流のなかにいたスピノザが、ホッブズのアイディアを使用していると指摘していた（Malcolm 1991：この論攷は『ホッブズの諸相』に再録されている）。そして新たに彼は「ホッブズとヨーロッパ文芸共和国」（Hobbes and the European Republic of Letters）と題する長大な書き下ろしの章において、啓蒙思想におけるホッブズの重要性を強調するのである。このマルコムによる「挑発」に対し、イスラエルは『啓蒙論争』に「反ホッブズ主義と近代の創造」（Anti-Hobbesianism and the Making of 'Modernity'）と題された章を書いて再反論を行い、あくまでホッブズの限界を主張していたのである。

イスラエルとマルコムの論争は、様々な研究対象を扱う双方の大著の中で埋もれてしまっているが、〈急進的啓蒙〉とは何であるのかを問い直す重要な視点を見せている。そこで本稿では、この見えにくい論争を再構成し、〈急進的啓蒙〉をホッブズ研究の視点から再考したい。

1. 論争

1. 1. イスラエルによる問題提起

イスラエルは最初の大著『急進的啓蒙』において、特に宗教面におけるホッブズの〈急進性〉を否定し、またホッブズの政治論の非民主的性格を示した上で、ホッブズではなくスピノザこそが〈急進的啓蒙〉に貢献したと強調する。

先述の通りイスラエルは啓蒙思想を、哲学により無知と迷信を克服しながらも旧来の価値を全面的には否定しない〈穏健な啓蒙〉と、旧来的価値を全面的に否定する〈急進的啓蒙〉（Radical Enlightenment）の二つに分ける（Israel 2001, 11）。そして彼は、ホッブズの影響力が過大評価されているが、スピノザこそ〈急進的啓蒙〉として評価すべきだと主張する。

> しかしホッブズの政治学、教会権力や検閲に対する態度を鑑みると、（彼自身が認めているように）哲学的にさほど大胆でも包括的でもなかったの

とあわせて、ホッブズはスピノザほどには急進的ではなく、人間、宇宙論、政治学、社会階層、セクシュアリティ、倫理学の体系的な再定義を行う源泉でも発想源でもなかったのであり、またそうはあり得なかった（Israel 2001, 159）。

特にホッブズが〈急進的〉キリスト教思想の起源であったとする先行研究に対し、イスラエルは疑問を提起する。ホッブズは、既存の権威や伝統、教会権力、社会的ヒエラルキー、君主の神権に反対する哲学的急進主義者とは言えない。なぜなら彼は、検閲に賛同した政治的絶対主義者で反自由であり、人間本性には悲観的で、高教会（High Church）に共感し、不熱心ながらも奇跡と啓示を認め、霊魂の不死性には曖昧な態度をとったからである。イスラエルが「初期啓蒙」と呼ぶ、ブリテンの理神論そして無神論に影響を与えたのは、むしろスピノザであった。たしかにホッブズとスピノザは「共通の敵」として併せて取り上げられることが多かった。だが、ブリテン理神論の第一世代と言えるチャールズ・ブラント（Charles Blount）が「スピノザの弟子」であることを誇り、広教会派（Latitudinarian）のエドワード・スティリングフリート（Edward Stillingfleet）が理神論批判においてスピノザの『神学政治論』を匂わせたように、スピノザこそ決定的であった（Israel 2001, 601-603）。

またイスラエルは、フランスの『百科全書』に編集者のドニ・ディドロ自らが書いた項目「ホッブズ主義」（HOBBISME）には、ホッブズの思想に対する関心も共感も見られないと指摘する。ディドロはホッブズの見解、すなわち臣民と市民には差異が無く、市民が国家に無条件に服従し、主権者が思想と表現の自由を否定するという見方を、忌み嫌ったというのである（Israel 2001, 602）。ただし、イスラエルはディドロの具体的な記述を検討しているわけではない。

1. 2. マルコムによる反論

これに対しマルコムは、「ホッブズとヨーロッパ文芸共和国」にて反論を試みる。ホッブズが宗教論および教会権力論において、同時代における「最も急進的な批判者」の一人であり、しかも急進派だけでなく穏健な主流派にも影響を与えているので、スピノザよりも影響力はより広範かつ大きかったとマルコムは指摘する（Malcolm 2002, 536-537）。そして、ホッブズの宗教論に焦点を絞り、徹底した文献調査によってその影響の程度を示す。特に彼は、ホッブズ（やスピノザ）の〈急進的〉イメージを作ったのは批判者たちであると強調し、イスラエルの急進性理解に疑問を投げかける。

ホッブズのラテン語による著作は17世紀後半のヨーロッパ大陸において広く流通しており、特に『市民論』については各国語訳（仏訳、蘭訳など）も作られるなど、大きな存在を占めていた（Malcolm 2002, 459-469）。またホッブズの著作はカトリックやカルヴァン派から批判され禁書にされるほど読者を獲得しており、ホッブズへの批判がかえってホッブズへの関心を高めていた（Malcolm 2002, 469-472）。そしてフランス亡命中のホッブズを迎え入れた哲学者マラン・メルセンヌ（Marin Mersenne）が1642年に『市民論』の写しを配付した後、カトリックやプロテスタント（ルター派やカルヴァン派）は政治と神学（特に政教関係）の両面からホッブズを批判した（Malcolm 2002, 472-476）。

ただしマルコムは、ホッブズは当初「無神論者」ではなく、「無差別主義」（indifferentism）の持ち主として批判された、と主張する。無差別主義とは、キリスト教信仰の根本さえ維持されるなら宗派の違いは重視しないという考えである。正統派は、エラストゥス主義者（Erastian、霊的権力が世俗権力に従属）、合理主義哲学者、世界教会主義者（ecumenist）、和協神学（irenicist）の総称かつ蔑称として、この語を用いた。なおホッブズに対しては、混合主義（syncretism）の語も用いられた（Malcolm 2002, 478-480）。

しかし1670年代にホッブズへの批判は、異端や無宗教、無神論へとシフト

した。マルコムによるとその一因には、スピノザ『神学政治論』（1670）の発刊によって、批判者がスピノザの問題点、すなわち①奇跡の信仰を毀損する「極端な自然主義」（extreme naturalism）と、②啓示への信仰を毀損する「急進的な聖書批判」（radical biblical criticism）をホッブズと関連付け、問題の根源をホッブズに求めたたことにあった[4]。つまりスピノザの登場により、ホッブズの無神論的側面へ注目が集まった、というのである。こうしてホッブズとスピノザを抱き合わせて批判するのが、お決まりの批判スタイルとなったのだ[5]（Malcolm 2002, 477-478, 480-481）。

マルコムによれば、スピノザの聖書批判はホッブズから直接影響を受けているものの、宗教に関する二人の社会政治的分析は、親和性の高さを指摘できるのみである。そしてこれら以外のスピノザの政治的言説は、正統説に対する〈急進的〉主張とは言えない。むしろ〈急進的〉伝統は、正統説の擁護者達によって構築されたというのである。マルコムは、イスラエルが「ヨーロッパ初期啓蒙最大の知的論争」（Israel 2001, 382）と呼んだ、反悪魔主義、反聖書主義を展開するバルタザール・ベッカー（Barthasar Bekker）『魔法をかけられた世界』（*De betoverde weereld, The World Bewitched*）出版後の反応に注目する。どの批判者達も、著者ベッカー本人が否定するにもかかわらず、ホッブズをベッカー説の根元の一つだと見なしていた。つまり批判者は〈急進的〉言説をホッブズと結びつける傾向にあったのである（Malcolm 2002, 484-486）。

マルコムは、キリスト教の正統説に反する、あるいは攻撃するような秘密文

4　マルコムは、ホッブズとスピノザに対する「無神論」批判には、3つの要素があると指摘する（Malcolm 2002, 482-484）。

①「合理主義」（rationalism）：人間理性は霊的知識より上である。

②「自然主義」（naturalism）：無形の精神を否定、神も有形である（物質主義 materialism）。

③「反聖書主義」（anti-scriptualism）：聖書の正当性を否定、特にモーセ五書（Pentateuch）の著者はモーセではない。

5　なお、ホッブズとスピノザだけでなく、理神論者のエドワード・ハーバート（Edward Herbert）も一緒に批判された（Malcolm 2002, 481）。

書（多くは匿名）に対するホッブズの影響を考察する。先行研究はホッブズの影響力には懐疑的であり、特にイスラエルは、絶対主義および既成権威を擁護するホッブズは〈急進的〉思想たりえなかったとする（Israel 2001, 603）。これに対しマルコムは、地下文書サークルのメンバー内でホッブズへの興味は存在しており、ホッブズの君主制、絶対主義擁護はさほど問題ではなかったと論じる。広く流布したいくつかの地下文書にはホッブズの宗教論からの影響が強く見られ、読者はホッブズのアイディアとは知らずに彼の〈急進的〉宗教論に触れていたと言うのである（Malcolm 2002, 488-493）。

そしてマルコムは、ディドロが『百科全書』に書いた、ホッブズに関する項目（特に「市民」（Citoyen）と「自然法」（Droit naturel））に注目する。ヤコブ・ブルッカー（Jacob Brucker）が『批判哲学史』（*Historia critica phiosophiae*）に残した記述に基づき本項目を執筆したディドロだが、ホッブズに対するブルッカーの批判は取り除き、ホッブズを「洞察力があり深遠な思想家」だと評していた。そしてディドロは、ホッブズの反キリスト教的〈急進〉思想ではなく、その心理分析のスタイルと、自然法と社会組織の理論を構築する方法を評価していた。（地下ではなく）「地上」出版の世界ではホッブズが無神論者で危険との認識が強く、「フランス啓蒙の急進的哲学者達は、主にホッブズの非急進的側面に関心を持っていたよう」なのである（Malcolm 2002, 495）。

さらに『百科全書』の執筆陣の一人であるジャン＝マルタン・ド・プラド（Jean-Martin de Prades）神父の学位論文が糾弾された際、批判者は彼を「ホッブス主義者」だと非難した[6]。しかしディドロが見るところ、プラド師が触れたのは、ホッブズの議論の中でもキリスト教信仰に無害な「主流派」に位置する部分であった。自然状態に言及するだけで「有害な」ホッブズ主義と断定してしまう、無知な聖職者たちには、そのことが理解できなかったのである（Malcolm 2002, 495-497）。

6　プラド師の論文問題とそれに対するディドロの反応については、鷲見（2022）、121-132 頁を参照。

マルコムはホッブズの政治学が如何に「主流派」であったかを論じる[7]。サミュエル・ソルビエール（Samuel Sorbière）のような「博学なリベルタン」(libertinage érudit)、カルヴァン主義者、それにカトリックの人間までもが、一般民衆の不安定な情念が暴力を生むことへの懸念から、そしてアウグスティヌス的な人間堕落観から、ホッブズの絶対主義的で権威主義的な政治理論を支持していた（Malcolm 2002, 502-508）。

そしてこの議論は、戦争状態の原因となる利己愛（amour-propre）を、生を導く利己愛へと啓蒙せよと説く、ピエール・ニコル（Pierre Nicole）の思想へと、発展的に引き継がれた。さらに、『歴史批評辞典』を書き、寛容を説くピエール・ベール（Pierre Bayle）は、ホッブズの絶対的権力論や外面的服従論を一応問題視するものの、批判のトーンは抑制的である。ただしマルコムによれば、ベールはホッブズの理論よりも、その経歴に焦点をあてている。これは、「無神論者でも人間社会の完全なる参加メンバーとして有徳に生きられる」という、ベールの理論を示すためであった。ヨーロッパの中で最も絶対主義的なホッブズ主義者達がフランスにいた中で、ベールは異質な存在であった（Malcolm 2002, 508-511）。

ただしホッブズの理論が最も影響を与えたのは、絶対主義論ではなく、オランダの共和主義と、ドイツ、オランダの自然法思想であった。スピノザもその影響下にあった。オランダではスピノザが、ホッブズの自己愛や政教理論を共和主義的に変化させて作品に取り込んだ共和主義者ド・ラ・クール（de La Court）兄弟の著作を通して、また直接ホッブズの著作を通して、その国家論や自然法論を吸収していた。プーフェンドルフの自然法理論はホッブズに少なからず負っており、分析的方法も受け継いでいる。ライプニッツはホッブズの方法に賛同しつつ政治論に難色を示したが、おかげでクリスティアン・トマジ

---

7 ホッブズに近い人物達を除けば、ホッブズの形而上学や自然哲学に対する評価は1650年代半ばには低下しており、同時期におけるデカルト主義の台頭がそれを促していた。しかしデカルト主義者達は、デカルトに欠けている政治哲学をホッブズが補ったと見ていた（Malcolm 2002, 497-502）。

ウス（Christian Thomasius）のように、ドイツ（ザクセンやプロイセン）でホッブズに興味を持つ者が生まれたのである（Malcolm 2002, 514-535）。

ホッブズはヨーロッパの「文芸共和国」（Republic of Letters）で孤立してはいなかったが、共和国の他のメンバーとは一線を画していた。まず彼は、書簡のやりとりを通じて文献学（philology）あるいは科学実験や解法に関する知識を共有するという、「文芸共和国」の一般的特徴を持ち合わせていなかった（Malcolm 2002, 537-539）。さらに「文芸共和国」の成員たる知識人は、「文芸共和国」の非政治性、すなわち外の「公の世界」あるいは政治領域とは区別された学者達の私的な領域であるという考えを、イデオロギーとして共有していた。よって知識人たちは既存の慣習や法、宗教の問題を認識していても、その知識を公にして人々に知らせることはなく、自分たちを庇護する公的領域の安定性のために「無関心」のままでいたのである（Malcolm 2002, 539-541）[8]。

一方ホッブズは、人々が情念に動かされ無知だと認識したうえで、人々の情念や無知が操作され悪用されることを最も懸念していた。そのためには誤った教説を排除し、そして権力は同意に基づくとする彼の「リベラル」かつ合理的な政治理論を人々に教える必要があったのである。こうしたホッブズの試みをマルコムは、宗教的に操作された恐怖を「主権者権力に対する理性的に正当化された恐怖」へと変える「文化変容」（cultural transformation）と評し、ホッブズはまさに「啓蒙」を追い求めていたのだとまとめる（Malcolm 2002, 541-545）。

1. 3. イスラエルによる再反論

これに対してイスラエルは、マルコムの反論から数年経った 2006 年に、〈急進的啓蒙〉に関する新たな大著、『啓蒙論争』を出版する。このなかでイスラ

8　マルコムは、ハーバーマスが『公共性の構造転換』において、権力や国家に対抗する「共和国」（公共圏）の政治的性格を強調していたことを確認している（Malcolm 2002, 539）

エルは、「反ホッブズ主義と近代の創造」と題された章を執筆し、マルコムの議論を参照しながら再反論を試みている。イスラエルは、ホッブズを今日のリベラル・デモクラシーの根源とみる近年の研究動向を踏まえ、ホッブズがデカルトら「新しい哲学」（New Philosophy）の担い手の一員であったことは認めつつ、〈急進的啓蒙〉に対するホッブズの影響は限定的であると論じる。ホッブズの主たる主張は〈急進的啓蒙〉とは相容れず、よって彼を民主主義理論の祖先とするのは難しいというのである。

イスラエルは、〈急進的啓蒙〉には「反ホッブズ主義」が不可欠であったと論じる。ディドロは『百科全書』において、ホッブズの哲学に一定の理解を示したが、結局ホッブズの悲観的な人間性観、そして反共和主義的な思想には否定的であった。たしかにホッブズはデカルト、スピノザ、ベール、ディドロらと同様に「新しい哲学」の一員であり、既存の社会構造の解明や改良に寄与していた。そしてスピノザに始まりフランス共和主義に至る〈急進的啓蒙〉の思想家達は、一方でホッブズという哲学者、そしてその哲学体系には共感しており、その反聖書主義、唯物論から刺激を受けた。他方で、人間の紛争を描くホッブズの「悲観的な」人間本性論、そして専制の擁護者としての側面には拒否反応を示した。また彼が説く主権者による教会統治にも、良心の自由に反するものとして反対した。結局彼らは、ホッブズの道徳、政治学、そして教会統治論の多くを否定したのである。『歴史批評辞典』でホッブズの項目を立てたベールに関しても、実はホッブズよりスピノザを重んじており、ホッブズへの共感も部分的で、君主制擁護者ホッブズへの批判が勝ったのである（Israel 2006, 225-229）。

イスラエルは、スピノザとの繋がりによって、ホッブズを自然主義と〈急進的〉聖書批判だと性格づけるマルコムの議論をとりあげ（Malcolm 2002, 477-478）、こうした文脈でホッブズが議論されるのは 1670 年代以降に限定されるため、ホッブズはスピノザを先取りしたとは言えないとまとめる。ベールの死後、フランスの〈急進的〉啓蒙家達はあまりホッブズに言及しておらず、また

『百科全書』でホッブズを多く取り扱ったディドロも、ホッブズへの取り組み以前に自身の唯物論哲学を形成しており、〈急進的啓蒙〉への影響は限定的であった。一方オランダでは、ド・ラ・クール兄弟やスピノザら〈急進的啓蒙〉主義者がホッブズを読み吸収していた。またドイツのルター派も「スピノザはホッブズをなぞっただけ」だと述べていた。そしてイスラエルは、こうしたオランダの共和主義者への影響を重視し、「ヨーロッパにおける〈急進〉目的でのホッブズの肯定的受容」(positive European reception of Hobbes for radical purposes)(Malcolm 2002, 486)の一例と見なす、マルコムの主張に意義を唱える。無神論、唯物論、反聖書主義でホッブズとスピノザが結びついているのは既に当時の(特に急進思想に反対する教会人の)共通認識であり、またホッブズの影響は、マキアヴェッリやデカルトの影響と並べて考えられるべきだからである(Israel 2006, 229-231)。

そしてイスラエルはホッブズを、〈急進的啓蒙〉の起点である(と彼が見なす)スピノザと比較する。ホッブズとスピノザにはいくつかの共通点がある。まず両者は、人間が自然状態において平等であり、自然権として自然的自由を持つと考えている。次に両者は、聖書の教えが服従を民衆に教えるために利用されていることを懸念し、聖職者が権力を持つのは国家だけでなく宗教にも破壊的だと考え、宗教的不和が平和を乱すことを防ぐため主権国家の必要性を強調している。しかし核心的な部分については大きな相違点があるとイスラエルは主張しており、要点をまとめると**表 1** のようになる。スピノザ、およびスピノザに連なる〈急進的啓蒙〉にとって、個人の自由が最重要であり、国家権力や主権はすべて個人自由のために存在する。これに対しホッブズは、個人自由に大きな制限を設けており、相当な違いがあるとイスラエルは考える。(Israel 2006, 231-239)。

こうしてイスラエルは、ホッブズは〈急進的啓蒙〉に多少なりとも貢献したとはいえ、スピノザほどには社会的・文化的変革をもたらさなかったのだとまとめる。イスラエルは、ホッブズはヨーロッパの啓蒙思想家にアイディアを供

表 1　イスラエルによるホッブズとスピノザの比較（Israel 2006, 231-239 をもとに筆者作成）

ホッブズ（ホッブズ主義）	スピノザ（急進的啓蒙）
自然状態における自然権は国家設立により制約	自然権は常に維持
自由は君主制においても存在	自由は民主制において大きい、非君主国ほど自由
個人自由とは主権者が妨げないことを行う自由、検閲を推奨、寛容より統一	市民の政治参加、意見表明も自由に含む（表現の自由）
主権者は法から自由、共通善による拘束も限定的	国王らは法、共通善に従う
主権者に権力集中、秩序のため個人自由を抑制	主権者は支配者ではなく立法機関・制度、主権の分散により自由を強化、国家の目的こそ個人自由
善悪の尺度は法	善悪の尺度は共通善、法は共通善を体現、共通善への服従は国王や教会への服従義務に優先

給しただけでなく、彼の取り組み自体が「啓蒙」であったとする、マルコムの見解を引用する。その上で、啓蒙が〈急進的啓蒙〉、すなわち「共通善」のために、理性のみに基づいて人間生活を組織化し、個人の自由、平等、民主主義、寛容、表現の自由を本質的価値とするものならば、ホッブズを啓蒙の源泉とすることはできないと主張する。そしてデモクラシーを拒絶したホッブズを、今日の「民主的共和主義」の「真の先達」と呼ぶことに留保をつけようとするのである（Israel 2006, 239）。

2. 考察

〈急進的啓蒙〉とホッブズをめぐるイスラエルとマルコムの論争は、宗教、哲学、政治、道徳をめぐる論争であった。宗教面においては無神論が、哲学面では機械論や唯物論が、そして政治面においては絶対主義が、道徳面では利己主義が争点であった。イスラエルは、ホッブズの哲学面や宗教面における〈急進性〉をあまり評価せず、政治面や道徳面での問題点を指摘し、ホッブズを〈急

進的〉ならざる人物として評価する。ホッブズが啓蒙思想に多少なりとも影響を与えたとはいえ、スピノザに比べればその影響力は小さく、しかもスピノザとは異なり非民主的で反自由の学説を唱えていたので、ホッブズは〈急進的啓蒙〉のむしろ対極に位置していたというのである。一方のマルコムは、啓蒙思想家が（例え明示的ではなくとも）ホッブズを参照しており、政治、宗教、哲学、道徳の全ての面において、ホッブズが〈急進的〉言説にも穏当な啓蒙思想にも貢献したことを示した。そして彼の企てそのものがまさに啓蒙であったとまとめている。

以上の論点について、イスラエル、マルコムの両名とも大量の文献調査に基づいて議論を展開した。イスラエルが注目した、オランダ（ネーデルラント）啓蒙やイタリア啓蒙の「無名」とも言える著者達のホッブズ受容は、これまでの研究において弱かった部分である。またイングランド、ブリテンに関しても、イスラエルは〈啓蒙の時代〉18 世紀だけでなく、17 世紀の思想史をも射程に収め、網羅的に分析している。一方のマルコムも、文書館に埋もれた大量の文献を読み解き、ヨーロッパにおける壮大なホッブズ受容史を描ききった。マルコムの研究によって、ありとあらゆる知識人がホッブズに言及していたことが実証され、しかもそこには傾向があることがわかったのである。このマルコムの圧倒的な研究に対し、イスラエルが「反ホッブズ主義と近代の創造」の後半部でホッブズとスピノザの比較に終始してしまったのは少々物足りない。

とはいえ、双方の徹底した研究によって、ホッブズと啓蒙思想の関係について我々の理解は更新を求められた。本節では前節でまとめた論争を、幾つかのテーマに分けて考察したい。

2. 1. ホッブズとスピノザの〈急進的啓蒙〉への貢献

ホッブズとスピノザの関係について、二人の評価は対立している。マルコムは、スピノザ政治思想の形成過程において、ホッブズは直接的ないし間接的に影響を与えていると考え、両者の近さ、そしてホッブズの重要性を指摘する。

さらに17世紀および18世紀に、二人が異端そして無神論に関して「セットで」論じられていたことを重視し、スピノザの「急進性」に対する批判の影には必ずホッブズの存在がつきまとっていたと考える。一方のイスラエルは、スピノザへの影響は限定的であり、なにより民主的な政治思想を展開するスピノザは、自由を抑圧し権威を擁護するホッブズと完全に対立していると論じる。スピノザの思想形成への影響に注目したマルコムに対し、イスラエルは影響だけでなく思想の類似性も否定したのである。

もっとも、ホッブズとスピノザの位置に関して、イスラエルとマルコムの議論は噛み合っているとは言えない。マルコムが徹底的な文献調査によってホッブズの啓蒙思想に対する影響の大きさを実証しようとするのに対し、イスラエルは影響の小ささを指摘すると同時に、そもそもホッブズが〈急進的啓蒙〉の要素を持っていなかったと反論する。イスラエルに言わせれば、〈急進的啓蒙〉の精神を胚胎しないホッブズは、後の〈急進的啓蒙〉に影響を与えることなど出来ないのであり、スピノザこそ民主的な〈急進的啓蒙〉に相応しいと議論を展開しているのである。このイスラエルの議論の運び方がはたしてマルコムへの反論として機能しているのかは疑わしい。

ホッブズとスピノザを自然主義と〈急進的〉聖書批判で結びつけるのは1670年代以降に限定されるため、ホッブズはスピノザの〈急進的〉を先取りしたとは言えない、というイスラエルの主張は、端的に言ってマルコムの論旨を誤解している。マルコムは、この事実を認めた上で、スピノザの『神学政治論』(1670)が世に出る以前には、ホッブズが無神論ではなく「無差別主義」として批判されていたことを明らかにした。ここでマルコムは、ホッブズが如何に〈急進的啓蒙〉を先取りしたのかではなく、当時のホッブズ理解においてスピノザの登場が決定的であったことを強調した。〈急進的啓蒙〉に貢献したか否かの二分法で思想家をジャッジするイスラエルと、そうでないマルコムとの間で、議論は噛み合っていないのである。

実のところイスラエルは、マルコムの言う「スピノザへの影響」を明確には

否定していない。「初期啓蒙」においてホッブズとスピノザを「極端な自然主義」（奇跡批判）と「急進的な聖書批判」（啓示批判）でセットに考えられていたとするマルコムの議論に対し、イスラエルは、1670 年代にこの見方が生じたのは「ホッブズが重要な点でスピノザを先取りしていなかったことを必ずしも意味するものではない」と述べる（Israel 2006, 229）。つまりマルコムの主張を認めているのである。イスラエルが代わりに示したのは、フランス初期啓蒙においてホッブズが無視されていたことであった。

ホッブズの「先取り」を部分的に認めるイスラエルの微妙な言い方は、オランダやフランス初期啓蒙に与えたホッブズの影響を、マルコムが重視しすぎているとの懸念によるものである。マルコムは、ホッブズの政治（政教）・道徳言説が、ド・ラ・クール兄弟らオランダの共和主義者に対して与えた影響の大きさを強調する。これに対しイスラエルは、彼らに与えたホッブズの影響は、マキアヴェッリやデカルトら他にもある影響の一つでしかないと反論する。ホッブズが「ワン・オブ・ゼム」でしかないという視点は、確かに重要である。一方でマルコムの言説が、イスラエルのスピノザ絶対視に対する対抗言説であることを忘れてはならない。後にも見るようにマルコムは、ホッブズやスピノザが同時代人にどう見られていたのかを重視する。初期啓蒙の人々にとって、ホッブズは象徴的な存在であったと、マルコムは指摘しているのである。

2. 2. ベールとディドロのホッブズ評

ホッブズについて多く語ったピエール・ベールをめぐっても、イスラエルとマルコムの見方は割れている。まず『歴史批評辞典』に「ホッブズ」の項目を立てたベールについて、イスラエルは、反君主制かつ反自然主義論者であり、その主眼はホッブズよりもスピノザにあると主張する。一方マルコムによると、寛容論者であるベールは絶対主義支持のホッブズ主義者ではなかったが、ホッブズの政治論には抑制的な対応をとっており、ホッブズの理論よりも人柄に注目していた[9]。

しかし『歴史批評辞典』（*Dictionarie Historique et Critique*; 1697）の「ホッブズ」の項目を見ると、ベールはホッブズのなかに、単なる暴政擁護以上のものを見て取っていたことがわかる。例えばベールは、ホッブズがトゥキディデス『戦史』を翻訳したことに注目する。そして、一方で自由の擁護を示しつつ、他方で僭主政敵視による小国同士の紛争そして破滅を示すことで、「君主制と聞くだけでおびえるような迷いをさます薬」にしようとしたのだと、ベールはホッブズの真意を推し量る（ベール 1984, 343 頁）。君主制に対する人々の恐怖やアレルギー、そして思考停止こそ、ベールが警戒していたものだったのである。

宗教面に関してベールは、ホッブズが単なる無神論者でないと指摘する。ベールは、「この人は無神論者とされた。しかし、ホッブズの伝記を書いた人たちは、神の本性についてこの人は極めて正統的な意見の持ち主だったと主張している」との言葉を残している（ベール 1984, 323 頁）。また、ホッブズがスコラ哲学を斥けたことを評価し、無神論者という批難の乱用や、神の権威を語る者たちとの神学に関する無遠慮な議論によって、「リベルタン」扱いという不遇を被ったと指摘する（ベール 1984, 329 頁）[10]。

こうした記述を見ると、ベールはホッブズについてニュアンスに富んだ理解をしていることがわかる。ベールは、ホッブズに対する特別の関心を持っており、彼の人柄だけでなく著作の執筆意図までくみ取り、政体に対する理解を促す存在として位置づけた。そして、「無神論」がホッブズに対するレッテル以上の何ものでもないことを指摘している。イスラエルとマルコム双方のベールおよびホッブズ理解には、疑問の余地が少なからずあるのである。

次に、『百科全書』の項目「ホッブズ主義」「市民」「自然法」でホッブズに

9　ヒュームが『イングランド史』においてホッブズに言及した際に、ベールによるホッブズの人物評を参照した、との研究がある（Russell 2008）。

10　ベールはホッブズ評にあたり、「ホッブズの生涯補遺」（Vitae Hobbianae Auctorium）という、ホッブズの資料を基にリチャード・ブラックバーン（Richard Blackburne）が補筆編纂したラテン語資料に依拠している。

ついて言及したドニ・ディドロをめぐって、イスラエルは、唯物論といったディドロの〈急進性〉にホッブズは寄与しておらず、ディドロはホッブズの政治論に反対したと主張する。一方マルコムは、ディドロはホッブズの宗教論を扱っておらず、ホッブズの社会理論を評価していたと論じる。

ただし『百科全書』においてディドロが書いたホッブズ評は、肯定とも否定とも言い難いものである[11]。「ホッブズ主義またはホッブズ哲学」(HOBBISME, ou Philosohie d'Hobbes：邦訳では「ホッブズ哲学」）の項目においてディドロはホッブズが著した複数の作品に触れる。一つは、ラテン語で書かれたこともあり広くヨーロッパに普及し、人間と習俗（mœurs）の研究だとディドロも評した『市民論』である。しかし彼はそれだけでなく、当初は英語で書かれており、フランスでの普及は限定的であった『リヴァイアサン』にも触れる。そして、イングランド内乱を機に書かれたホッブズの著作について、ディドロは以下のように語る。

> そうこうする内に、議会は宮廷と袂を分かち、内乱の火は各所に燃え上がった。主権君主（la majesté souveraine）を擁護するホッブズは、民主派（démocrates）の憎しみの的になった。こうして法が踏みにじられ、王座が揺らぎ、人々が揃って目がくらんだように残虐極まる行動へ引き入れられてゆくのを見て、彼は人間本性（la nature humaine）を悪と考え、そこから自然状態に関する彼の寓話（fable)、歴史（histoire）が生まれた。周囲の状況が彼の哲学を作ったのである。一時的な偶発事を不動の自然法則と思い込んだ彼は、人類の敵対者となり、暴政（tyrannie）の擁護者となったのである（Diderot et. al. 1765, 233, 邦訳 169 頁：訳文変更)。

このようにディドロは、ホッブズの利己的な人間本性論およびそれに基づく

---

11 ディドロについては市川（2007）も参照。

自然状態論は、①内乱という時代状況と、②そこでの出来事に普遍性を見出してしまったホッブズの誤解、この２つが生んだものだと主張する。特に２点目は、以下の言葉にも表れているように、演繹的な学問構築を志したはずのホッブズが、単一事例から普遍性を導くという方法論的過ちを犯したことに対する告発である。

> 彼が犯した間違いですらが、ありきたりな真理をつづり合わせた多くの本よりも、人間精神（l'esprit humain）の向上に寄与している。彼には体系論者（systématiques）特有の欠点があり、それは個別の事実を一般化し、巧妙に自らの仮説に合わせてしまうことだった。彼の著作を読むには、成熟し慎重な精神が必要である（Diderot et. al. 1765, 240, 邦訳 190-191：訳文変更）。

ただし以上の評価をもってして、ディドロがホッブズを批判したとまでは言えない。ディドロは「ホッブズ主義」の前半を人物評に、後半を彼の思想の紹介にあてており、それは詳細かつユニークな紹介と言える。例えばディドロは、ホッブズが主教ジョン・ブラモール（John Bramhall）と交わした自由意志論争に注目するが、自由意志ではなく、神義論、世俗権力と霊的権力のアナロジーに注目している。また、本稿で後述するスカーギル裁判に言及するのも特徴的である。ディドロは機械論、唯物論、その他数々の重要な議論の先駆者としてホッブズを評価するが、手放しの称賛ではない。

このように、ホッブズに対するディドロの評価は極めてアンビバレントなものであり、一面的に捉えられるものではない。イスラエルやマルコムは、その一面を切り取って評価しているが、我々はむしろ、ディドロがホッブズの理解者でも批判者でもあることを評価するべきである。

2. 3. 民主的ホッブズ

ここまで、イスラエルとマルコムの違いを見てきた。一方で両者は、程度の差こそあれ、今日のデモクラシーに通じる要素をホッブズのなかに認めている。

イスラエルは、民主的な要素については、ホッブズが〈急進的啓蒙〉に貢献した側面もあると認めている。ホッブズは、『法の原理』（*Elements of Law*）第 2 部第 2 章や『市民論』（*De Cive*）第 7 章において、人々の同意によってまず民主制（民会）が設立され、そこでの多数決によって貴族制や君主制が樹立されると述べる。この「始原的民主制」、および議決による貴族制・君主制設立論について、例えばリチャード・タックは、当時の共和主義者よりも共和主義的な理論としてホッブズを評価する（Tuck 1993, 310-311, 316）[12]。イスラエルはこうした「民主的ホッブズ」（democratic Hobbes）の要素が、近代の民主的共和主義者や〈急進的啓蒙〉に貢献したと指摘する（Israel 2006, 226）。イスラエルは、ホッブズが暴政を擁護しているため〈急進的啓蒙〉ではないと結論づけるものの、ホッブズのなかに民主的な側面を認めているのである。

ホッブズ研究者の間では、「民主的ホッブズ」については懸念の方が多いと言える。タックは、ホッブズが同時代の民主制論（アリストテレスの議論など参照）を批判しつつ、その後のフランス革命、そして今日に繋がるデモクラシー論を提示したと評価する（Tuck 2006）。さらに近年では、始原的民主制論、および主権とその行使の峻別に関する議論、そして人々が潜在的な主権者であり続けるというホッブズの議論をもとに、ホッブズをルソーに繋がる人民主権論として評価している[13]（Tuck 2016, 86-107）。この「民主的ホッブズ」論については、タックが根拠とした当時の共和主義的言説やアリストテレス理解などの批判的検討を通じて、懸念や反論が示されている（Hoekstra 2006; Smith

---

[12] ただしタックは同時に、ホッブズが『法の原理』において人文主義・共和主義の伝統に批判的で、チャールズ一世の統治な記述が目立つこと、そして『市民論』では議会主権や共和主義的自由を退けていたことを指摘する（Tuck 1993, 312-313, 316-317）。

[13] ただし本稿筆者は、ホッブズは潜在的主権論を『リヴァイアサン』では放棄していると考える。

2018)。現在的価値を過去に求めるタックの「勇み足」は、スピノザをデモクラシーの源泉に位置づけるイスラエルの姿に重なる。だがホッブズの民主的側面を控えめに認めるイスラエルの姿勢は、ホッブズ研究としてむしろ穏当と言えるのである。

こうした中で実はマルコムも、限定的な形ではあるものの、ホッブズの民主的側面を認めている。彼は『リヴァイアサン』の校訂者としてホッブズの他の著作と比べる中で、『リヴァイアサン』において民主制が、政体の始まりではなく、単なる一分類に変更されたと指摘する（Malcolm 2012)。そしてある講演では、デモクラシーに対するホッブズの敵愾心を強調する一方、ホッブズの思想に、同意の意義や人々を圧制者から守る国家の意義など、自由主義的要素が見られるとも主張する。法の支配（rule by law）はないが、法を通じた支配（rule *through* law）はあるというのである（Malcolm 2016)。この自由主義的要素を民主的と言いかえ可能であるならば、マルコムはホッブズのなかに、近代デモクラシーの構成要素を見出している。この点において、マルコムとイスラエルの距離は意外に遠くないのである。

2. 4. 他者評価としての〈急進的啓蒙〉

マルコムは、〈急進性〉を形成したのは、外ならぬ〈急進性〉の批判者達であると指摘した。この指摘は、思想史では往々にして、他者からのラベリングがイメージとして固定することを我々に再認識させるものである。そして同時に、ポストモダンの対抗軸として出された〈急進的啓蒙〉そのものの再考を促しているのである。

イスラエルは反ホッブズ主義（Anti-Hobbesianism）との言葉を使っているが、そもそもホッブズ主義（Hobbism）は批判者によって形成された語である。パーキンの研究によると、画期点はホッブズ主義の咎で訴追された、ダニエル・スカーギル（Daniel Scargill）の事件であった。聖職者達は彼を引き合いに出して、「ホッブズ主義」の危険を喧伝した。パーキンは、大学などにおけ

るホッブズの影響力を恐れた聖職者達の懸念が、聖職者が想像する「ホッブズ主義者」を生み出し、「ホッブズ主義」のパブリック・イメージを形成したと指摘する（Parkin 2007, 251-252）。こうした指摘は、〈急進性〉はその批判者から与えられたとする、マルコムの指摘と呼応している。

このような指摘と対照すると、「ホッブズ主義」を表題に掲げるイスラエルは、ホッブズの言説の諸要素を「ホッブズ主義」と包括している。マルコムの考える「ホッブズ主義」が同時代の人々によって形成されたホッブズ像だとすれば、イスラエルの考える「ホッブズ主義」とは、現代の我々が考える「ホッブズ的なるもの」と言えるかもしれない。どちらも、他者によって形成されたホッブズ像であることに変わりはないが、「ホッブズ主義」の語の使用に敏感かつ自覚的であるのはマルコムの方であろう。

以上の視点は、〈急進的啓蒙〉論への問い直しにも繋がる。イスラエルは、〈急進性〉をその思想の中に内在するものとみなし、テキスト内在的にそれを実証しようとした。しかしマルコムは、〈急進性〉は他者評価であると主張した。同時代の情況のなかにテキストを位置づける近年の思想史研究の方法論からみれば、マルコムの視点のほうが説得的かつ魅力的に見える。

ところでイスラエルは、ポストモダンの啓蒙攻撃に対し、啓蒙を擁護する立場をとっていた。特に関口が指摘したとおり、イスラエルは「ポストモダニズムと融合した多文化主義」を、啓蒙思想の普遍主義を破壊する存在として、名指しで批判している（Israel 2009, xiii, 邦訳 8 頁；関口 2018, 5 頁）。たしかにアイリス・M・ヤングは『正義と差異の政治』において、啓蒙の理性的な光がもたらした自由と平等の理論を、集団間の差異を超越し人々を解放する「同化の理念」と評した上で、この理念が外ならぬ被抑圧者から批判されており、むしろ集団間の差異を強調する「差異の政治」に注目が集まっていると述べる（ヤング 2020、219-222 頁）。ヤングがポストモダンなのかはさておき、少なくとも啓蒙の限界を指摘する「脱啓蒙」の立場は鮮明である。

しかし石川涼子はこうしたヤングらの声を拾った上で、「アイデンティティ

の政治」の擁護者たちが批判する啓蒙とは、一種の「わら人形」であったと指摘する。すなわち実態としての啓蒙思想は多種多様であり、彼らがイメージし批判する啓蒙とは乖離していたのである（石川 2023）。こうした声にイスラエルはどう答えるのであろうか。

他者評価としての〈急進性〉との指摘は、ポストモダンが批判する「わら人形」としての啓蒙に通じる。すなわち、反啓蒙を掲げる現代の論者達によって、啓蒙は現代でも生きながらえているのである。過去の調査により啓蒙の現代的意義を追求したイスラエルの営みは、反啓蒙的ポストモダン的言説なくして生まれなかったのである。そしてイスラエルが想定するポストモダン的なるものもまた「わら人形」であろう。思想史研究が見出してきたのは、互いが互いの「わら人形」を作り上げ、論難してきた歴史である。イスラエルはその渦中にいることに、どれほど自覚的なのだろうか。

おわりに

イスラエルはホッブズがいかに〈急進的啓蒙〉ではないのかを示そうとしたが、マルコムは〈急進的啓蒙〉そのものを問い直すことで反論を試みた。マルコムが示した他者評価の視点は、特定の思想が〈急進〉か否かを判定する、イスラエルの立論に対する強力な反論と言える。

そのうえでマルコムは最後に、ホッブズの言説を、権力に対する恐怖を宗教的恐怖から「理性的に正当化された恐怖」へと変える「文化変容」の企てであったと評し、ホッブズはまさに啓蒙を追い求めていたのだとまとめていた。ホッブズが当時どのように見られていたのかを問うたマルコムは、イスラエルとは別様に、現代を生きる我々にとってホッブズとは如何なる存在なのか、そしてホッブズの思想が我々に何を残したのかも問いかけているのである。

こうした新たなるホッブズ像の発見や提案は、イスラエルの〈急進的啓蒙〉論の登場によって可能となった。ホッブズの位置づけをめぐるイスラエル解釈には疑問の余地があるが、イスラエルへの反論を試みることでホッブズや啓蒙

思想に対する理解が深化している。これは、ホッブズの言説に対抗する多数の言説が現れた、17 世紀から 18 世紀の情況と似ているとも言えよう。それだけ、ホッブズも、ホッブズを評したイスラエルの言説も、魅力を持っているのである。

参考文献

Diderot, Denis, et al. ed. (1765) *Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* (Paris : Briasson et al.), vol. 8.〔ディドロ『ディドロ著作集〈第 2 巻〉哲学 II』小場瀬卓三・平岡昇（監修）、法政大学出版局、1980 年〕

Hoekstra, Kinch (2006) 'A Lion in the House', in *Rethinking the Foundations of Modern Political Thought*, ed. A. Brett and J. Tully (Cambridge: Cambridge University Press), 191-218.

Israel, Jonathan (2001) *Radical Enlightenment: philosophy and the making of modernity, 1650-1750* (Oxford: Oxford University Press).

Israel, Jonathan (2006) *Enlightenment Contested: Philosophy, Modernity, and the Emancipation of Man 1670-1752* (Oxford: Oxford University Press)

Israel, Jonathan (2009) *A Revolution of the Mind: Radical Enlightenment and the Intellectual Origins of Modern Democracy* (Princeton: Princeton University Press)〔J・イスラエル『精神の革命：急進的啓蒙と近代民主主義の知的起源』、森村敏己訳、みすず書房、2017 年〕

Malcolm, Noel (1991) 'Hobbes and Spinoza', in *The Cambridge History of Political Thought: 1450–1700*, ed. J. H. Burns and M. Goldie (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 530–558.

Malcolm, Noel (2002) *Aspects of Hobbes* (Oxford: Oxford University Press)

Malcolm, Noel (2012) 'General Introduction', in *Leviathan*, ed. Noel Malcolm, 3 vols (Oxford: Clarendon Press), vol. 1: Editorial Introduction, pp. 1-196.

Malcolm, Noel (2016) 'Thomas Hobbes: Liberal illiberal', *Journal of the British Academy*, 4, 113–136.

Smith, Sophie (2018) 'Democracy and the Body Politic from Aristotle to Hobbes', *Political Theory* 46(2), 167–196.

Springborg, Patricia (2004) 'The Enlightenment of Thomas Hobbes', *British Journal for the History of Philosophy*, 12:3, 513-534.

Parkin, Jon (2007) *Taming the Leviathan: The Reception of Political and Religious Ideas of Thomas Hobbes in England 1640-1700* (Cambridge: Cambridge University Press).

Russell, Paul (2008) *The Riddle of Hume's Treatise: Skepticism, Naturalism, and Irreligion*. (Oxford: Oxford University Press).

Tuck, Richard (1993) *Philosophy and Government 1572-1651* (Cambridge: Cambridge University Press).

Tuck, Richard (2006) 'Hobbes and Democracy', in *Rethinking the Foundations of Modern Political Thought*, ed. A. Brett and J. Tully (Cambridge: Cambridge University Press), 171–190.

Tuck, Richard (2016) *The Sleeping Sovereign: The Invention of Modern Democracy* (Cambridge: Cambridge University Press)

石川涼子（2023）「アイデンティティの政治思想と啓蒙批判」、和田泰一・髙山裕二『政治思想と啓蒙：その光と影』、ナカニシヤ出版、180-204 頁。

市川慎一（2007）『啓蒙思想の三態：ヴォルテール、ディドロ、ルソー』、新評論。

上野大樹（2021）「J. G. A. ポーコックとジョナサン・イスラエル以降の啓蒙研究の諸展開：壽里竜『ヒュームの懐疑主義的啓蒙』に寄せて」、『人文・自然研究』第 15 号、1-35 頁。

川出良枝（2018）「書評：ジョナサン・イスラエル、森村敏己訳『精神の革命――急進的啓蒙と近代民主主義の知的起源』」『社会思想史研究』第 42 号、169-173 頁。

鷲見洋一（2022）『編集者ディドロ：仲間と歩く『百科全書』の森』、平凡社。

関口佐紀（2018）「啓蒙の複数化と歴史家の問いの行方：J. イスラエル『精神の革命』をめぐって」第 13 回一橋哲学・社会思想セミナー（一橋大学哲学・社会思想学会）。https://hdl.handle.net/10086/30466（2024 年 10 月 18 日閲覧）

服部美樹（2009）「十七世紀ネーデルラント共和国と啓蒙：ネーデルラント・カルテジアンとスピノザ」、佐藤正志（編）『啓蒙と政治』、早稲田大学出版部。

ベール，ピエール（1984）『歴史批評辞典 II』（ピエール・ベール著作集第 4 巻）野沢協訳、法政大学出版局。

ヤング，アイリス・マリオン（2020）『正義と差異の政治』飯田文雄監訳、名古屋大学出版会。

付記　本研究は JSPS 科研費（22K13321）の助成を受けたものである。

普通话非轻声两字组声调组合的变调机理研究

——基于音高曲线调形和调高变化的分析

吴　　志　刚

0．引言

普通话有四个基本的调子，叫四声。分别是阴平（第一声）、阳平（第二声）、上声（第三声）和去声（第四声）。四声在进入语音链后，相邻的两个声调就会互相产生影响，从而导致一些声调发生变化，叫“连读变调”。普通话固有的两个字、三个字和四个字的词，从声调的角度来看，可以叫“声调组合”。其中 20 个两个字（两字组）的声调组合是最基本的组合，笔者称其为“二十调”[1]。这二十调不仅囊括了四种声调的各种基本的连读变调现象，同时还包含了四种声调在语流中的实际读音形式。因此，可以说汉语语句中的声调变化及实际读音都是以四声二十调为基础的。

表 1

两字组声调组合					
	第一声	第二声	第三声	第四声	轻声
第1声	1+1	1+2	1+3	1+4	1+0
第2声	2+1	2+2	2+3	2+4	2+0
第3声	3+1	3+2	3+3	3+4	3+0
第4声	4+1	4+2	4+3	4+4	4+0

（数字 1、2、3、4 表示四个声调；0 表示轻声。）

普通话的连读变调一般是指上声的连读变调、“一、不”的变调、“啊”的变调、重叠词的变调等。声调组合因衔接而发生变调的研究仍然集中在第三声的变化上。迄今为止，还没有人对排除区别、对比以及强调等语气下的十六个非轻声两字组声调组合进行系统全面的分析研究。本文将采用实验语音学的方法对普通

话非轻两字组声调组合进行分析，探究变调的机理特征。

1．先行研究

连读变调规律的研究是普通话两字组声调组合研究的重要组成部分。赵元任先生是早期注意到汉语连读变调现象的先驱，他在 1932 年揭示了汉语普通话两字组连读变调的规律特征，为后续研究奠定了基础。迄今为止，对单独的两字组进行调查，分析其音高现象的论著很少，林茂灿等先生的实验调查与韩军华先生的调查具有代表性。

林茂灿、林联合等人通过实验研究揭示了两个去声相连的变调规律，为普通话两字组连调规律提供了声学实验的基础。林茂灿等的研究成果如下:

(1) 阴平、阳平与其他字相连时，不存在明显的连读变调规则。

(2) 上声与其他字相连时的变调规则。

(3) 去声与其他字相连时的变调规则。

(4) “一”、“不”两字的变调规则。

2002 年韩军华在「普通话二字组词语的动态声调」一文中也对 16 个非轻声两字组作了测试。韩军华指出普通话二字组词语的声调组合方式使得前后位声调产生不同的动态变化形式。前位声调的动态变化主要表现在上声调变为低降调和中升调上，而后位声调的动态变化则表现在调值的明显改变上。后位声调的动态变化更为普遍，因此应该引起足够的重视。但是，韩军华的研究结果比较笼统，并且未就变调的机理特征加以详尽阐述。

(1) 几个基础研究问题

根据目前学者们研究所得出的结论，我们还不能很好的解释以下这些疑问:①两个不同高低升降的声调是以一种怎样的模式衔接在一起的？②在十六个非轻声两字组声调组合中，为什么只有第三声会发生变化？③为什么变调只发生在前位？④变调现象为什么只有调形变调，而没有调高变调[2]？⑤变调的原因只是为了发音省力吗？这些疑问显然有待解决。

(2) 对外汉语教学问题

在对外汉语教学中，绝大部分的学习者单独读一个声调时问题都不大，但是，几个声调连在一起读时，准确率就比较低，常常出现读错或“走调”的现象。可以说，学习者声调发音的问题主要出现在声调组合这一层次。目前，有关学习者两字组声调组合的错读现象的论文日益增多，人们从不同的视点进行各种调查研究，其结论自然也各不相同。在日本有关两字组声调组合的教材和研究还不是很多，对学习者的错读现象仍处于一种知其然而不知其所以然的程度。

笔者认为，对普通话两字组声调组合的研究，不仅在理论上有助于我们理解汉语语音的演变过程和规律，而且在实践上为汉语教学、语言处理与语言理解等方面也都提供了重要的支持和指导。

2．研究的方法

2.1 调查用语言资料

我们精选了 89 个单字音和 93 个两字组作为调查用的语音资料。每一个声调组合都有若干个两字组。这些两字组都是常用的汉语普通话词汇，其中还包括大量的“天下”和“夏天”这样的声母和韵母相同，前后位置互换后仍能成词的两字组。另外，我们的调查需要排除表示对比、区别、强调等语义的重读现象，因此我们在编排录音顺序时，尽量避免出现重读的语境。

2.2 受验者

参加语音资料录制的受验者共有十二名。主要以中国国内的电台电视台的播音员为主。他们中的很多人都受过正规严格的发音训练，因此普通话标准，吐字清晰。本文中使用的语音资料主要以国内播音员为主，其他受验者为辅[3]。

2.3 测量仪器

我们使用的是「音声录闻见」语音分析软件测试语音资料[4]。

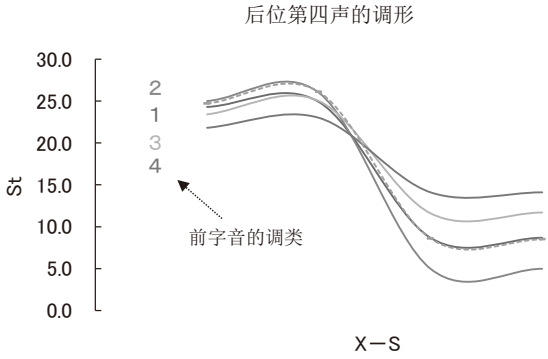
2.4 数据处理

为了使不同受验者之间的各项数据具有可比性。笔者还对得到的各项数值进行了标准化处理，使用的公式是「St=12×log2(F÷F0)」，将赫兹（Hz）转换成半音（St）数值，1(St)=11.2(Hz)。

2.5 坐标图的制作

坐标图是依据语音资料的半音数据的平均值，用 Excel 的散布图制作成的图形，这可以使枯燥的数据变为形象易懂的可视资料。

坐标图 1

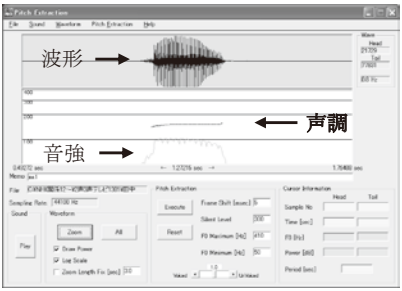


2.6 语图

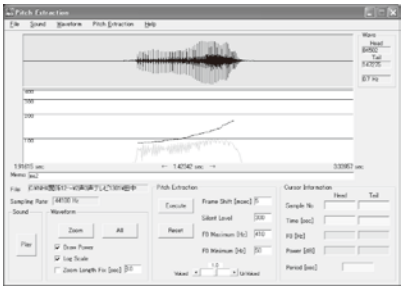
用「音声录闻见」语音分析软件测试语音资料后，将所有语音资料制作成语音资料图（语图）。通过语图我们能够最直观地分辨出各声调的高低、升降变化。做到了可以一目了然地分辨出相同声调在不同的声调组合中的各种变化。

语图中自上而下有三个图形，分别是声音的波形、音高曲线（声调）和音强。单独读一个声调时，音高曲线的形状与拼音中的调号相似，其在音域中的高低，以及由起点到终点的升降变化通过肉眼就可以一目了然。

第 1 声 mā

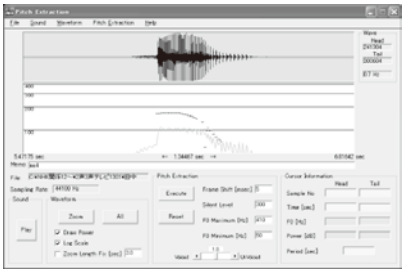


第 2 声 má



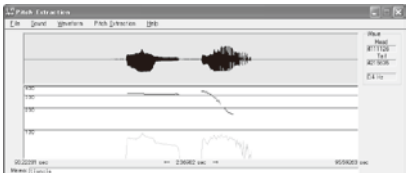
第 3 声 mǎ [5]

第 4 声 mà

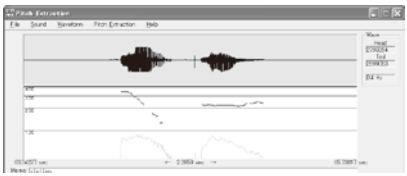


两字组的语图也是如此。如:下面左边的语图是前位第 1 声、后位第 4 声的「1+4」组合，例词:“天下”; 右边的语图是前位第 4 声、后位第 1 声的「4+1」组合，例词:“夏天”[6]。受验者 F 录制。

「1+4」天下 F

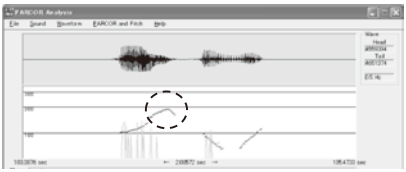


「4+1」夏天 F

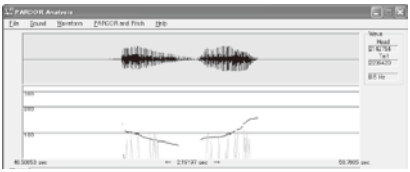


下面左边的语图前位是第 2 声、后位是第 3 声的「2+3」组合，例词:“玩儿好”; 右边的语图是前位第 3 声、后位第 2 声的「3+2」组合，例词:“好玩儿”。受验者 K 录制。

「2+3」玩儿好 K [7]



「3+2」好玩儿 K



其他声调组合以此类推。声调组合中前后字音的高低和升降变化就是我们重点要观察的两种音高现象。

3．调查结果

研究两字组声调组合的变调现象会涉及到调类、前后位置、变调形式以及它们之间的关系。因此，我们将从调类，前后位置以及声调变化形态等多个角度对语图中的音高曲线进行对比分析 [8]。

3.1　调类与变调组合

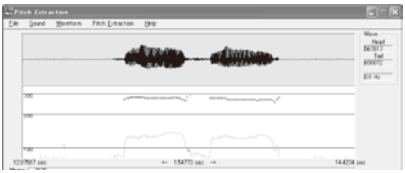
首先，我们逐一对普通话的四个调类进行了调查。

3.1.1　第一声

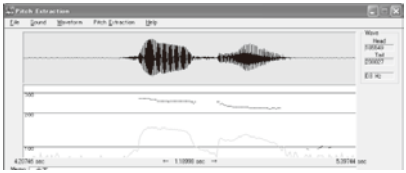
(1) 前位第一声

前位是第一声的组合共有「1+1」、「1+2」、「1+3」、「1+4」四个组合。第一声在前位时与单独读时没有什么差异。因此，第一声在这四个组合中都没有发生变化。

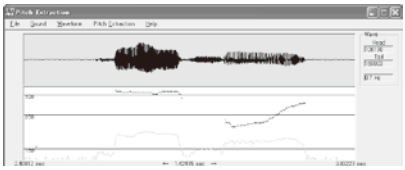
「1+1」阴天 A



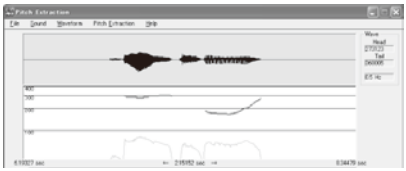
「1+1」今天 B



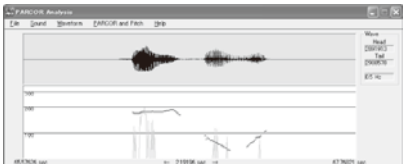
「1+2」天晴 C



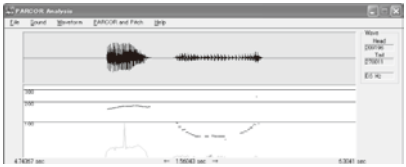
「1+2」天晴 D



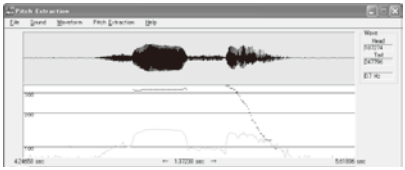
「1+3」天好 K



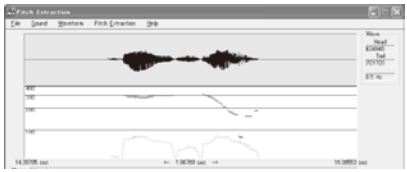
「1+3」阿斗 J



「1+4」新宿 C



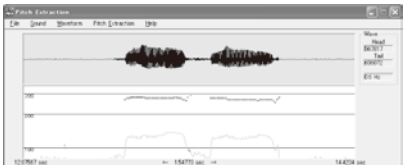
「1+4」天下 D



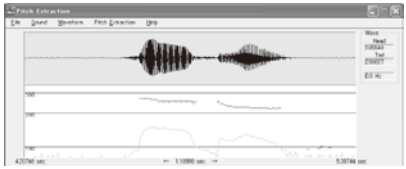
(2) 后位第一声

后位是第一声的组合共有「1+1」、「2+1」、「3+1」、「4+1」四个组合。只有「4+1」组合中后位第一声出现明显的整体下降的趋势。其他的第一声与单独读时没有什么差异。

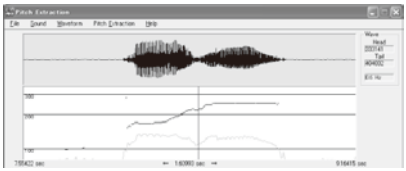
「1+1」阴天 A



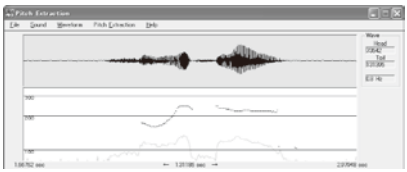
「1+1」今天 B



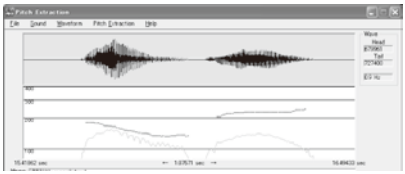
「2+1」mámāA



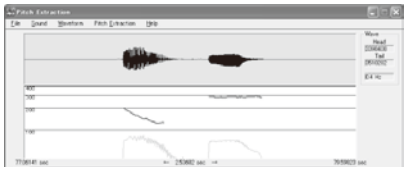
「2+1」晴天 B



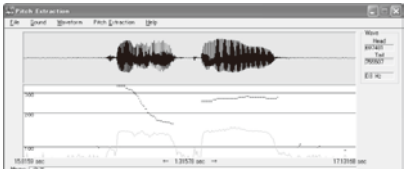
「3+1」广州 E



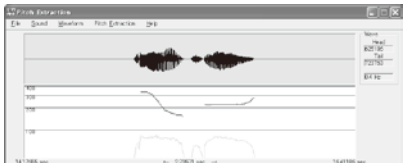
「3+1」好听 F



「4+1」做工 C



「4+1」浙江 D



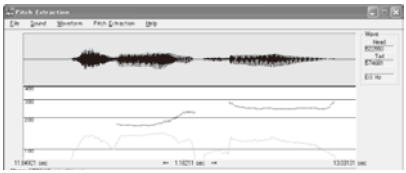
总之，含第一声的共七个声调组合，只有「4+1」组合中后位第一声会发生明显变化。

3.1.2　第二声

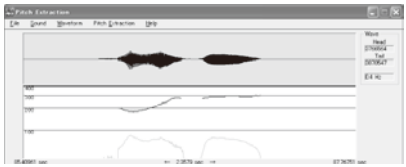
(1) 前位第二声

前位是第二声的组合共有「2+1」、「2+2」、「2+3」、「2+4」四个组合。第二声在前位时与单独读时没有什么差异。因此，第二声在这四个组合中都没有发生变化。

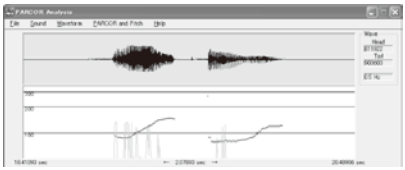
「2+1」晴天 E



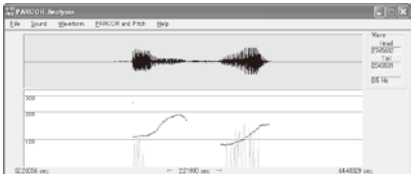
「2+1」学医 F



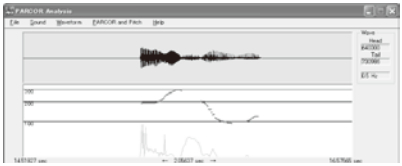
「2+2」学童 G



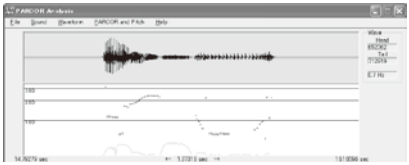
「2+2」文学 K



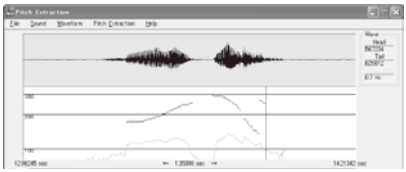
「2+3」昂首 I



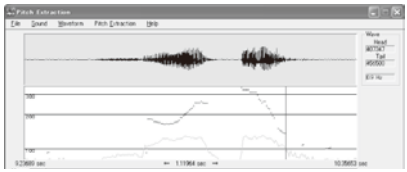
「2+3」昂首 J



「2+4」学会 A



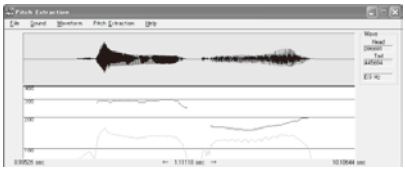
「2+4」学会 B



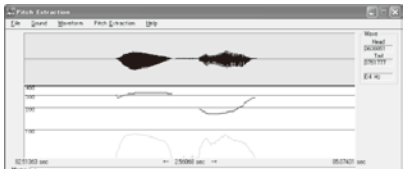
(2) 后位第二声

后位是第二声的组合共有「1+2」、「2+2」、「3+2」、「4+2」四个组合。「1+2」、「2+2」组合后位第二声都与单独读时没有什么差异，第二声在这两个组合中也都没有发生变化。

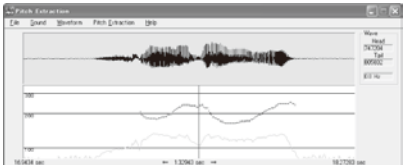
「1+2」风格 E



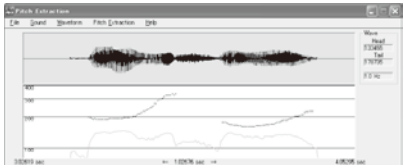
「1+2」医学 F



「2+2」学文 C

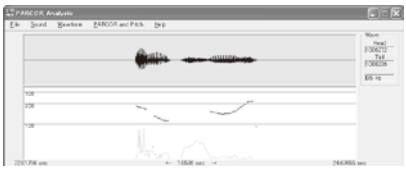


「2+2」文学 E

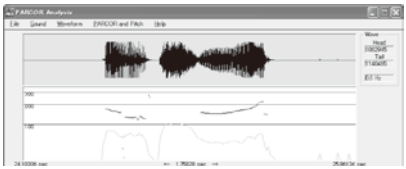


在「3+2」、「4+2」组合中，后位第二声出现整体下降的趋势。特别是「4+2」组合中后位第二声的起点与前位第四声的终点一样低。

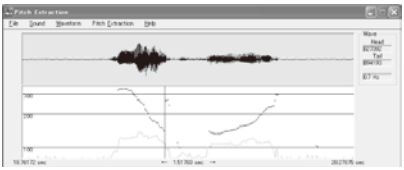
「3+2」把持 I



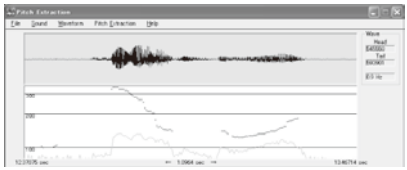
「3+2」把持 J



「4+2」作成 A



「4+2」作成 B

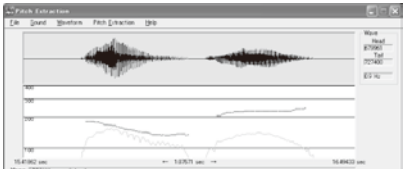


总之，含第二声的七个声调组合，「3+2」、「4+2」组合后位第二声会发生较明显的高低变化。而其他组合中的第二声都与单独读时相差不大。

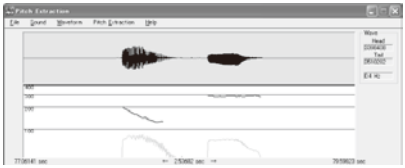
3.1.3 第三声

(1) 前位第三声

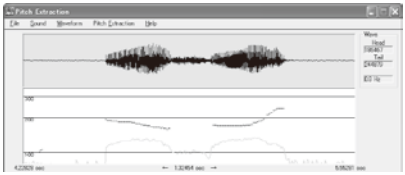
「3+1」广州 E



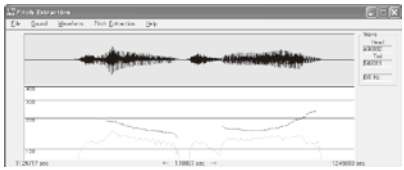
「3+1」好听 F



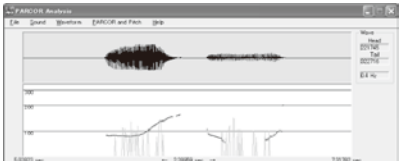
「3+2」我学 C



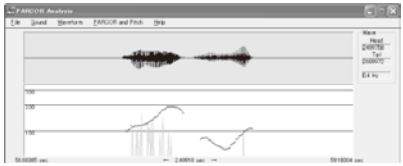
「3+2」酒泉 E



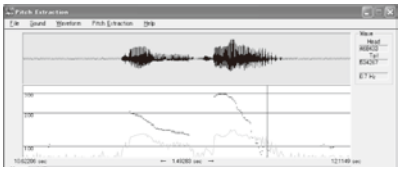
「3+3」我你 G



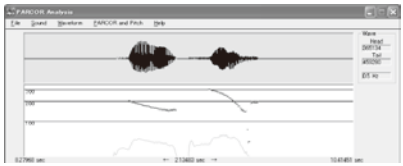
「3+3」你我 K



「3+4」主座 C



「3+4」主座 D



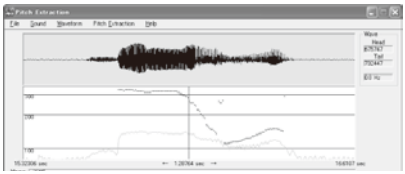
前位是第三声的组合共有「3+1」、「3+2」、「3+3」、「3+4」四个组合。第三声在前位时都会发生变化，与单独读时相差很大。

(2) 后位第三声

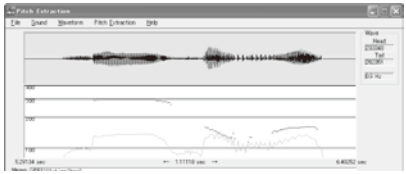
后位是第三声的组合共有「1+3」、「2+3」、「3+3」和「4+3」四个组合。第三

声在后位时，与单独读时没有什么差异。因此，第三声在这四个组合中都没有发生变化。

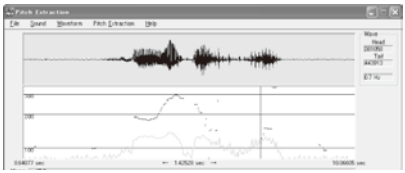
「1+3」天暖 C



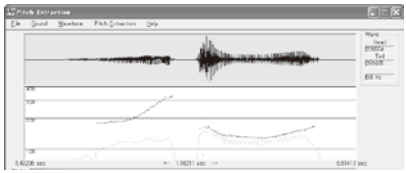
「1+3」听好 E



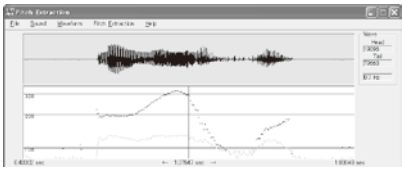
「2+3」福岛 C



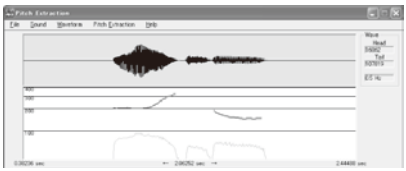
「2+3」福岛 E



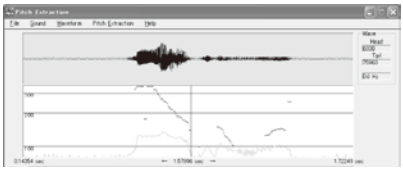
「3+3」mǎmǎ C



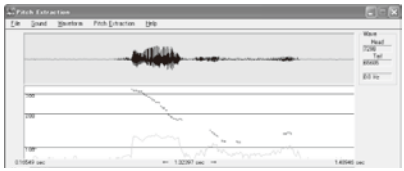
「3+3」鸟取 D



「4+3」作主 A



「4+3」作主 B



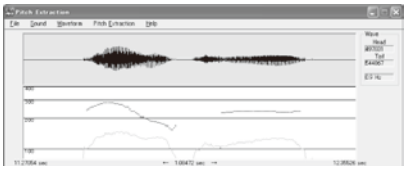
总之，我们这次的调查研究也证明了，第三声在前位时都会发生变化，但「3+3」组合前位第三声的变化形式与其他组合不同。第三声在后位时都不会发生变化。

3.1.4 第四声

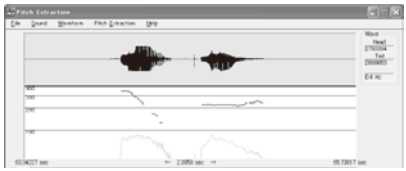
(1) 前位第四声

前位是第四声的组合共有「4+1」、「4+2」、「4+3」、「4+4」四个组合。当后位是第一声和第二声时，前位第四声与单独读时没有什么差异。

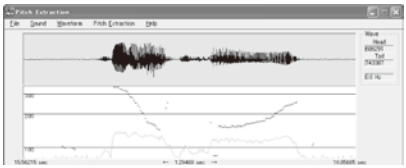
「4+1」外资 E



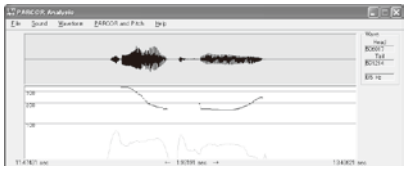
「4+1」夏天 F



「4+2」作成 C

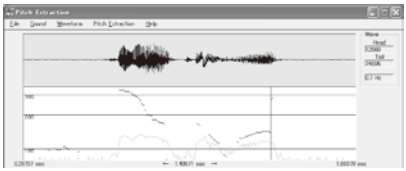


「4+2」作成 D

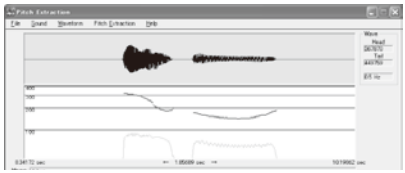


当后位是第三声和第四声时，前位第四声全降调的特征会发生变化。

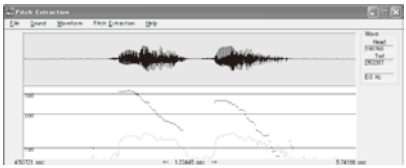
「4+3」作主 C



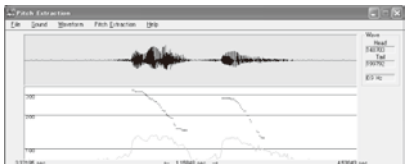
「4+3」大阪 D



「4+4」做作 A



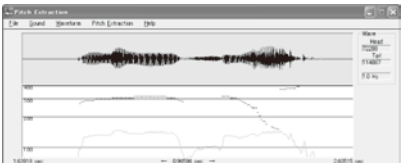
「4+4」做作 B



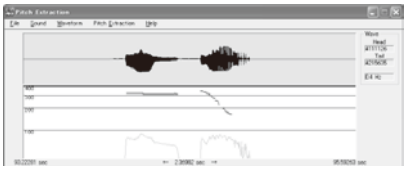
(2) 后位第四声

后位是第四声的组合共有「1+4」、「2+4」、「3+4」、「4+4」四个组合。第四声在后位时与单独读时没有什么差异。因此，第四声在这四个组合中都没有发生变化。

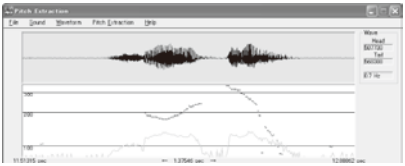
「1+4」工作 E



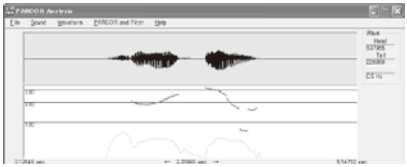
「1+4」天下 F



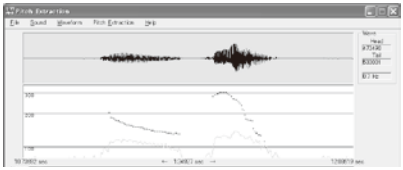
「2+4」学会 C



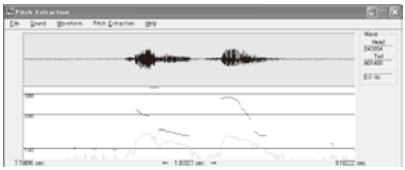
「2+4」学会 D



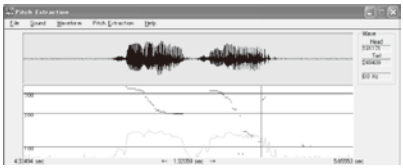
「3+4」主座 A



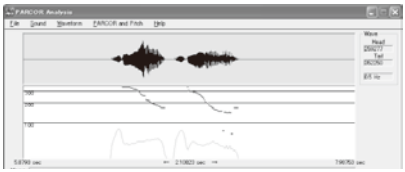
「3+4」主座 B



「4+4」做作 C



「4+4」做作 D



总之，含第四声的七个声调组合，第四声在后位时与单独读时没有什么差异。第四声在前位时，四个声调组合都有变化，但发生变化的并不都是第四声。在「4+1」、「4+2」组合中，发生变化的是后位的第一声和第二声;而在「4+3」、「4+4」

组合中，发生变化的才是前位的第四声。

综上所述，与单独读的四个声调相比较，我们在调查中发现：(1) 每一个调类在非轻声两字组声调组合中，都具有变化和不变化两种连读现象。由它们构成的十六个非轻声两字组声调组合，自然包含了变化组合和不变化组合两大类；(2) 第一声和第二声在前位的八个组合不仅前位的第一声和第二声自身不会发生变化，而且也不会影响后面的声调发生变化；(3) 第三声和第四声在前位时的八个组合，前位是第三声的组合都是第三声发生变化；前位是第四声的组合，有些是第四声自身发生变化，还有一些则是另一个声调发生变化。

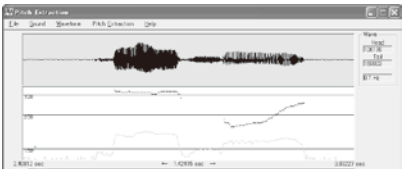
3.2 前后位置与变调

相同的两个声调可以组合成前后位置相反的两个两字组声调组合，如用第一声和第四声可以组合成「1+4」组合和「4+1」组合，用第二声和第三声可以组合成「2+3」组合和「3+2」组合等等。比较这些组合，可以使我们了解前后位置与声调的变化关系。

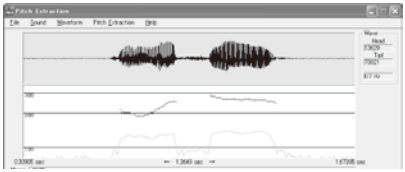
(1)「1+2」和「2+1」

第一声是高平调，调值是 55。第二声是中升调，调值是 35。

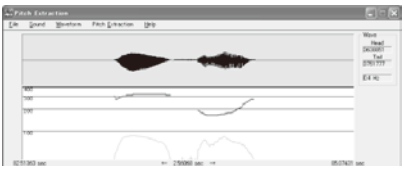
「1+2」天晴 C



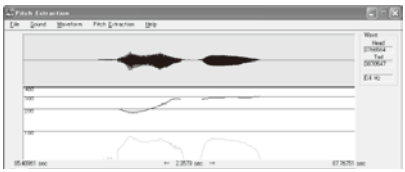
「2+1」昨天 C



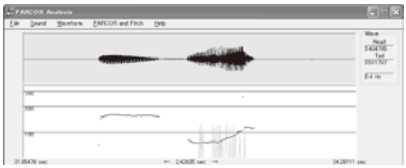
「1+2」医学 F



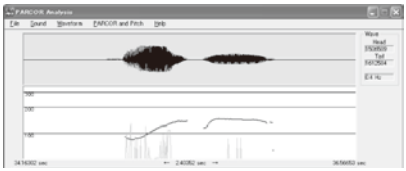
「2+1」学医 F



「1+2」医学 G



「2+1」学医 G

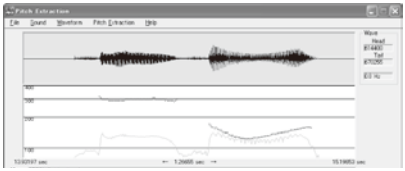


语图显示出「1+2」和「2+1」组合，第一声和第二声不管谁在前谁在后，都没有因为连读而发生调形或调高上的变化。

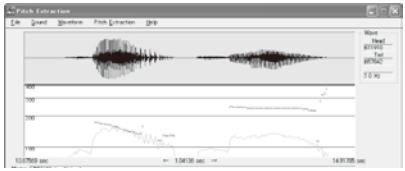
(2)「1+3」和「3+1」

第一声是高平调，调值是 55。第三声是曲折调，调值是 212。

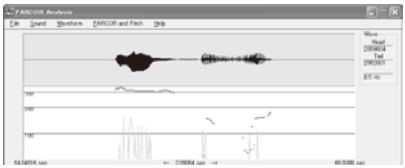
「1+3」天好 E



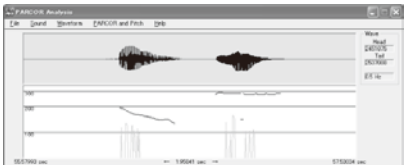
「3+1」好天 E



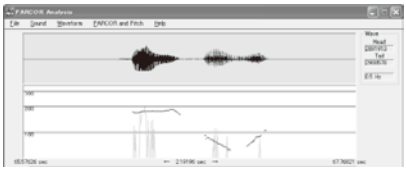
「1+3」天好 F



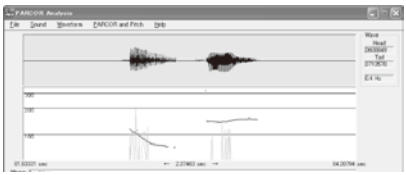
「3+1」好天 F



「1+3」天好 K



「3+1」好天 K



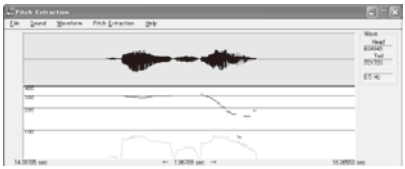
前位是第三声的组合一定是变调组合。语图显示，「3+1」组合前位第三声的调形与曲折调有很大的差异，音高曲线只是一条较短的、下降的形状，第三声后

面上升的部分发生脱落现象。调值由 212 变为 21。「1+3」组合不变调。

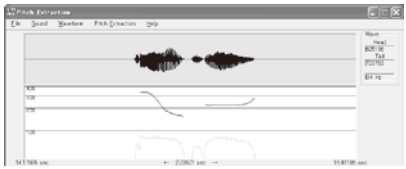
(3)「1+4」和「4+1」

第一声是高平调，调值是 55。第四声则是全降调，调值是 51。

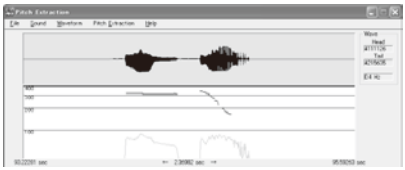
「1+4」天下 D



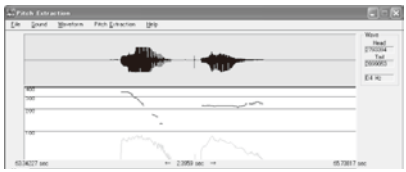
「4+1」浙江 D



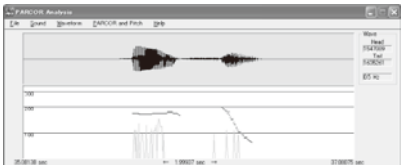
「1+4」天下 F



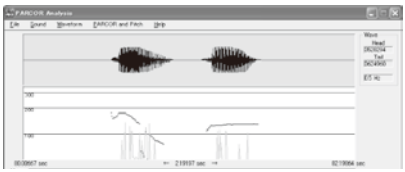
「4+1」夏天 F



「1+4」他是 K

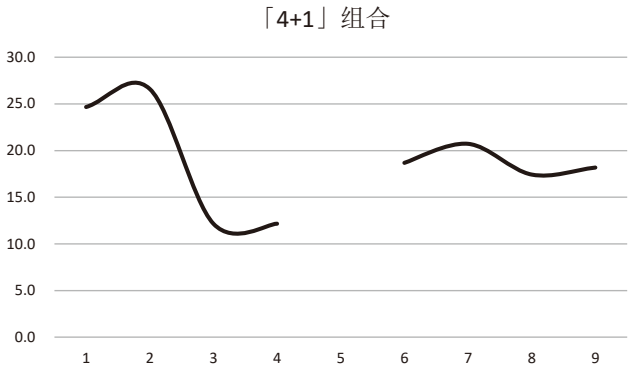


「4+1」màmāK



前位是第四声的组合一定是变调组合，但是，发生变化的不一定是第四声。语图显示，在「4+1」组合中，变化的不是前位的第四声，而是后位的第一声。调值由 55 变为 33。

坐标图 2



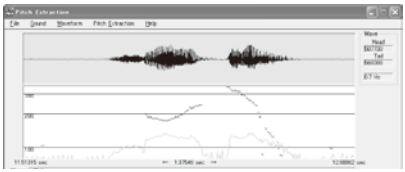
坐标图 2 使我们更清楚地看到后位第一声与前位第四声的起点高度有很大差异，如果第四声起点高度是 5 的话，后位第一声的整体高度只能说是 3 左右，整体高度下降明显。由此，我们认为，第一声整体下降是「4+1」组合的衔接特征，从而进一步证明:①两字组声调组合中第一声也存在着变调现象;②两字组声调组合的变调现象有可能发生在后位声调上;③两字组声调组合的变调不仅会出现调形变化，还会出现调高变化。

(4)「2+4」和「4+2」

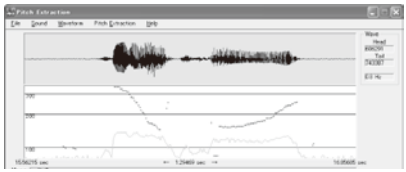
第二声是中升调，调值是 35。第四声是全降调，调值是 51。

第四声在前位时的组合一定是变调组合，但是正如「4+1」组合那样，发生变化的不是前位的第四声，而是后位的第二声。后位第二声的调形虽然没有发生变化，仍然是呈上升的趋势，但是它的起点高度与前位第四声的终点高度基本等高。调值由 35 变为 13。

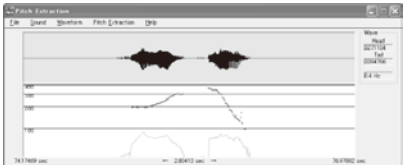
「2+4」学会 C



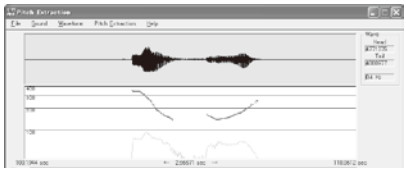
「4+2」作成 C



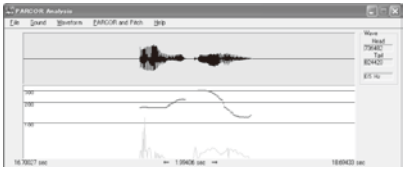
「2+4」学会 F



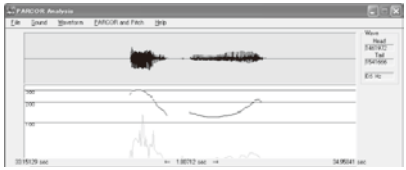
「4+2」会学 F



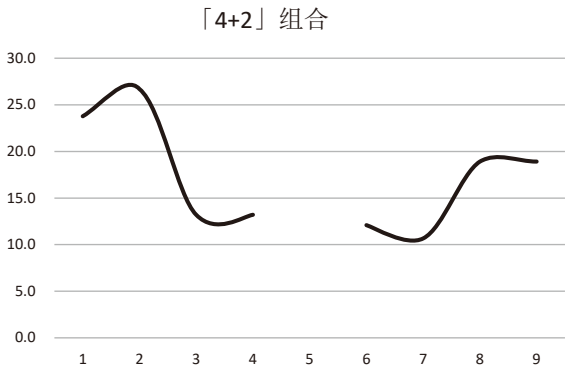
「2+4」昂贵 I



「4+2」爱国 I



坐标图 3



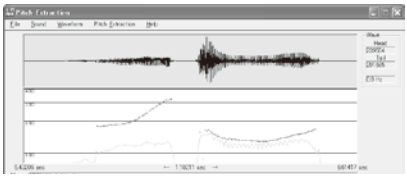
坐标图 3 使我们更清楚地看到后位第二声起点的高度与前位第四声终点的高度大体一致。如果前位第四声终点高度是 1 的话，后位第二声起点高度也应该是

1，并且第二声终点高度大致在 3 的位置，即整体高度下降明显。由此，我们认为，第二声整体下降是「4+2」组合的衔接特征，从而进一步证明:①两字组声调组合第二声也存在着变调现象;②第二声在第四声后面时会发生变调;③第二声的变调是调高变调。

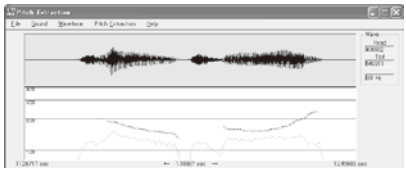
(5)「2+3」和「3+2」

第二声是中升调，调值是 35。第三声是曲折调，调值是 212。

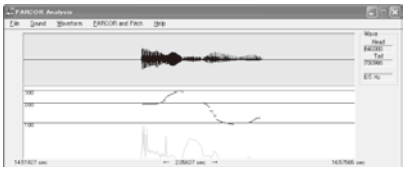
「2+3」福岛 E



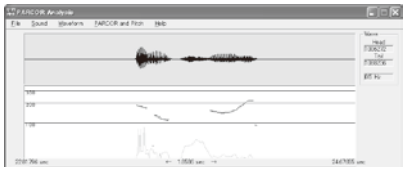
「3+2」酒泉 E



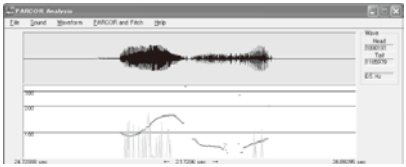
「2+3」昂首 I



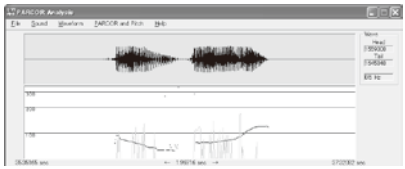
「3+2」把持 I



「2+3」学我 G



「3+2」好玩儿 G

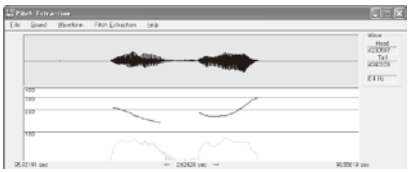


第三声在前位时的组合一定是变调组合，而且一定是前位第三声自身发生变化。语图显示，「3+2」组合中前位的第三声只是一条较短的、下降的曲线。这一点与「3+1」组合前位第三声相同。调值由 212 变为 21。但是仔细观察「3+2」组合后位的第二声，我们可以发现，后位第二声起点高度比前位第三声起点高度还要低一些。也就是说，后位第二声音高曲线出现整体下降的趋势，调值大概由

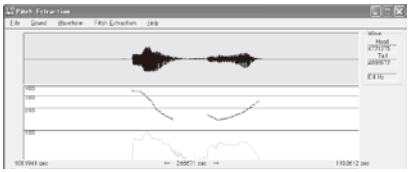
35 变为 24。可以说「3+2」组合是前后位两个声调同时发生变调现象的组合。

如果我们用「3+2」组合和「4+2」组合作比较可以发现，两个后位第二声的音高曲线具有同样的整体下降的趋势，不同的是下降程度稍有差异[9]。

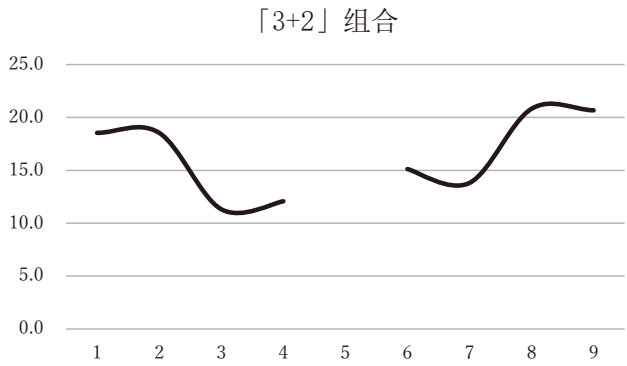
「3+2」我学 F



「4+2」会学 F



坐标图 4

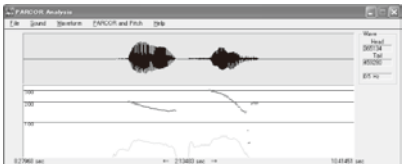


坐标图 4 使我们更清楚地看到后位第二声起点的高度与前位第三声终点的高度比较接近。如果前位第三声终点高度是 1 的话，后位第二声起点高度应该在略高于 1 的位置上，并且第二声终点高度大致在 4 的位置。由此我们认为，第二声整体下降是「3+2」组合的衔接特征之一。从而进一步证明:①「3+2」组合后位第二声也存在着变调现象;②第二声在第三声后面时会发生变调;③后位第二声是调高变调现象。

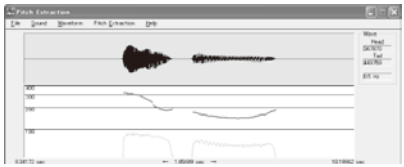
(6)「3+4」和「4+3」

第三声是曲折调，调值是 212。第四声是全降调，调值是 51。

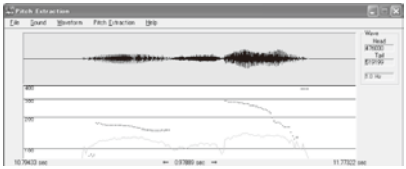
「3+4」主座 D



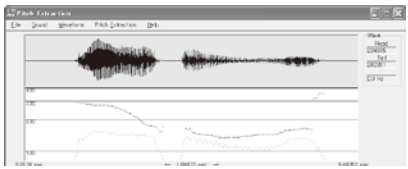
「4+3」大阪 D



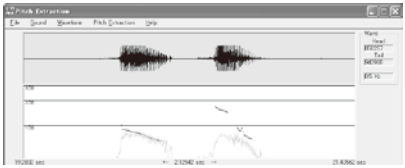
「3+4」以上 E



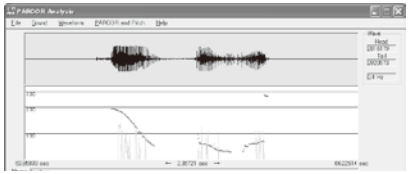
「4+3」大阪 E



「3+4」好看 G

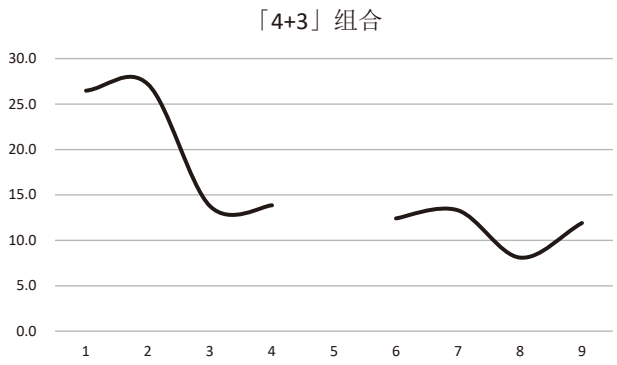


「4+3」看好 G



第三声和第四声在前位的组合都是变调组合。「3+4」、「4+3」组合都是前位的声调发生调形变调。「3+4」组合前位第三声调形只降不升，调值由 212 变为 21。「4+3」组合的语图显示，后位第三声的音高曲线一般都比前位第四声的终点低一些，也就是说，前位的第四声没有降到底，音高曲线并不是完整的第四声的音高曲线。调值由 51 变为 53。

坐标图 5



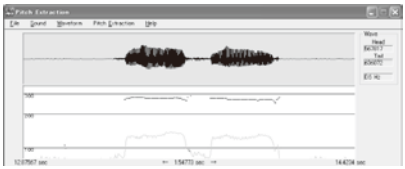
坐标图 5 使我们更清楚地看到后位第三声起点高度比前位第四声终点的高度要低一些。并且第三声接在第四声后面继续下降。如果后位第三声调值是 212 的话，那么前位第四声的调值一定不是 51。我们认为前位第四声调值定为 53 比较客观。从而进一步证明:①「4+3」组合中第四声存在着变调现象;②第四声在前位时会发生变调;③第四声的变调是调形变调。

(7) 相同声调的组合

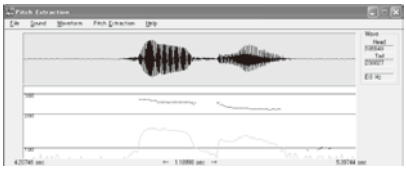
前后位由相同声调构成的组合共有四个，它们是「1+1」、「2+2」、「3+3」和「4+4」组合。

●「1+1」

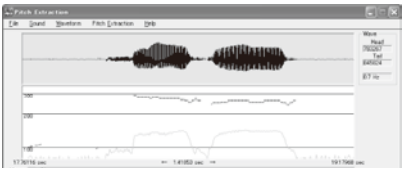
「1+1」阴天 A



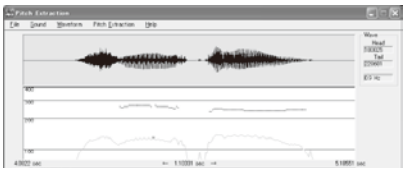
「1+1」今天 B



「1+1」天阴 C



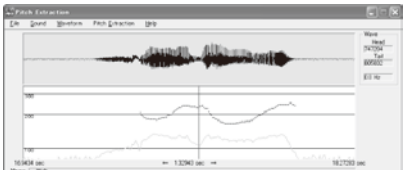
「1+1」西安 E



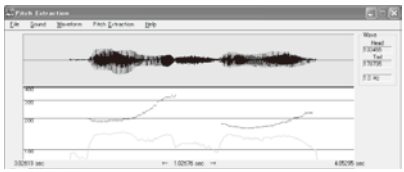
语图显示,「1+1」组合前后两个声调的音高曲线都没有因为连读而发生调形或调高上的变化。

●「2+2」

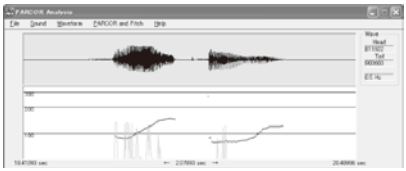
「2+2」学文 C



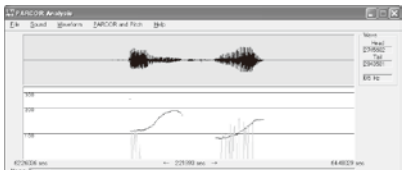
「2+2」文学 E



「2+2」学童 G



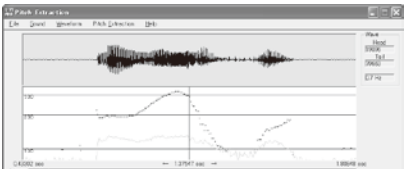
「2+2」文学 K



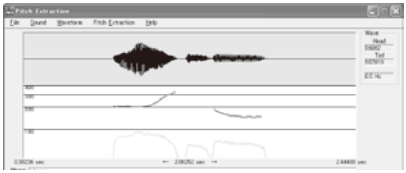
语图显示,「2+2」组合前后两个声调的音高曲线都没有发生调形或调高上的明显变化。

●「3+3」

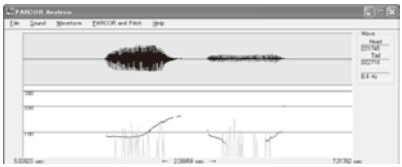
「3+3」mǎmǎ C



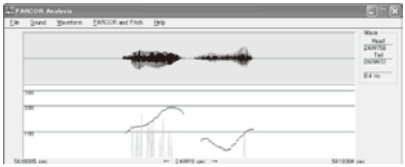
「3+3」鸟取 D



「3+3」我你 G

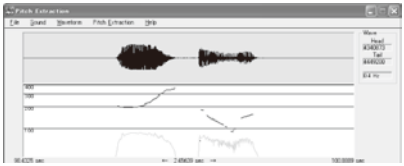


「3+3」你我 K

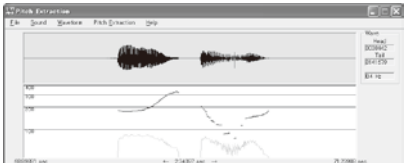


「3+3」组合前位第三声变为升调，使这个组合的实际读音与「2+3」组合非常相似。

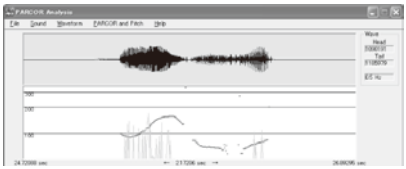
「2+3」玩儿好 F



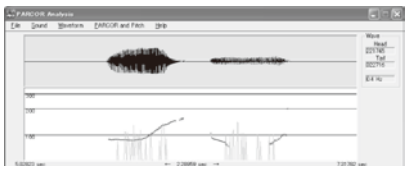
「3+3」好走 F



「2+3」学我 G



「3+3」我你 G

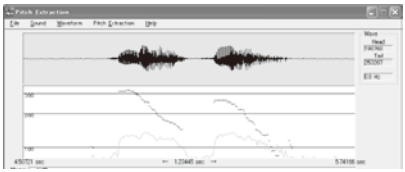


之所以两个组合的音高曲线基本一致。主要是因为前位第三声发生了只升不降的曲线变化，调值由 212 变为 35。这一结果与学者们迄今为止的结论吻合。

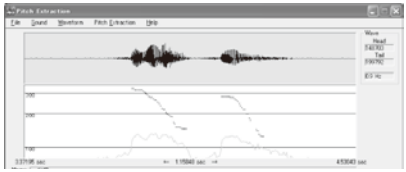
●「4+4」

语图显示,「4+4」组合前位的第四声音高曲线很容易出现降不到底的变化,调值由51变为53。虽然这种变调现象有时不太明显,但总体来说,我们认为「4+4」组合归纳在变调组合里还是比较客观的。

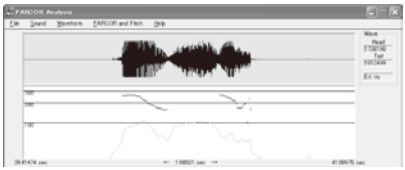
「4+4」做作A



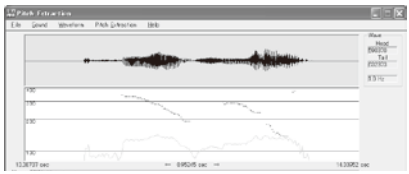
「4+4」做作B



「4+4」碍事H



「4+4」客座E



总之,由相同声调构成的两字组声调组合可以分为两大类:(1)「1+1」和「2+2」组合,属于不变调组合;(2)「3+3」和「4+4」组合,属于变调组合。

综上所述,变调现象与声调组合中的前后位置有一定关系。我们知道第三声和第四声在前位的八个组合都是变调组合,但是变调的位置并不都发生在前位声调上。通过对调类与前后位置的比较调查发现:(1)第三声和第四声在前位时才会发生变调现象;(2)第一声和第二声也会发生变调现象,但都是在后位时才会发生变调现象;(3)各调类的变调与所依存的声调组合的关系大致有以下几种:①第一声只在「4+1」组合中发生变调;②第二声在「3+2」、「4+2」组合中发生变调;③第三声在前位时都发生变调;④第四声在「4+1」、「4+2」组合中自己不变,后位的第一声和第二声发生变调;在「4+3」、「4+4」组合中前位自身发生变调;(4)「3+2」组合是唯一一个前后位同时变调的组合。

3.3 变调形式与位置、调类的关系

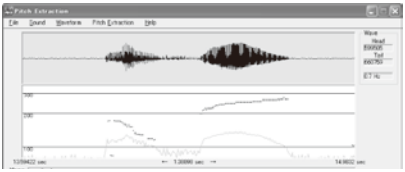
调查显示，两字组声调组合的变调现象，可以通过变调形式、调类、前后位置以及组合关系上发现它们的规律。

3.3.1 变调形式

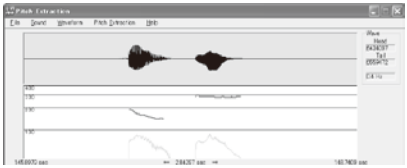
变调形式指的就是声调组合中各音高曲线的变化形式。调查显示，十六个非轻声两字组声调组合有调形变调和调高变调两种音高曲线的变化形式。

(1) 调形变调

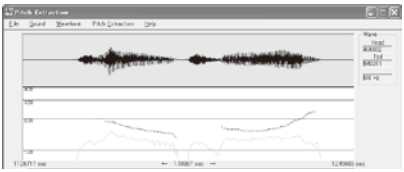
「3+1」组合



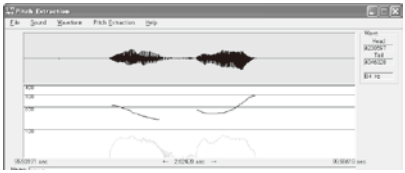
「3+1」组合



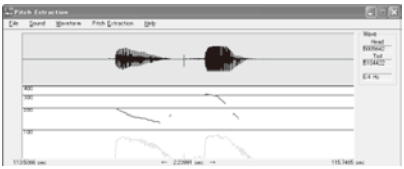
「3+2」组合



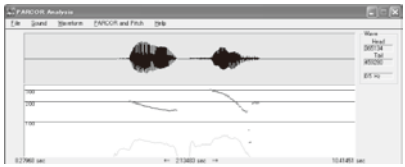
「3+2」组合



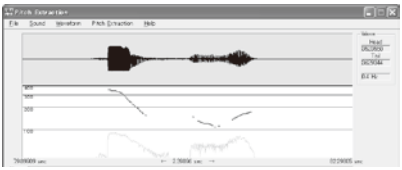
「3+4」组合



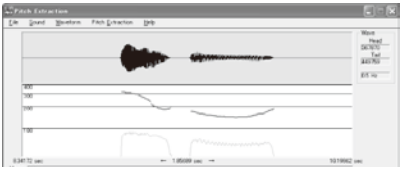
「3+4」组合



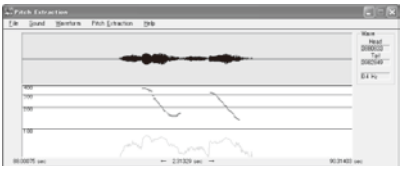
「4+3」组合



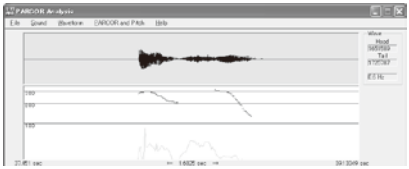
「4+3」组合



「4+4」组合



「4+4」组合

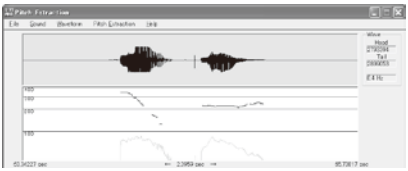


调形变调指的是声调由起点到终点的形状发生变化。换句话来说，与单独读的声调相比，声调曲线的后半部发生脱落现象，即音高曲线变得残缺不全了(「3+3」组合则不同)。调查显示，在十六个非轻声两字组声调组合中，具有调形变调形式的是第三声和第四声。第三声的变化是由先降后升的曲折调，变为只降不升的低降调，调值为21。第四声的变化是由从高音区降到低音区的全降调变为只降到一半，没有降到底的半降调，调值为53。另外，调形变调只出现在声调组合的前位声调上。

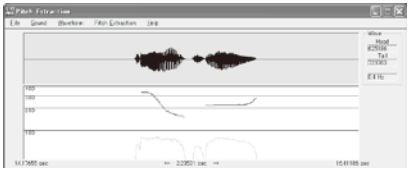
(2) 调高变调

调高变调指的是声调在音域中的高低变化。也就是说，在声调组合中，声调的音高曲线出现整体下降的变化形式。调查显示，在十六个非轻声两字组声调组合中，具有调高变调形式的是第一声和第二声。在「4+1」组合中，第一声出现整体下降的现象，调值为33。在「3+2」、「4+2」组合中，第二声也有类似的现象发生，调值为13。

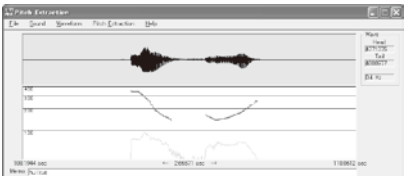
「4+1」组合



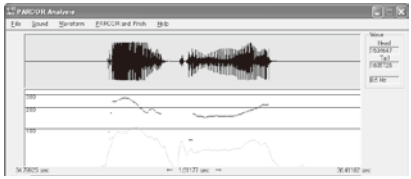
「4+1」组合



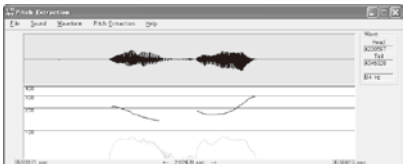
「4+2」组合



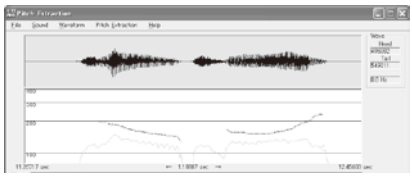
「4+2」组合



「3+2」组合



「3+2」组合

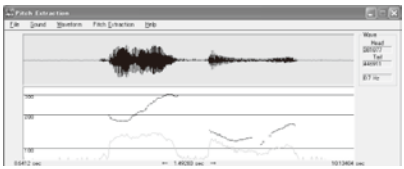


调形与调高是声调本身具有的两种不同的音高现象。我们发现声调组合中的变调现象大多数声调组合只会发生一种音高变化，即或调形变化或调高变化。

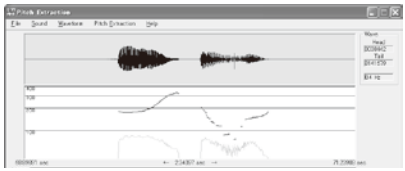
(3) 调位变调

调位变调指的是「3+3」组合前位第三声的变化。两个第三声相连，前位第三声只升不降，由曲折调变为中升调，调值为 35。

「3+3」组合



「3+3」组合



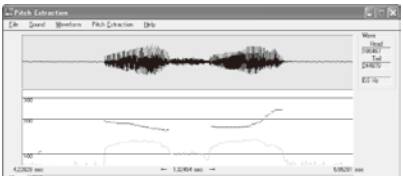
从音高曲线来看，「中升调 + 曲折调」的组合，我们认为前面的中升调实际

上负载着两种信息:一种是第二声的连读信息;另一种是第三声的连读信息(第三声变化后的信息)[10]。

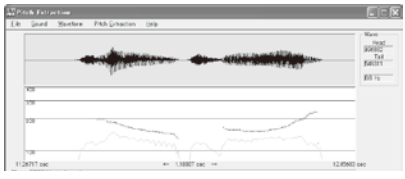
(4) 双向变调

双向变调指的是在一个声调组合中,前后位置上的两个声调同时发生变化。

「3+2」组合



「3+2」组合



语图显示,「3+2」组合是双向变调组合。具体的情况是,前位第三声发生调形变调,由曲折调变为低降调,调值 21。后位第二声发生调高变调,由中升调变为低升调,调值 13。

3.3.2 变调形式、调类、位置的关系

(1) 变调形式与调类:调形变调只发生在第三声和第四声两个调类上。调高变调只发生在第一声和第二声两个调类上。

(2) 变调形式与位置:调形变调只出现在前位声调上,即调形变调是声调在前位时的变化形式。调高变调只出现在后位声调上,即调高变调是声调在后位时的变化形式。

(3) 调类与位置:第一声和第二声只有在后位时才有可能变调;第三声和第四声只有在前位时才有可能变调。

3.3.3 各调类的变调条件

(1) 第一声:当第一声出现在第四声后面时,即出现在「4+1」组合中,后位第一声会发生调高变调。

(2) 第二声:当第二声出现在第三声和第四声后面时。即出现在「3+2」和「4+2」

组合中，后位第二声会发生调高变调。

(3) 第三声：当第三声出现在声调组合的前位时，即出现在「3+1」、「3+2」、「3+3」、「3+4」组合中，前位第三声会发生调形变调。其中「3+3」组合的前位第三声又被称为调位变调。

(4) 第四声：当第四声出现在声调组合的前位时，后位的调类不同，变调位置就不同，自然变调形式也不同。细分又可分为两种：①在「4+1」和「4+2」组合中，变调的是后位的第一声和第二声，变调形式是调高变调；②在「4+3」和「4+4」组合中，变调的是前位的第四声，变调形式是调形变调。

3.4 小结

以上我们的调查分析显示，在十六个非轻声两字组声调组合中，非常整齐的分为两种。一种是不变调组合，这主要指的是前位是第 1 声和第 2 声的八个组合。另一种是变调组合，这主要指的是前位是第 3 声和第 4 声的八个组合。

总之，在八个变调组合中，首先，变调形式不仅仅局限于调形变调，同时还存在调高变调的现象。其次，前位都是调形变调，后位都是调高变调。从数量上来看，前位发生变调的有六组，后位发生变调的有三组，前位变调居多。另外，「3+2」组合是唯一一组前后位同时发生变调的组合。我们将调查结果归纳在表 2 中。

表 2 「非轻声两字组声调组合的变调分布」

非轻声两字组声调组合的变调分布									
声调组合	变调	前位声调				后位声调			
		调形变调	调高变调	调值	调名	调形变调	调高变调	调值	调名
「1+1」	×	×	×	55	高平调	×	×	55	高平调
「1+2」				55	高平调			35	中升调
「1+3」				55	高平调			212	曲折调
「1+4」				55	高平调			51	全降调
「2+1」				35	中升调			55	高平调
「2+2」				35	中升调			35	中升调
「2+3」				35	中升调			212	曲折调
「2+4」				35	中升调			51	全降调
「3+1」	○	○	×	21	低降调				
「3+2」		○	×	21	低降调	×	○	13	低升调
「3+3」		○	×	35	中升调				
「3+4」		○	×	21	低降调				
「4+1」						×	○	33	中平调
「4+2」						×	○	13	低升调
「4+3」		○	×	53	半降调				
「4+4」		○	×	53	半降调				

4．变调的机理分析

两个相邻的声调衔接在一起连读时，它们之间是否会发生变调，与这两个调类之间衔接处的高低、各自的发音特点以及两个声调间的区别特征有着千丝万缕的联系。

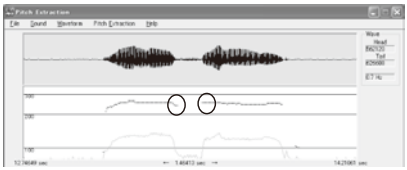
4.1　终起点的高低类别

我们知道每个调类都具有高低升降两种变化，这两种变化可以从各自声调的起点高度和终点高度来分辨。两字组声调组合有四个高低不同的点，即前位声调的起点、终点和后位声调的起点、终点。它们互相连接的部分是前位声调的终点与后位声调的起点，我们称这两个点为“终起点”。调查发现，这两个点的高低类别（终起点高低类别）与声调组合是否会发生变调现象具有直接的关系。

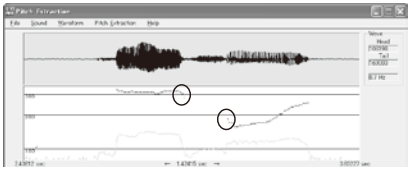
我们大致可以把十六个非轻声两字组声调组合的终起点划分为四类:高高型、高低型（包括高中型）、低高型（包括低中型）和特殊型（「3+3」组合）。如以下语

图:

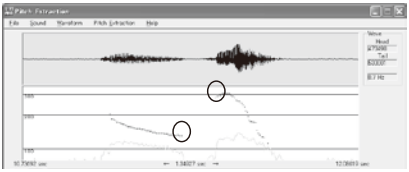
高高型



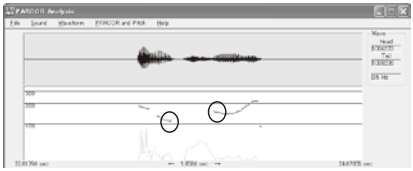
高低型



低高型 1



低高型 2(低中型)



我们将十六个非轻声两字组声调组合终起点的高低类别归纳在表 3 中。

表 3 【非轻声两字组声调组合终起点分布表】

非轻声两字组声调组合终起点分布表									
高高型	第1声	第2声	第3声	第4声	**高低型**	第1声	第2声	第3声	第4声
第一声	●●			●●	第一声		●●	●●	
第二声	●●			●●	第二声		●●	●●	
第三声					第三声				
第四声					第四声				
高高型:「1+1」「1+4」「2+1」「2+4」					高低型:「1+2」「1+3」「2+2」「2+3」				
低高型	第1声	第2声	第3声	第4声	**特殊型**	第1声	第2声	第3声	第4声
第一声					第一声				
第二声					第二声				
第三声	●●	●●		●●	第三声			●●	
第四声	●●	●●	●●	●●	第四声				
低高型:「3+1」「3+4」「4+1」「4+4」。 低中型:「3+2」「4+2」「4+3」。					特殊型:「3+3」。				

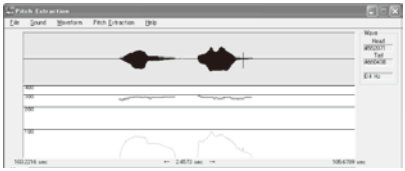
4.1.1 不变调组合终起点类别

我们的调查显示，终起点是高高型和高低型类别的都是不变调组合。第一声和第二声在前位的组合都属于这两种类别，共计八组。

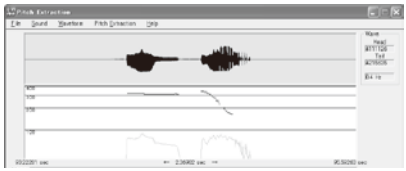
(1) 高高型

高高型指的是前位声调的终点在高音区，后位声调的起点也在高音区，两个点是等高的。声调组合有「1+1」、「1+4」、「2+1」、「2+4」四个组合。调查结果证明，如果两个声调的终起点不仅等高，而且还都处在高音区时，那么，连读时两个声调都不需要做任何改变就可以自然地完成过渡。我们把这种衔接模式称之为“顺势衔接”。

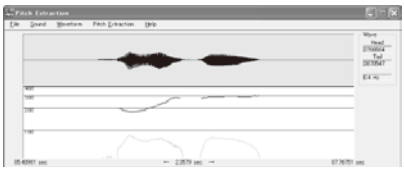
「1+1」组合



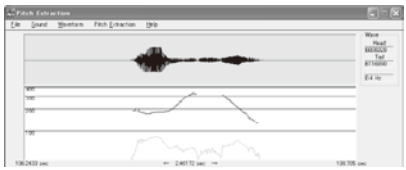
「1+4」组合



「2+1」组合



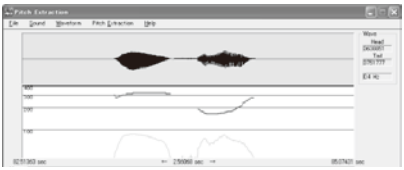
「2+4」组合



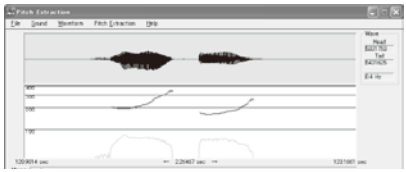
(2) 高低型

高低型指的是前位声调的终点在高音区，后位声调的起点在低音区（包括中音区），两个点是前高后低，声调组合有高中型「1+2」、「2+2」，和高低型「1+3」、「2+3」共四个组合。调查发现，如果两个声调的终起点是前高后低类别，那么，连读时两个声调都不需要做任何改变就可以自然地完成过渡。究其原因，大家知道在读一连串的语音时，声音会随着气息的减少而逐渐下降，整个一连串的语音都是呈现出前高后低的趋势，这是人们说话时的常态。调查结果证明，声调组合中终起点前高后低的类别正好符合人们发音的一般规律，因此，连读时不需要做任何改变就可以顺势衔接[11]。

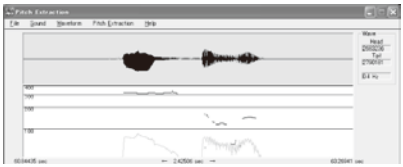
「1+2」组合



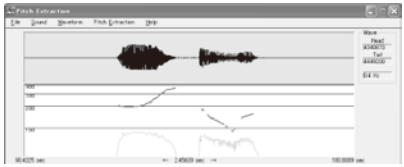
「2+2」组合



「1+3」组合



「2+3」组合



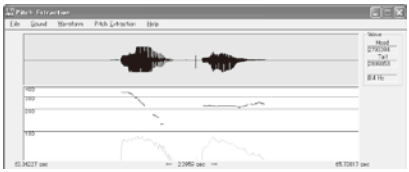
总之，连读时，终起点是高高型和高低型的组合，由于符合人们发音上的一般规律，因此前后声调都不需要做任何的调整或改变就能顺利的衔接在一起，我们称这些不变调组合的衔接模式为顺势衔接。

4.1.2 变调组合终起点类别

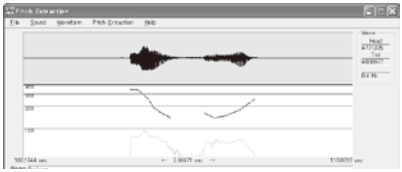
调查显示，自身的变调与终起点高低类别有直接关系的主要是前位第四声的四个组合，以及「3+2」组合。它们的终起点都是低高型类别，其共同特点是，连读时通过改变调形或调整调高，使前后两个声调终起点的高度相互接近或完全等高来完成声音高低的过渡。我们称这种衔接模式为迎合式衔接。其中又分为两小类：

①「4+1」、「4+2」、「3+2」三个组合的终起点都是低高型，并且都是后位声调发生调高变调现象的组合。语图显示，这三个组合后位声调整体下降，使自身的起点高度迎合前位声调的终点高度，使它们的高度更接近或等高。

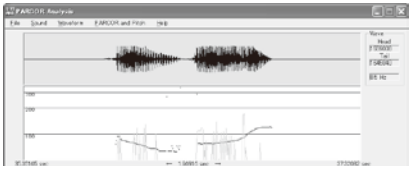
「4+1」组合



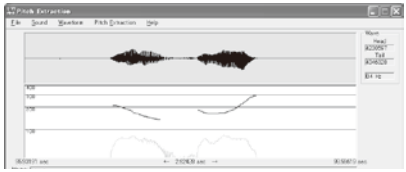
「4+2」组合



「3+2」组合

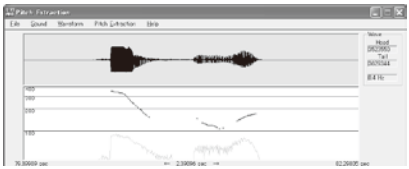


「3+2」组合

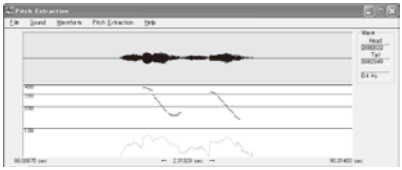


②「4+3」、「4+4」组合的终起点也是低高型，并且都是前位声调发生调形变调现象的组合。调查显示，前位第四声通过削减一部分调形来迎合后位声调的起点高度，使它们相接近或等高。

「4+3」组合



「4+4」组合



综上所述，我们认为终起点高低类别是鉴别连读变调的一个重要因素。调查证明：(1) 终起点的高低类型将十六个非轻声两字组声调组合工整地划分为变调组合和不变调组合两大类。(2) 终起点是高高型和高低型的都是不变调组合；终起点是低高型的都是变调组合。(3) 在变调组合中，与终起点高度有直接关系的主要是前位是第四声的声调组合。(4) 低高型的声调组合的衔接模式主要是迎合式的衔接。

4.2　声调自身的发音特点

这次调查我们还发现，决定是否变调的另一个主要因素是各声调自身的发音

特点。特别应该提到的是第三声，它的变调主要来自于自身的发音问题。另外，我们的调查还发现，第一声、第二声和第四声的变调形式也和它们自身的发音特点有着密不可分的关系。

4.2.1 第三声的发音特点及变调形式

(1) 第三声的发音特点

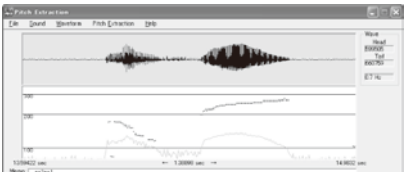
第三声是曲折调。它的发音与其它三个声调相比具有三个不同之处:一是，有两次升降变化;二是，时长较长;三是，没有高音色彩。这些特征使得第三声在前位时，会出现两种衔接“缺陷”:①两次升降变化使发音显得过于拗口，过于繁琐的升降不便于衔接;②两次升降增加了读音的长度，使整个声调组合呈现出前长后短的现象，破坏了普通话多音节词前短后长的韵律特征。因此，前位第三声的变化就成了必然现象。

语图显示，第三声在前位时，发音都会简化（省略）为一次升降。其中又分为两种:一是，只降不升;二是，只升不降。很显然不重要的音（部分）在发音时丢失了，或者为了发音方便省去了这部分音。

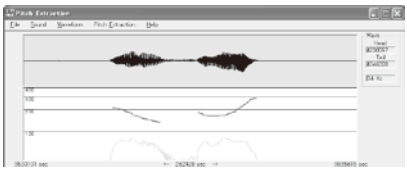
(2) 只降不升的第三声

语图显示，「3+1」、「3+2」、「3+4」组合前位第三声的发音简化为只降不升，省去了后面上升的部分，变为低降调，调值 21。变调后的三个组合发音顺畅，韵味十足，而且低降调还能与后位的三个声调很好地区分开来。

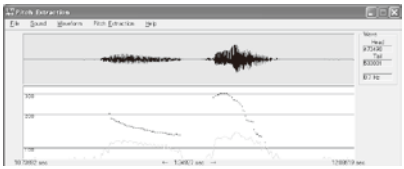
「3+1」组合



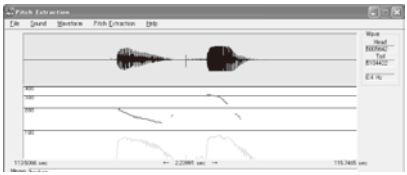
「3+2」组合



「3+4」组合



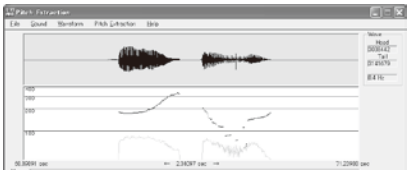
「3+4」组合



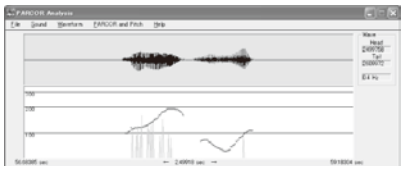
(3) 只升不降的第三声

「3+3」组合前位第三声的发音变化我们认为也属于简化发音现象，只不过是只升不降，省去了前面下降的部分，使调形发生变化，变为升调。这一变化带来两个好处，一是，简化了发音，使这一组合的发音符合韵律特征;二是，使终起点变为高低型，符合人们在发音上的一般规律，避免了拗口难读的两次升降变化，使前后声调衔接得也更顺畅。

「3+3」组合



「3+3」组合

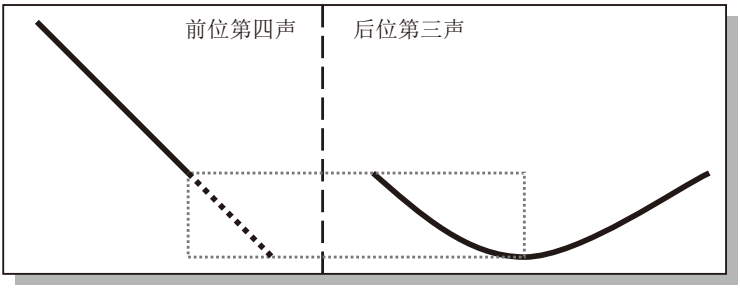


4.2.2 第四声的发音特点及变调形式

第四声是全降调，调值是 51。由于它的发音从高到低贯穿整个声调音域，因此第四声没有调高变化的空间，只有调形残缺变化的可能，这是第四声的最大特点。因此，「4+3」、「4+4」两个组合前位的第四声只能发生调形变化。至于为什么第四声要变调？我们来看一看「4+3」组合的情况（示意图 1）。在这个组合中第四声如果不变调，那么终起点处（低音区里）就会出现一段重叠的部分，换句话来说就是在连读时多了一个升降变化，即第四声先降到底，然后再上升去衔接第三声，然后再先下降后上升读第三声。完成整个发音过程需要四次升降变化。这样繁琐的升降变化会给发音带来诸多的不便，读起来会感到很拗口，听起来也很

不舒服，显得不像一个整体，而是像两个单音节。但是，当第四声省去低音区的一部分发音后，使第四声的终点高度与后位第三声的起点高度更接近或等高，这样一来前后衔接得更自然，也更具有多音节词的韵味。

示意图 1 「4+3」组合



第四声是全降调，其发音特点决定了第四声音高曲线相对稳定，一般不会发生变化，特别是后位声调是第一声和第二声时，变化的往往都是后位的第一声和第二声[12]。

4.2.3 第一声和第二声的发音特点及变调形式

第一声是高平调，一般都读在高音区；第二声是中升调，一般由中音区上升到高音区。两个声调都没有低音色彩。因此这种发音特点使它们在变调时，主要以调高的音区下降形式来表现。在我们的调查中，第一声和第二声都不存在调形变调的现象。

综上所述，在非轻声两字组声调组合中，四个声调的发音特点，不仅制约着哪个调类会发生变调现象，还决定着它们的变调形式。

4.3 声调间的区别特征

在变调组合当中，哪一个声调发生变化，以什么样的形式变化，还要受到两个声调间具有怎样的区别特征的制约。两个声调在声调组合中既要衔接又要区

别。为了不会产生发音的混同、或调类模糊等现象，前后声调都会保留自己与对方最本质的那个区别特征。我们的调查显示，各组合前后位声调的调形或调高在区别功能上是有主次之分的。声调间起主要区别作用的音高现象是不会发生变化的，有变化的都是那些起次要区别作用的音高现象。另外，主次关系不会一成不变，它会因相邻声调调类的不同而改变，使它们的具体变调形式也随之而变。因此，我们也可以认为区别特征的主次关系是“临时性的”。受这种关系制约的变调组合我们称它为“区别式衔接”。我们将变调组合中前后两个声调的区别特征归纳在表 4 中。表中的“调值”中的粗黑体字表示变调后的调值。

表 4

主要区别特征与变调形式							
	主要区别特征		变调形式			调值	
声调组合	升降	高低	发音	调形	调高	前位	后位
「3+1」	○	◎	○	○		**21**	55
「3+2」	◎	○	○	○	○	**21**	**13**
「3+3」	×	×	○	○		**35**	212
「3+4」	○	◎	○	○		**21**	51
「4+1」	◎	○			○	51	**33**
「4+2」	◎	○			○	51	**13**
「4+3」	○	◎		○		**53**	212
「4+4」	×	×		○		**53**	51

双圆圈为主要区别特征

4.3.1 调形是主要区别特征的组合

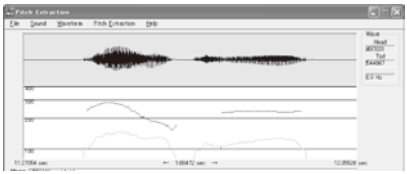
在变调组合当中，主要区别特征为调形（升降）的有「4+1」和「4+2」组合，以及「3+2」组合后位第二声。

(1)「4+1」组合

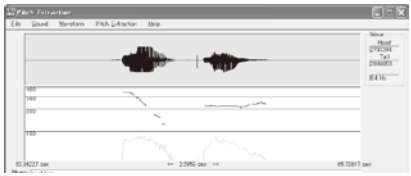
「4+1」组合中后位第一声之所以由高平调变为中平调。第一个原因是升降变化是它们的主要区别特征。第四声和第一声的主要区别特征在结尾处的高低上，

即第四声降，第一声平。升降（调形）变化是这个组合中两个声调之间最本质的区别特征，是不能改变的。第二个原因是第四声没有高低变化的空间。「4+1」组合要想顺畅地衔接在一起就只能通过高低（调高）变化来完成。第一声整体下降是这个组合唯一可能的变化。

「4+1」组合



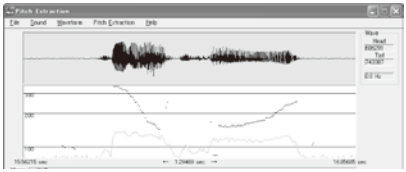
「4+1」组合



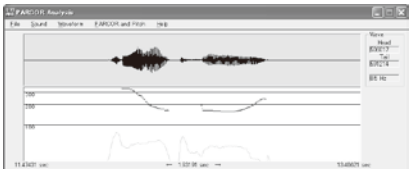
(2)「4+2」组合

「4+2」组合中后位第二声之所以由中升调变为低升调。第一个原因是升降（调形）变化是它们的主要区别特征。第四声和第二声的主要区别特征在于一个是上升调，一个是下降调，调形变化比高低变化更重要。因此「4+2」组合中升降变化是它们的最本质的区别特征，是不能改变的。第二个原因跟「4+1」组合一样，由于第四声没有高低变化的空间，因此，第二声整体下降是唯一可能的变化。

「4+2」组合



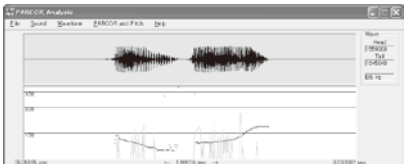
「4+2」组合



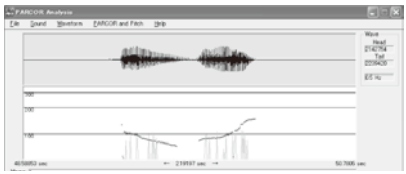
(3)「3+2」组合

同样的道理，「3+2」组合，前位第三声虽然因为简化发音而发生调形变调，但是由于第三声和第二声的主要区别特征是调形变化，因此，后位第二声呈现整体下降的调高变调。

「3+2」组合



「3+2」组合



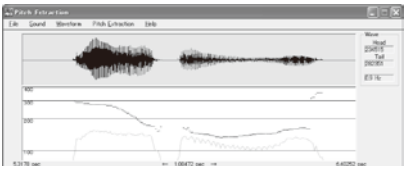
4.3.2 调高是主要区别特征的组合

在变调组合当中，主要区别特征为高低（调高）的有「4+3」一个组合。

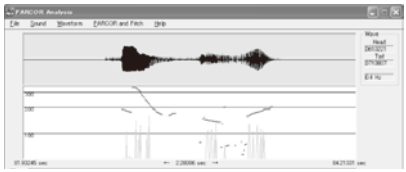
(1)「4+3」组合

「4+3」组合中前位第四声之所以由全降调变为半降调。第一个原因是高低是它们的主要区别特征。第四声由高音区降到低音区，第三声在低音区里先降后升。两个声调最主要的区别是各自起点的高低差。换句话来说，第四声的起点一定要高一些;第三声的起点一定要低一些。第二个原因是我们前面分析过的，终起点处有一个重叠部分，因此，丢失第四声后面的一部分发音（调形），调值为 53，既可以保留两个声调的主要区别特征，又可以通过简化发音，使终起点等高，顺利衔接。

「4+3」组合



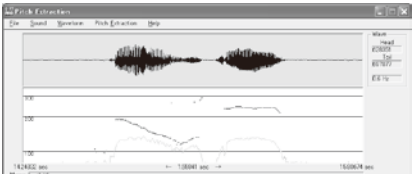
「4+3」组合



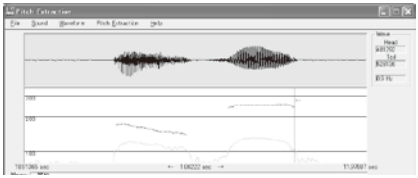
(2) 前位是第三声的组合

前位是第三声的组合虽然因为简化自身的发音而发生变调现象，但是不能说与声调间区别特征完全没有关系。

「3+1」组合



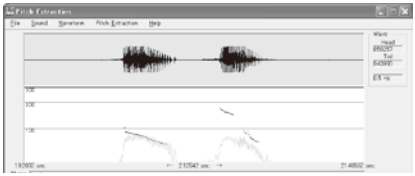
「3+1」组合



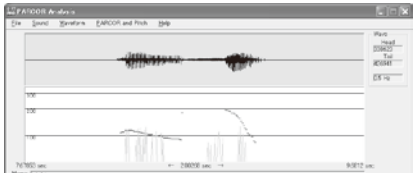
「3+1」组合因前位第三声变化后，使前后两个声调的终起点差距变大，而且后位声调并没有出现迎合式的高低变化。我们从终起点的角度来看，「3+1」组合与「4+1」组合完全一样，都是低高类型。但是两个组合中第一声的变化却截然不同。这就是因为它们的主要区别特征不同所导致的。第四声与第一声的主要区别特征是升降，因此，「4+1」组合后位第一声出现调高变调现象。但是第三声与第一声的主要区别特征不是升降，而是高低，即第三声在低音区，第一声在高音区。两个声调在衔接时，第一声不能出现下降现象，第三声不能出现上升（尾部）现象，否则会使两个声调的区别特征变得模糊起来，因此，「3+1」组合中的第一声调值仍然是 55，两个声调的衔接不是迎合式的，而是区别式的。

另外，「3+4」组合的情况也是如此，前位第三声变调后，并未使两个声调的终起点有所靠近。

「3+4」组合

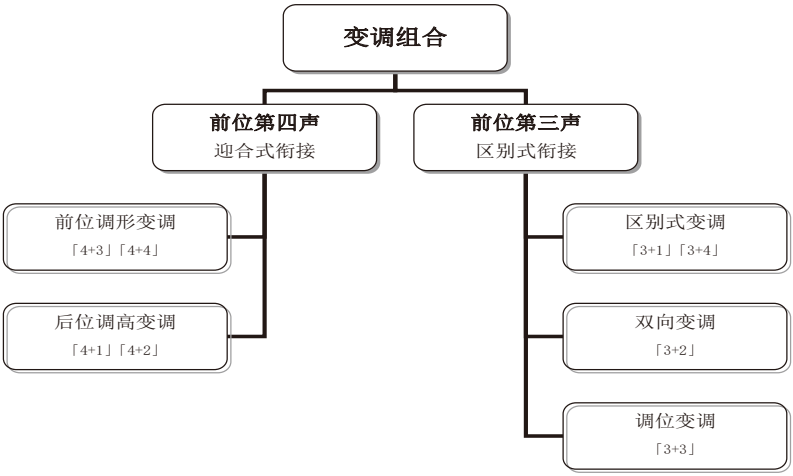


「3+4」组合



如果从区别特征来分析的话，我们就会很容易地理解「3+4」组合的变调现象了。由于这个组合的主要区别特征不是升降，而是高低。因此，两个声调不会出现向一起靠拢的迎合式的衔接，而是区别式的衔接。

图



综上所述，在变调组合当中，在发音和终起点之外，影响声调变化形式的是调类间的区别特征。一般情况下，保留主要区别特征不变，改变次要的区别特征来衔接前后声调。总之，从区别特征来看，可以说“调形主要，调高变;调高主要，调形变。”

5．变调规则及标调法

最后，我们归纳总结一下非轻声两字组声调组合的变调规则、声调音位以及标调法。

5.1　非轻声两字组声调组合变调规则

规则一:声调组合的连读变调指的是相邻的两个声调之间发生的或调形或调高的变化，一般同一个声调不会同时出现两种变化。

规则二:在非轻声两字组声调组合中，由于终起点高低类别不同，前位是第一声或第二声的组合是不变调组合;前位是第三声或第四声的组合是变调组合。

规则三:在变调组合中，前位是第三声的组合，变调的一定都是前位第三声;前位

是第四声的组合，变调的不一定都是前位第四声。

规则四:四个声调都有可能发生变调现象。但第一声和第二声只在后位时会发生变调。第三声和第四声只在前位时会发生变调。

规则五:在前位的声调只会发生调形变调;在后位的声调只会发生调高变调。

规则六:前位第三声的变调都是从两次升降简化为一次升降的发音变化，但形式却有两种:①只降不升;②只升不降。

5.2 声调调位及调位变体

5.2.1 第一声(阴平)：/55/ →[33]、「555」[13]。

第一声共有三个调位变体:①高平调，调值55，高音区。条件:单独读时，或除②③以外的第一声的读法。②中平调，调值是33，中音区。条件:衔接在第四声后面时，即「4+1」组合中的后位第一声的读法。③重读调，调值555，高音区。条件:后面带轻声音节时的读法。

5.2.2 第二声(阳平)：/35/ →[13]、「335」。

第二声共有三个调位变体:①中升调，调值35，中高音区，发音由中音区升至高音区。条件:单独读时，或除②③以外的第二声的读法。②低升调，调值13，发音由低音区升至中音区(有时稍高)。条件:衔接在第三声和第四声后面时，即「3+2」和「4+2」组合中的后位第二声的读法[14]。③重读调，调值335，中高音区。条件:后面带轻声音节时的读法。

5.2.3 第三声(上声)：/212/ →[35]、[21]、「211」。

第三声共有四个调位变体:①曲折调，调值212，低音区。发音先下降再上升，下降与上升一般都在低音区里完成(有时会升得高一些)。条件:单独读时，或在最后面时的读法。②低降调，调值21，低音区。发音由低音区降到最底部，声音具有短、低、降的特点。条件:「3+1」、「3+2」、「3+4」组合中前位第三声的读法。③升调，调值35，中高音区，发音由中音区升至高音区(与第二声的读法相似)。

条件:「3+3」组合前位第三声的读法。④重读调，调值 211，低音区。条件:后面带轻声音节时的读法。

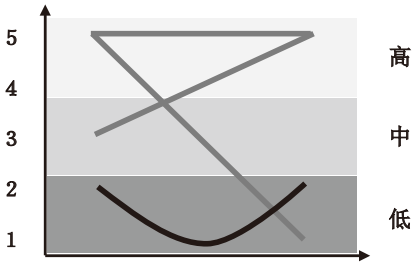
5.2.4　第四声(去声)：/51/ →[53]、「551」。

第四声共有三个变体:①全降调，调值 51，全音区。发音由高音区降至低音区。条件：单独读时，或除②③以外的第四声的读法。②半降调，调值 53，高中音区。发音由高音区降至中音区。条件:「4+3」、「4+4」组合前位第四声的读法。③重读调，调值 551，全音区。条件:后面带轻声音节时的读法。

5.3　声调及声调组合标调法

5.3.1　声调标调法

我们的标调法是在赵元任先生的五度标记法的基础上，根据自己多年的研究和教学经验而制作的。与赵元任先生的标调法的不同之处有两点，一个是对第三声的标调，采用 212 的调值标法;另一个是增设了高、中、低三个音区，更加明确了调高与调形是同等重要的两个音高现象。暂叫它「545 标调法」。



第一声 (阴平):高平调。调值 55，高音区。发音从起点到终点没有升降变化。

第二声 (阳平):中升调。调值 35，中高音区。发音由中音区升至高音区。

第三声 (上声):曲折调。调值 212，低音区。发音先下降再上升，下降与上升一般都在低音区里。

第四声 (去声):全降调。调值 51，全音区。发音由高音区降至低音区。

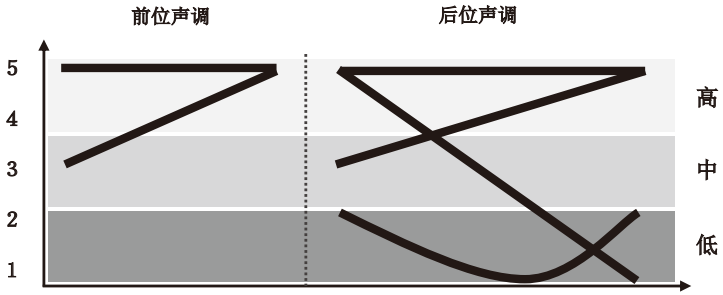
5.3.2 二十调标调法

这个非轻声两字组声调组合的标调法则是一个全新的尝试。在制作二十调标调法时，我们考虑到声调组合前短后长的特点，并予以体现。但是标调法中不包括音阶下倾现象和轻声组合的情况。我们暂叫它「545 二十调标调法」。

(1) 不变调组合的标调

不变调组合的标调法我们汇总在一个示意图中，共有「1+1」、「1+2」、「1+3」、「1+4」和「2+1」、「2+2」、「2+3」、「2+4」共八个组合中。

【不变调组合】

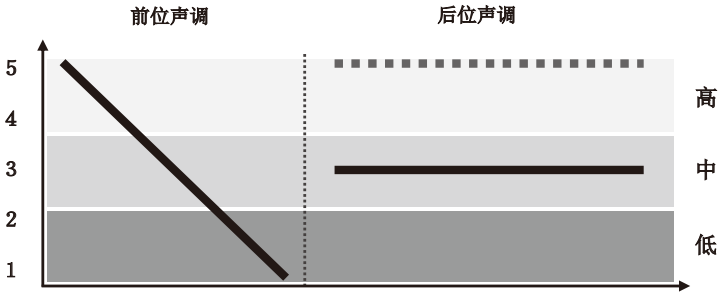


发音过程:由于这八个组合是不变调组合，因此，发音时按声调读即可。

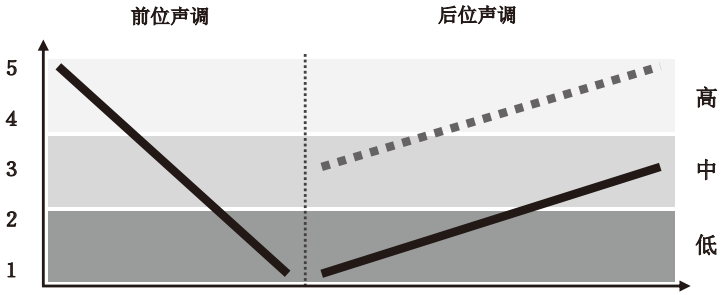
(2) 变调组合的标调

八个变调组合共有五种读法:中平调、低升调、低降调、升调和半降调。我们每一个组合制作一张示意图。“实线”表示变调的升降高低，“虚线”表示本调的升降高低。另外，为了避免不必要的繁琐，示意图中的音高曲线都尽可能地使用直线来表示。

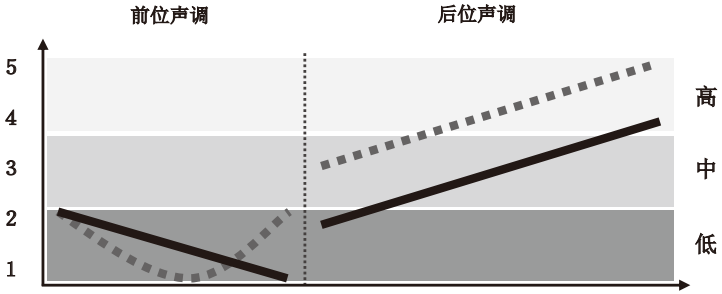
【中平调】(「4+1」组合)



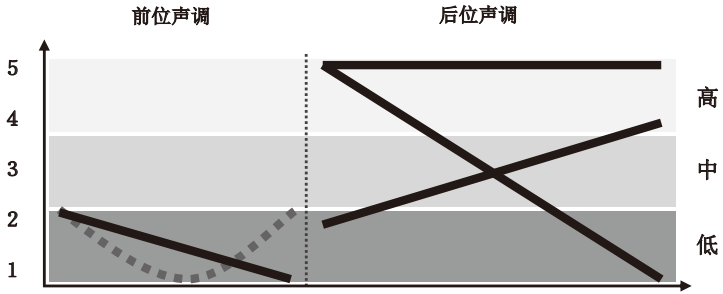
【低升调 1】(「4+2」组合)



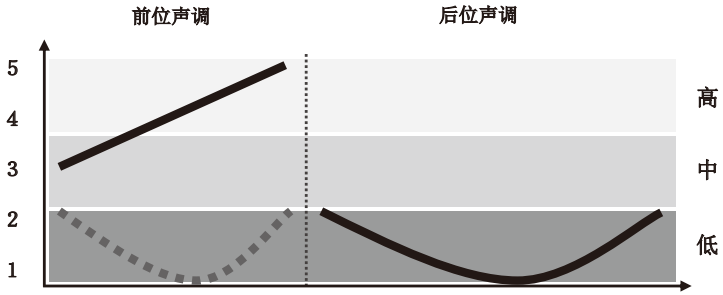
【低升调 2】(「3+2」组合) 前位低降调;后位低升调。



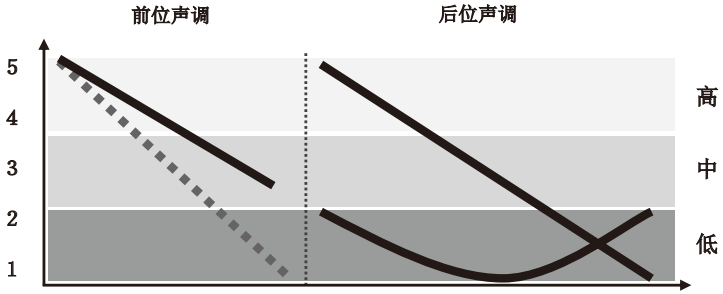
【低降调】(「3+1」、「3+2」、「3+4」组合)



【(中)升调】(「3+3」组合)



【半降调】(「4+3」、「4+4」组合)



根据笔者的调查，普通话的四声在两字组声调组合（双音节词）中，共有九种（不包括轻声音节）实际读音。

附录 调查用语音资料

1. 单字音语音资料:

1	晴	24	我	47	昨	70	做
2	利	25	mà	48	后	71	天
3	mā	26	阪	49	半	72	大
4	岛	27	来	50	安	73	西
5	田	28	好	51	鸟	74	武
6	废	29	智	52	客	75	看
7	扫	30	打	53	学	76	搏
8	医	31	工	54	新	77	州
9	澳	32	会	55	上	78	外
10	黑	33	每	56	福	79	银
11	暖	34	文	57	爱	80	定
12	亮	35	法	58	偏	81	阴
13	脉	36	má	59	港	82	广
14	宿	37	汗	60	埃	83	香
15	威	38	兴	61	考	84	短
16	长	39	门	62	读	85	成
17	绍	40	夏	63	辽	86	童
18	机	41	思	64	主	87	耳
19	听	42	风	65	mǎ	88	本
20	水	43	以	66	决	89	及
21	挪	44	宁	67	走		
22	酒	45	取	68	七		
23	资	46	格	69	泉		

2. 两字组语音资料:

90	作主	114	mǎmā	138	香港	162	昨天
91	māmā	115	学童	139	màmá	163	màmā
92	坐座	116	天阴	140	天天	164	每次
93	辽宁	117	客座	141	决定	165	埃及
94	走好	118	思考	142	绍兴	166	天黑
95	主座	119	mámá	143	学文	167	学医
96	阴天	120	澳门	144	半夜	168	好听
97	智利	121	下午	145	挪威	169	māmà
98	学学	122	后天	146	天亮	170	天暖
99	以上	123	广州	147	好看	171	同学
100	màmà	124	耳机	148	màmǎ	172	乘坐
101	风格	125	天好	149	大阪	173	好读
102	今天	126	mǎmà	150	法学	174	武汉
103	福岛	127	天晴	151	本来	175	读好
104	田七	128	新宿	152	做工	176	māmǎ
105	mǎmá	129	mámā	153	mǎmǎ	177	夏天
106	作客	130	好天	154	天下	178	听好
107	西安	131	偏爱	155	我学	179	银座
108	医学	132	脉搏	156	鸟取	180	文学
109	晴天	133	学我	157	看好	181	废水
110	外资	134	作成	158	打扫	182	学法
111	mámà	135	工作	159	学会		
112	好走	136	mámǎ	160	酒泉		
113	长短	137	会学	161	māmá		

注

1. 笔者提出的二十调包括狭义和广义两种。狭义的二十调指的就是二十个两字组声调组合的读法;广义的二十调指的是包括词的轻重格式以及语调在内的各种读法。
2. 普通话的四个声调都含有两种高低现象，①由起点到终点的升降变化;②声调所在的音区的高低变化。升降变化我们称其为调形变调，音区的变化我们称其为调高变调。
3. 受验者主要来自中央人民广播电台、CCTV 播音员以及国际台等四名播音员，这四个人均毕业于北京广播学院（中国传媒大学）播音系;福建人民广播电台、电视台普通话播音员三名;日本 NHK 国际局华语播音员三名;在日本教授普通话的老师一名;还有一名在 CCTV 从事编辑工作的一般人士。另外，这次使用的语音资料是自 1996 年至 2023 年期间录制的，时间跨度较大。
4. 我们测量音高曲线使用的是「音声录闻见」软件。这虽是一款老式的软件，但由于笔者一直使用至今，为了使语音资料统一标准，这次的测量仍使用这款软件。
5. 有关第三声的调值，多年来人们一直都沿用 214 来标注，但是在我们的长期调查中，语图所显示的情况却有所不同。绝大多数的第三声实际调值用 212 来表示更为合适。因此，本文中所提到的单独读的第三声都以调值 212 为基准。
6. 我们以「1+2」表示前位（声调组合中前面的声调）是第一声，后位（声调组合中后面的声调）是第二声的声调组合。「1+3」表示前位是第一声，后位是第三声的两字组声调组合。其他声调组合以此类推。
7. 「2+3」组合“玩儿好”的语图显示，音高曲线的终点处出现一个拐弯的部分，我们称它为“弯头”。弯头部分没有声调信息，因此，本文不考虑弯头带来的曲线变化。
8. 由于篇幅有限，我们只能选用部分受验者的语图。但是，仅从语图来看，受验者们的音高曲线的各种变化倾向总体来说都是一致的，只是在清晰度上存有一些差异。
9. 「4+2」组合第二声调值 13，而「3+2」组合的第二声调值更接近 24，由于它们都是从低音区开始发音，为了避免过于繁琐，我们暂且用 13 作为低升调的代表调值。
10. 参看呉志剛「中国語標準語における 2 音節語のピッチの物理的特徴について」千葉大学大学院（博士論文），2011 年。
11. 我们在读一连串的语音时，声音会随着气息的减少而逐渐下降，整个语句呈现出前高后低的趋势。人们称其为“音阶下倾”，是一种普遍的发音生理现象。
12. 笔者以前曾用两字组做过轻重音的听辨调查。调查曾显示，前位是第四声的组合，第四声与其他声调相比较音高曲线具有更稳定的形状，特别是与第一声和第二声相拼时，听觉上的重音往往在第四声的音节上。第四声比较“重”，不容易发生变化的特点在我们这次的调查中也有所体现。但是轻重音与声调变化毕竟是两回事，它们之间有什么关联性还有待于今后的调查研究。
13. 本文虽没涉及轻声问题，但为了保持调位的完整性，仍列出带轻声的四声的调值。
14. 同「注 9」。

参考文献

1. 罗常培、王均《普通语音学纲要》，科学出版社，1957 年。
2. 赵元任《汉语口语语法》，吕叔湘译，商务印书馆，1979 年。
3. 林茂灿、林联合、夏光荣、曹雨生《普通话二字变调的实验研究》，《中国语文》，1980 年第一期。
4. 吴宗济《普通话语句中的声调变化》，《中国语文》，1982 年第六期。
5. 沈炯《北京话声调的音域和语调》，载林焘、王理嘉主编《北京语音实验录》，商务印书馆，北京，1985 年。
6. 曹剑芬《连续话语语音特征及其信息处理》，《语言文字应用》，1998 年第一期。
7. 吴宗济、林茂灿主编《实验语音学概要》，高等教育出版社，1989 年。
8. 沈炯《汉语语调模型刍议》，《语文研究》，1992 年第四期。
9. 林焘、王理嘉《语音学教程》，北京大学出版社，1992 年。
10. 郭锦桴《汉语声调语调阐要与探索》，北京语言学院出版社，1993 年。
11. 林焘《北京话的连读音变》载《林焘语言学论文集》，商务印书馆，2001 年。
12. 韩军华「普通话二字组词语的动态声调」，《滨州师专学报》，2002 年。
13. 吴志刚「汉语声调“弯头”现象的实验分析」，《汉语学习》，2009 年 第二期
14. 张晶「对外汉语声调教学两字组连调研究综述」，《探索・争鸣》，2010 年，第 2 期。
15. 吳志剛「中国語標準語における 2 音節語のピッチの物理的特徴について」千葉大学大学院（博士論文），2011 年。
16. 张妍「普通话双字组声调语音韵律特征分析」，《唐山学院学报》2020 年，第 5 期

新型コロナワクチンを含む遺伝子治療の商品化をめぐる考察

―資本による心身内奥の包摂―

花　岡　龍　毅

1. 序論

遺伝子治療が商業段階に入った。数多くの医学者の艱難辛苦をきわめた膨大な研究と、臨床試験に参加した数多くの患者の夥しい犠牲によって、遺伝子治療が一定の成功をおさめると、製薬企業がこの分野に続々と参入し始めた。まず2010年に、グラクソ・スミスクライン[1)]が、ついで2012年にはバクスター[2)]が参入し（島田 2013, 6）、その後、現在までに数多くの製薬企業が、この分野で商品開発・生産活動を展開し、「キムリア」、「ゾルゲンスマ」、「コラテジェン」（日本で開発された初めての遺伝子治療用製品）など複数の商品が、日本でもすでに市場に出ている。

商品としての遺伝子治療は、内外で、「医薬品（drugs）」（Dunbar et al. 2018）として承認されており、日本では「遺伝子治療用製品」と呼ばれている。

このように、遺伝子治療が医薬品という商品となっているわけであるが、医薬品という分類に目を奪われることなく、その技術自体に着目するならば、遺伝子治療は、あくまでも「遺伝子操作」であり、「遺伝子操作」が商品となったという事実を、時代を画す出来事として、しっかりと認識すべきであろう。

遺伝子治療は、1960年代にまで遡る、その歴史の最初期から、専門家を中心とした多くの人々の間に、深刻な倫理問題に関する関心を引き起こしていた（Nirenberg, M.W. 1967）。遺伝子治療は、人類を疾病の惨禍から救う医療行為となりうると同時に、人類の資質を根本から改造しうる、未知の潜在的な危険を内包した「遺伝子操作」にほかならないという認識が、当時からすでに存在

していた（Friedmann & Roblin 1972, President's Commission 1982; ジョンセン 2009; 額賀 2009）。

このような、その本質において遺伝子操作である遺伝子治療の「商品化」が社会にもたらす諸影響を考察することを課題と考えた筆者は、拙稿において、遺伝子治療の商品化傾向の歴史と技術の現状を整理し、そのうえで、この商品化傾向を、半田ら宇野学派の流れをくむマルクス経済学者の提唱する〈過剰商品化〉（あるいは〈超・過剰商品化〉）傾向の現れであるという指摘を行った（花岡 2024）。だが、この拙稿における研究は、次の 2 つの課題を残していた。

1. 遺伝子治療の商品化が、商品論のなかで占める位置を明確に定位すること

拙稿では、遺伝子治療の商品化傾向を〈過剰商品化〉ないし〈超・過剰商品化〉傾向の現れであると「指摘した」にとどまり、遺伝子治療の商品化が、マルクス経済学における商品論のどこに、どのように位置づけられるのかという問題については検討していなかった。だが、この位置づけを明確にすることは、遺伝子治療の特質を分析するうえで欠くことのできない重要な課題であると思われる。

2. mRNA ワクチンの分析　新型コロナワクチンに代表される mRNA ワクチンは、遺伝物質である mRNA を本体とするにもかかわらず、内外の監督官庁は、これを「遺伝子治療」ではなく「ワクチン」としているという事情もあり、拙稿では分析の対象にしていなかった。しかし、後述するように、mRNA ワクチンは遺伝子治療と考えることが妥当であり、現在世界中で使用されている mRNA ワクチンを除外した遺伝子治療の特徴づけは、不充分なものであると考えられる。

そこで本稿では、遺伝子治療の特質を、よりいっそう明瞭にするために、遺伝子治療に mRNA ワクチンを加えて、遺伝子治療の商品化が商品論において占める位置をより正確に定位することを試みた。そうすることで、遺伝子治療の専門家による視点とはおそらくやや異なる視点から、遺伝子治療の特質と、遺伝子治療が社会に与える諸影響は何かという問題を解明し、この技術の健全

な発展のために寄与することができるのではないかと考えられるからである。

最後に、本稿の前提を整理しておく。商品、資本などの基礎的な経済学上の諸概念は、『資本論』で展開されたものに依拠し、『資本論』以後の経済学的諸現象の開明に必要な諸概念は、マルクス経済学を批判的に継承・発展させた宇野学派のマルクス経済学に依拠する。

2. 遺伝子治療の特徴

商品としての遺伝子治療を商品論のなかへ正確に定位する準備として、遺伝子治療用製品の特徴をまとめておくことにしよう。

遺伝子治療は、DNA を用いたものと、mRNA を用いたものに大別できる。

2. 1　DNA を用いた遺伝子治療の特徴

DNA を用いた遺伝子治療についてはすでに拙稿（花岡 2024, 上掲書）で分析を行っているので、その成果を簡単にまとめておく。

a. 構造と作用機序および効能・効果　導入する外来遺伝子（DNA）が本体であるが、その他に、その外来遺伝子の発現を制御するプロモーターなどの制御配列、そして、これらを標的となる細胞内へと運ぶためのベクター（これも DNA である）から構成されている。導入された遺伝子は、細胞内で発現し、宿主細胞において、何らかの変異を有する遺伝子の機能の補足をはじめとして、様々な作用を発揮する。効能・効果は商品によって異なる。現在市場に出ているものは、もともと根治が難しい疾患を対象とするものであるということもあって、その効能・効果は限定的であるとされる[3)]。

b. 導入可能な遺伝子の種類　ヒトがもともと持っている遺伝子ばかりでなく、他の生物種の遺伝子、自然界にはない人工的に合成した遺伝子など、原理的にはあらゆる遺伝子が身体内に導入可能である。

c. 遺伝子が導入可能な身体の部位　原理的には、脳をも含めて、身体内のあらゆる部位に遺伝子を導入することが可能である。

d. 遺伝子導入の効果　遺伝子が導入された細胞や、周囲の細胞・組織は劇的な影響を受け、異常な細胞が正常な細胞へと修復されるばかりでなく、その細胞の基本構造自体が改変されたり、機能が増強されたりするなど、その細胞が本来持っていない構造や機能を獲得したりする。

e. 持続性・不可逆性　遺伝子導入の効果には、持続性や不可逆性に違いがある。これは、主として、導入遺伝子が宿主細胞のゲノムに挿入されるか否かによる。たとえば、遺伝子が宿主細胞のゲノムに挿入される場合には、導入遺伝子は宿主細胞のゲノムが複製されるたびに同時に複製され、細胞分裂の際に分裂細胞へも分配されて、そこでも効果を発揮する。いわば永続的な―原理的には―効果を発揮することになる。導入遺伝子がゲノムに挿入されることは、治療がうまくいく場合には有利であるが、治療がうまくいかず、元の状態へと戻したい場合には重大な欠点となる。これは遺伝子治療の不可逆性である。現時点では禁止されているが、生殖細胞系列へ導入された遺伝子は次世代へも伝達され、元に戻すことはできない（ただし、いったん遺伝子を導入された細胞を除去する技術も研究されており、こうした不可逆性は将来的には除かれるかもしれない）。

以上を簡単にまとめると、遺伝子治療用製品は、疾患の治療技術であるが、原理的には、あらゆる側面における人体の改造を可能にする潜在力をも秘めており、脳への遺伝子導入が可能であることは、究極的には身体のみならず、「心」をも操作しうることを示唆している。

2. 2　mRNA を用いた遺伝子治療の特徴

厚生労働省や、FDA、WHO などの世界各国の監督官庁は、mRNA ワクチンを「ワクチン」と定義し、遺伝子治療には含めていない。だが、DNA 以外の遺伝物質、すなわち、mRNA を用いた「ワクチン」も遺伝子治療のなかに含めることが適切であると思われる。

一般的には、細胞に何らかの遺伝子操作を施して治療をおこなうもの全般が

遺伝子治療と呼ばれており（小澤 2020）、その中には、細胞医薬の一部も含まれる（河本・辻 2020）。遺伝子操作の目的は、最終産物であるタンパク質の改変である。DNA 自体を操作しなくても、mRNA レベルでの操作によって、最終産物であるタンパク質の性質や量を操作できることを考えると[4]、DNA の操作ではないから遺伝子治療ではないとすることには無理がある。遺伝子の化学的本体は DNA であり、mRNA はその転写産物であるから、もちろん両者は同じものではないが、mRNA が「遺伝物質」であることは明らかである。FDA による遺伝子治療の定義でも、“Gene therapy is a medical intervention based on modification of the genetic material of living cells”（FDA 2021）とあり、遺伝子治療は「遺伝物質（genetic material）の改変による医学的介入」とされている。この定義に基づくなら、mRNA ワクチンが遺伝子治療であることには異論の余地が無いものと思われる（ただし、こうした定義をしている FDA が、なぜ mRNA を「ワクチン」としているのかは不明である）。

以上のことは、単に定義上の問題ではなく、公衆衛生上の問題でもあり、遺伝子治療の専門家の間からは、mRNA ワクチンが遺伝子治療であり、遺伝子治療に要求される厳格な規制を行うべきであるとする提言がなされている（Banoun 2023）。遺伝子治療研究の第一人者である小島も、次のように述べている。

> なぜ、原理的には遺伝子治療製剤でありながら、感染症に対するワクチンが遺伝子治療製剤としての規制から外されたのか明確に答えることは困難である。公衆衛生の立場からは、希少疾患やがんに対して用いられる遺伝子治療よりも、多数の健康人を対象とするワクチンは、より厳しい規制の対象となるべきである（小島 2024 年 6 月 30 日）。

本稿も、mRNA ワクチンは遺伝子治療であるとの見地に立ち、その特徴を整理することにする。「新型コロナワクチン」と総称されるもののうち、「モデ

ルナ」と「コミナティ」を mRNA ワクチンの代表例とみなすが、特に言及する必要のある場合を除いて、個々の商品を区別しないことにする。それは、この分析の目的が、個々の商品の特徴を明らかにすることにあるのではなく、原理的な特徴を抽出することにあるからである。

まず、構造と、効能・効果を惹起する作用機序を、独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）が公開している『特例承認に係る報告書』に基づいて整理してみよう。

a. 構造および効能・効果を惹起する作用機序

新型コロナワクチンは、新型コロナウイルス SARS-CoV-2 のスパイクタンパク質をコードする mRNA を、脂質ナノ粒子（lipid nanoparticle：LNP）に封入したものである。mRNA は、そのままでは簡単に分解されてしまい、細胞内に入ることもできないために、LNP に封入することが必要になる。したがって、LNP は、役割の点では、DNA の遺伝子治療のベクターに相当するものであると考えられる。細胞内へ取り込まれた mRNA は核には入らず、したがって宿主細胞のゲノムとは相互作用せずに、一過性にタンパク質を発現させる。そして、その後は、体内の RNA 分解酵素（リボヌクレアーゼ）により分解される。

マウスやサルによる実験結果から、作用機序が推測されている。細胞に取り込まれた mRNA の遺伝情報を基に、スパイクタンパク質が合成され、抗原として細胞の表面に発現される。そして、この抗原によって、この抗原に対する中和抗体の産生などの液性免疫や、細胞性免疫が惹起されると考えられている。

効能・効果については、『特例承認に係る報告書』は、以上のような作用機序によって、SARS-CoV-2 による感染症の「予防効果が期待できると考えられる」（『コミナティ筋注』13）[5]、あるいは「感染予防効果を示すと考えられる」（『モデルナ筋注』17）[6] と記載している。

以上が、『特例承認に係る報告書』による新型コロナワクチンの構造と作用機序、効能・効果の概観であるが、効能効果をめぐる問題はきわめて複雑であ

る。まず、何が効能・効果なのかという問題がある。周知のように、新型コロナワクチンの接種が開始された頃には予防効果が強調されており、すでにみたように、『特例承認に係る報告書』にも、そうした効果が期待されると述べられている。だが、内外で、大多数の人々の接種が完了した後も感染症が収束しない状況が発生した後は、重症化予防効果が強調されるようになった。また、日本では、ワクチンの追加接種によって、未接種の場合よりも感染率が高まることが判明した（枝松 2022; 上阪 2022）。さらに、小島によれば、追加接種数が世界で最多の日本が、世界で一番、新型コロナによる死亡者数（追加接種後）が多いことが国際的な比較調査で判明している。死亡者の実数ではアメリカがいちばん多いが、日本の総人口がアメリカの総人口の 3 分の 1 であることを考えれば、日本の新型コロナによる死亡者数（追加接種後）は、実質的には世界で一番多い（小島 2023, 97-98）。さらに、ワクチン接種後に国内外で激増した超過死亡の原因についても、充分に検証されるべき重要な課題であると指摘されている（小島 2024 年 1 月 11 日）[7)]。

さて、新型コロナワクチンの特徴に関する検討に戻ろう。mRNA が宿主細胞のゲノムに取り込まれず、しかも分解されてしまう点は、DNA の遺伝子治療と大きく異なる点であり、この技術の安全性の根拠ともなっている。だが、実際には、導入された mRNA の体内での残存期間は短いとは言えない。ワクチンの mRNA が、接種後、最長 28 日間血液中に存在することが報告されており（Castruita et al. 2023）、7 ～ 60 日後の患者のリンパ節でも検出されている（Röltgen et al. 2022）。すでにみたように、『特例承認に係る報告書』の説明では、mRNA は生体内の RNA 分解酵素によって速やかに除去されるとされているが、ヒト生体内での mRNA の動態は、こうした説明とはまったく異なる。

また、*in vitro* での実験結果では、ワクチンの mRNA が逆転写されることが判明している（Aldén et al. 2022）。ファイザー社の mRNA ワクチン（コミナティ）を添加した培養液中で、ヒトの肝がん由来の細胞株を培養したところ、

培養開始から6時間で、細胞内においてヒト内因性逆転写酵素であるLINE-1の働きによって、mRNAがDNAに逆転写することが示された。もし仮に、こうしたことが生体内でも起きるとすれば、スパイクタンパク質をコードする遺伝子がゲノムに組み込まれ、その影響が不可逆的となる可能性も否定できない（小島 2023年3月24日）[8]。

さらに、これは原理的な問題というよりは製造工程上の問題であるが、ファイザー社およびモデルナ社のワクチンサンプルに、欧州医薬品庁（EMA）の基準値を数桁上回るプラスミドの混入が見られ、混入したプラスミドが大腸菌を形質転換することが報告されている（同書）。プラスミドは、mRNAの製造工程で必要なDNAであり、スパイクタンパク質の遺伝情報をコードしているわけではないが、ゲノムに挿入されれば宿主細胞をがん化するおそれもある（同書）。DNAの遺伝子治療では、導入遺伝子がゲノムに挿入されて、宿主細胞をがん化する事故が多発している（Hacein-Bey-Abina et al. 2003; McCormick & Rabbitts 2004; Braun 2014）。

つぎに、導入可能な遺伝子の種類についてみてみよう。新型コロナワクチンの場合は、導入されるmRNAはウイルスのスパイクタンパク質をコードするものであるが、原理的には、あらゆる遺伝子（より正確にはあらゆる遺伝子の転写産物であるmRNA）が導入可能である。mRNAを使用した場合も、DNAを使用した遺伝子治療用製品と同様に、治療目的を超えた遺伝子導入（エンハンスメントなど）も可能であろう。

では、導入可能な部位についてはどうであろうか。新型コロナワクチンのmRNAは、身体中の様々な器官、とりわけ、肝臓、脾臓、副腎、卵巣、骨髄に運ばれる[9]。他のmRNAを用いた場合も同様であろう。導入のために使用されるLNPには細胞選択性が無く、あらゆる細胞にmRNAを導入することが可能であるが、その反面、標的とする導入細胞を限定することはできない。

以上で、構造や効能・効果を惹起する作用機序、導入可能な遺伝子や導入可能な部位などについては整理できたので、つづいて、新型コロナワクチンの効

能・効果として期待されている作用とは異なる諸作用についてみていこう。これらの諸作用は、主としてこのワクチンによって産生されるスパイクタンパク質によるものと考えられるが、SARS-CoV-2 のスパイクタンパク質の諸作用との区別は難しい。したがって、起こりうる誤解を防ぐためにも、次の点を確認しておきたい。すなわち、これから述べる諸種の作用は、SARS-CoV-2 のスパイクタンパク質の諸作用からの推論や、コロナワクチンが産生したスパイクタンパク質に関する *in vitro* での実験結果に基づく推論を多く含んでいるという点である。本項の狙いは、新型コロナワクチンの原理的な特徴を整理することなので、検証されている作用機序のみならず推定される作用機序をも視野に入れる必要があるためである。したがって、これから述べるスパイクタンパク質の諸作用は、必ずしも生体内での諸作用であるとは限らず、また、必ずしも新型コロナワクチンのスパイクタンパク質に固有の諸作用を意味するわけではないということを強調しておきたい[12)]。

b. あらゆる臓器組織に多様な影響を与える可能性

周知のようにSARS-CoV-2による感染症がCOVID-19であるが、その症状や、障害を受ける臓器がきわめて多岐にわたるのは、SARS-CoV-2 が細胞に感染する際に、ACE2（angiotensin-converting enzyme 2（アンジオテンシン変換酵素2））を介して細胞内に取り込まれまれることと深く関連している。ACE2は、呼吸器系の 2 型肺胞細胞、腸上皮細胞、内皮細胞、眼や腎臓の上皮細胞、肺胞単球細胞やマクロファージなど一部の免疫細胞、大脳皮質や脳幹などの神経系細胞などに広く発現している（正井 2020）。Lukiw ら（Lukiw et al. 2022）も、ACE2 がほとんど全ての組織に発現していることを報告し、SARS-CoV-2 感染の危険性は、高い感染性ばかりでなく、SARS-CoV-2 が、ACE2 の幅広い発現を利用して脳などの種々の組織や細胞に入り込んで攻撃する点にもあることを指摘している。したがって、ウイルスのスパイクタンパク質とほぼ同じ構造を有する新型コロナワクチンのスパイクタンパク質[11)] が、ACE2 への結合を介して引き起こす多様な現象は、このワクチンの特質を考えるうえできわめて重

要なものである。

c. 血圧上昇作用

SARS-CoV-2 表面のスパイクタンパク質が、感染の標的となる細胞表面の ACE2 に結合すると、セリンプロテアーゼ TMPRSS2 がスパイクタンパク質の一部を切断し、ウィルスのエンベロープと細胞膜が融合する。その結果、ウイルスが細胞内に侵入する（Walls et al. 2020）。このとき、ACE2 の発現が低下する（Hirano & Murakami 2020）。

ACE2 は、血圧を上昇させる作用を持つアンジオテンシンⅡ（Angiotensin II）を、アンジオテンシン（1-7）（Angiotensin（1-7））へ変換する。アンジオテンシン（1-7）は、血管弛緩作用、血管透過性の抑制や抗炎症作用などにはたらくため、スパイクタンパク質の ACE2 への結合によって、アンジオテンシン（1-7）の生成が阻害され（Verdecchia et al. 2020a）、血圧上昇が生じる可能性がある（Verdecchia et al. 2020a; 2020b）。SARS-CoV-2 表面のスパイクタンパク質ばかりではなく、ワクチン接種によって産生されたスパイクタンパク質も、血管内皮細胞上の ACE2 の発現を低下させ、血圧を上昇させる可能性が報告されている（Zappaa et al. 2021）。

さらに、スパイクタンパク質は、ACE2 に結合することで、AT1（angiotensin II receptor type 1（アンジオテンシンⅡタイプ 1 受容体））シグナルを活性化する。その結果、(i) IL-6 トランスシグナル伝達を促進し（Patra et al. 2020）、(ii) プロテインキナーゼの活性化を介して血管壁の肥厚を誘導し（Suzuki et al. 2021）、(iii) ミトコンドリアの機能を損ない（Lei et al. 2021）、(iv) がんなどの様々な障害を引き起こす可能性のある活性酸素種（ROS: reactive oxygenspecies）を生成する（Eguchi et al. 2018）。

d. がん細胞への諸作用　スパイクタンパク質は、*in vitro* の実験で、ERα（estrogen receptor α（エストロゲン受容体 α））に特異的に結合し、転写活性化能を高めることが報告されており、乳がん細胞株の培養液にスパイクタンパク質を添加すると、乳がんの細胞株が増殖する（Solis et al, 2022）。膜結合型

ERα は、細胞周期を促進したり、発がんに影響を与えたりする様々な経路（c-Myc の活性化を含む）に関与している（Schwartz et al. 2016）。卵巣がん、白血病、前立腺がん、口唇・喉頭・咽頭がん、すい臓がん、乳がんなどは、エストロゲンおよび ERα 感受性腫瘍として知られている（Langdon et al. 2020; van Dijk 2020, Xue et al, 2020; Drake et al. 2021; Neto et al. 2021）。

e. 免疫機能への影響

がん細胞の増殖の制御に関わる免疫能について上で述べたが、スパイクタンパク質に対する抗スパイクタンパク抗体（中和抗体）は、細胞表面に現れているスパイクタンパク質に結合して、自己免疫性炎症反応の引き金になる（Polykretis et al. 2023）。抗スパイクタンパク抗体は、検討された 55 種類のヒト組織抗原のうち、脳や筋肉などヒトの 25 抗原と交差反応することが示されている（Vojdani et al. 2020）。また、2022 年 3 月のファイザー社の報告では、48 種類の自己抗体の出現と、38 種類の自己免疫疾患の発生が記載されており、自己免疫疾患の種類は、血液、消化器、脳・神経、呼吸器、循環器、腎臓、内分泌、皮膚、筋肉、耳鼻科領域、眼科領域と多種類の臓器に及んでいるとのことである（小島 2022 年 8 月 4 日）。

新型コロナワクチンの接種後に、表面にスパイクタンパク質を発現している細胞を攻撃する細胞傷害性 T 細胞も誘導されるが、このような抗体依存性、あるいは T 細胞依存性自己攻撃によって、自己免疫疾患が発症する可能性も考えられている（小島 2023 年 3 月 15 日）。

また、スパイクタンパク質は、抗体依存性感染増強（Antibody-Dependent Enhancement：ADE）を引き起こす（Liu et al. 2021）。ADE とは、ウイルスなどから体を守るはずの抗体が、免疫細胞などへのウイルスの感染を促進し、ウイルスに感染した免疫細胞が暴走して症状をいっそう悪化させてしまう現象である。

このほか、スパイクタンパク質によって、免疫の刷り込みが起こることが判明している（Röltgen et al. 2022）。免疫の刷り込みとは、最初に曝露したウイ

ルス株に再び遭遇したときに免疫系が強く反応する一方で、系統の近い別の株への反応は弱くなる傾向のことをいう。

免疫抑制が引き起こされることも報告されており（Seneff & Nigh 2021; Seneff et al. 2022; Parry et al. 2023）、さらに、*in vitro* の実験で、スパイクタンパク質が心臓周皮細胞の機能不全や内皮細胞の炎症を起こすことから、新型コロナワクチンのスパイクタンパク質が心筋炎の原因になる可能性も指摘されている（小島 2023 年 2 月 23 日）[12)]。

以上のような新型コロナワクチンの構造と作用機序、スパイクタンパク質の諸作用（新型コロナワクチンに固有の作用とは言えないものも含まれている）からみた特徴をもとに、mRNA ワクチンの原理的な特徴を整理してみると、あらゆる遺伝子の mRNA が、あらゆる細胞へ導入可能であり、生体に対して様々な重要な作用（治療効果や予防効果、および、それら以外の諸作用）を及ぼし、一定期間、生体内に残存するなど、多くの点で、DNA を使用した遺伝子治療との共通点あるいは類似点があることが分かる。

両者の最大の相違点は、対象となる服用者（接種者）の属性（健康人か患者かなど）と人数である。DNA を用いた遺伝子治療は、対象者が特定の患者（希少疾患に罹患している比較的少数の患者）に限定されるのに対して、mRNA を用いた遺伝子治療の対象は、世界各国の全人口の圧倒的多数を占める健康人である。2023 年 8 月末までに、全世界で 135 億回のコロナワクチンが、感染予防のために COVID-19 を発症していない健康人を対象に接種されている（小島 2024 年 1 月 11 日）。

3. 遺伝子治療の商品化をめぐる考察

以上の分析に基づいて、新型コロナワクチンに代表される mRNA ワクチンを含む遺伝子治療用製品の特徴をできるだけ簡単に述べるならば、遺伝子（遺伝物質）の操作によって、疾病の予防・治療をおこなうばかりではなく、人間の心身のあらゆる特性をも改変させる「潜在力」を有する商品ということにな

る。遺伝子治療用製品は、(1) 自然のものであれ、人工的に合成されたものであれ、あらゆる遺伝物質を、身体のあらゆる部位に導入でき、(2) 生体の異常を修復するだけではなく、(3) ありとあらゆる生理学的反応を惹起する既知のあるいは未知の作用機序に基づく諸作用をもち、(4) 究極的には人間の特性をも改造しうる潜在力を有する商品である。

このような遺伝子治療用製品の特長に基づいて、遺伝子治療の商品化という事態のもつ経済学的な意味を整理しておこう。それは、(1) mRNA ワクチンを含む遺伝子治療が、営利企業が製造販売する商品になるということ、(2) この商品が市場に流通し、患者あるいは健康人が消費することであり、そしてさらに、(3) 商品開発の前提として、生体試料である遺伝子が商品化すること（遺伝子特許という形態で売買されること（花岡 2022））である。

本節では、このような遺伝子治療の商品化という事態について考察してみたい。

3. 1　商品論

マルクスは『資本論』のなかで、労働力の商品化が、土地や資本（自体）の商品化をも促進して、商品経済が全面的に支配的であるような資本主義社会が誕生したという理論を展開した（宇野 2016, 241）。資本主義社会においては、生産物はもちろん、労働力や土地、資本（自体）のような非生産物までもが交換関係の下で商品となりうる。

> 極論すれば、資本主義は形態的にはいかなるものをも商品化するという方向性をもっており、商品とは何でも入れることのできるケースやコンテナのような流通形態といえる。これが、最も包括的な商品の規定といってよい（田中 2012, 3）。

以上のようなマルクスの商品および商品化に関する理論を、田中にならって

本稿でも「商品論」と呼ぶことにする（同書, 2）。

3.2 〈過剰商品化〉および〈超・過剰商品化〉

『資本論』において展開された労働力、土地、資本（自体）の商品化以降、急速に進展していった非商品経済領域の商品化という事態を〈過剰商品化〉として捉えたのは馬場である（半田 2016, 129-130）。馬場は、労働力が商品化されるにとどまらず、労働力の再生産にかかわる非商品経済的人間関係をも商品経済が取り込む事態を〈過剰商品化〉と捉えた。労働力の再生産にかかわる非商品経済的人間関係とは、教育・子育て・医療など、次世代の労働者を育成するためのあらゆる人間関係を含意するものと思われる。

馬場の過剰商品化論をさらに発展させ、〈外延的過剰商品化〉および〈内包的過剰商品化〉という概念を提示したのは田中である。田中はまず、『資本論』において分析された労働力、土地、資本（自体）の３つの商品化を超えて拡大していく商品化傾向を総括して、次のように述べている。「マルクスは、すでにこの時［『資本論』第１巻を著した時］に商品経済の全面化を想定しているようだが、今日の状況に鑑みると、商品化は一段と進んでいるといえる。マルクスが想定していないような事物や領域に商品化の波が及んでいる」（田中, 前掲書, 1）。

田中の提唱する概念について整理しておこう。まず、〈外延的過剰商品化〉とは、基本的には市場とは馴染まないと考えられる領域の商品化であり、この領域の商品化の例として、国家と家族の商品化について論じている。

国家の商品化とは、国防、国土保全、治安維持、教育、社会保障その他の社会インフラの整備といった領域の商品化である。

商品化される共同体は国家だけではない。「国家と並ぶもう一つの共同体である家族の領域」（同書, 7）もまた商品化される。家電製品の普及、食における「外食化」や「中食化」の拡大、衣類における既製服化、家事対象の商品化、家事サービス、介護・育児サービスなどが例として挙げられている（同書, 7）。

この家族の商品化という事態の一つとして、田中は「人体そのものの商品化」（同書, 8）を挙げている。田中は、人体そのものの商品化の例として、以前から行われてきた売血に加えて、腎臓などの臓器や卵子・精子などの売買、代理出産などを挙げ、「その道徳的な善悪は別として、過剰な商品化といわなければならない」（同前）と述べている。

その他に、市場と関連を持ってはいるが従来の市場の枠組みを超えた領域である金融商品や知的財産権、二酸化炭素排出権にまで商品化は拡大しているとした。

以上が〈外延的過剰商品化〉である。この概念は、馬場の〈過剰商品化〉に近い概念であると思われる。つぎに、〈内包的過剰商品化〉について整理してみよう。田中は、すでに商品化している領域に使用価値の空洞化を伴いながら、さらに商品化を進めるという事態を〈内包的過剰商品化〉と呼び、現代の服飾や食品にみられるような、商品そのものの素材や機能という本来の使用価値ではなく、ブランドという価値が重視される例を挙げている。使用価値とは、その商品に固有の属性である（これに対して、交換価値は、その商品と他の商品とを交換可能にする価値であり、貨幣によってあらわすことができるものである（宇野, 前掲書, 29-30））。

田中が述べている「使用価値の空洞化」という概念は難解であるが、ブランドは、それ自体としては商品の属性である使用価値とは次元が異なるので、これを過度に重視することを使用価値の空洞化と呼ぶのであろう。

こうした商品化傾向を総括して、田中は、現代資本主義の状況を、〈外延的過剰商品化〉と〈内包的過剰商品化〉とが両輪となって累進している状況であると把握できると主張している（田中, 前掲書, 11）。

最後に、半田の商品化論を検討しよう。半田（前掲書）は、馬場や田中の〈過剰商品化〉という概念を基に、さらに〈超・過剰商品化〉という概念を提唱した。すでにみたように、馬場は、労働力の再生産にかかわる非商品経済的人間関係をも商品経済が取り込む事態を〈過剰商品化〉と呼んだが、半田は、こう

した事態が一層進展するとともに、この領域を超えた異次元の商品化を〈超・過剰商品化〉と呼ぶ。

では、〈超・過剰商品化〉とはなにか。〈超・過剰商品化〉とは、労働力の再生産にかかわる領域の商品化のみならず「異次元の商品化」をも含む事態ということである。半田は、新興資本主義国の発展が「労働力の再生産に関わる領域のみならず、異次元の商品化を含む〈超・過剰商品化〉を加速している一大要因となっている点に止目する必要があろう」（半田, 前掲書, 130）と述べている。半田は、〈超・過剰商品化〉傾向の現れとして、ゲノム解析やナノ技術などを例に、人体内奥への商品化の浸透について論じ、〈超・過剰商品化〉とは「商品経済の限りなき拡散」であり、この現象が「ナノテクノロジーの発達を背景に「人体内奥（ミクロコスモス）」や人間の関係性にまで及んでいることなどに現われていると指摘する（半田, 前掲書, 140）。

半田は、〈過剰商品化〉および〈超・過剰商品化〉を、外延的・内包的とに区分する立場はとっておらず、田中の立論との対応関係は必ずしも明らかではない。だが、労働力の再生産に関わる人間関係の商品化を意味する半田の〈過剰商品化〉は、田中の〈外延的過剰商品化〉に近く、〈超・過剰商品化〉は、労働力の再生産に関わる人間関係の商品化を超える「異次元の商品化」を意味することから、〈外延的過剰商品化〉と同時に〈内包的過剰商品化〉が進行する事態に近いように思われる。

3.3　遺伝子治療の商品論への定位

では、遺伝子治療の商品化は、以上の〈過剰商品化〉〈超・過剰商品化〉のなかに、どのように位置づけることができるであろうか。

田中は、すでにみたように、〈外延的過剰商品化〉のなかの、家族関係のカテゴリーに、「人体そのものの商品化」などを位置付けている。遺伝子治療の成立、そしてその商品化の前提には遺伝子という生体試料、すなわち人体（の一部）の商品化という事態がある。したがって、もし田中の立論の枠組みで考

えるならば、遺伝子治療の商品化は、〈外延的過剰商品化〉のなかの「人体そのものの商品化」に最も近いと思われる[14)]。そして、遺伝子治療用製品は、人体の内奥において、深くて強い諸作用を発揮するものであるから、遺伝子治療の商品化は、人体内奥への商品化の浸透という文脈に位置づけられるものと思われる。もしそうなら、遺伝子治療の商品化は、〈外延的過剰商品化〉がいっそう進行した、〈超・過剰商品化〉の現れということになるだろう。

最後に、〈内包的過剰商品化〉との関係を考えてみよう。遺伝子治療用製品は、疾病の予防や治療という効能・効果という使用価値と、それ以外の諸作用という非使用価値（有害作用の場合には「反使用価値」とでも呼ぶべき価値）を併せ持つ。非使用価値は「ブランド」の価値のような「イメージ」とは明らかに異なる実質的な価値であるから、田中の指摘するような使用価値の空洞化とは異なる。だが、もし仮に、非使用価値が本来の使用価値を大きく上回って「反使用価値」となる場合には、使用価値自体が無意味になるわけであるから、その場合には、使用価値の空洞化が起こっていると言ってよいように思われる。

ここで、議論を整理してみると、要するに、遺伝子治療の商品化は、〈超・過剰商品化〉の現れであり、人体内奥への商品化の浸透である。

では、以上のような遺伝子治療の商品化は、社会に対してどのような影響を与えるのであろうか。

3.4　遺伝子治療の商品化が促進する資本による人体内奥の包摂

資本主義社会においては、商品は歴史的に特殊な商品経済の論理、すなわち資本の論理の下に置かれる。マルクスによれば、商品は、他の商品との交換関係の下で貨幣と交換され、貨幣の特殊な使用方法から資本が生まれる。このような資本主義社会では、商品生産の目的は、使用価値を有する商品それ自体の生産にあるのではなく、資本を増殖させることにある[13)]。商品が生産されればされるほど、生産に投下された資本は増殖し、利潤は増大する。大量生産・大量消費は、資本の論理の端的な現象形態である。

この資本の論理の現れであると考えられる大量生産・大量消費が、高度経済成長期において、医薬品分野においても支配的となり、未曽有の薬害を多発させたことは周知の事実である（高野 1984）。現代では、現象形態は変わったが、たとえば、タミフルをめぐる副作用問題やイレッサ薬害などをはじめとする様々な薬害や薬品問題が次々と発生している。タミフルの事例にみられるような、市場の日本への集中（浜 2008; 浜 2013）、イレッサに見られるような、臨床試験の終了を待たない早期承認（片平編 2013）など、その根底には、最大利潤を追求して運動する資本の論理が横たわっているように思われる。

医薬品が大量生産・大量消費されることが薬害を引き起こすのは、もともと、医薬品には両価的な使用価値が属しているからである。医薬品が生体にとって異物であり、効能・効果と副作用（ワクチンでは副反応と呼ばれる）とが併存していることは常識といってよく、過去の薬害裁判でも、医薬品に副作用があることは自体は商品の欠陥とはみなされていない（塩野 2013）。当該医薬品の有する効能・効果と有害作用との比較考量によって、前者が後者との関係で、より優位であり、なおかつ添付文書で有害作用に関する警告を明記することで、商品として認められることになる。

その意味では、遺伝子治療の商品化を特別視する必要はないとも考えられるが、遺伝子治療用製品が従来の医薬品と異なるのは、それが内包する諸作用の多くが未知であり、人体の細胞の内部や、さらにいっそう内部の遺伝子にまでおよぶものであり、不可逆的な性格をもっている点にある。遺伝子治療用製品の潜在力は、中枢神経系の遺伝子改変によって人間の心身の性質を根底から変化させ得るものであり（ただし、現在市販されている製品にはこのような作用があることは証明されていない）、従来の医薬品の諸作用とは比較にならない。遺伝子治療の商品化が今後ますます進むにつれて（新型コロナワクチンに至ってはすでに世界市場を覆いつくしている）、遺伝子治療の商品化による心身内奥への影響がいっそう広く、かつ深くなっていくことであろう。

遺伝子治療の商品化の是非はここでは論じない。だが、私たちの社会が、遺

伝子治療の発展を今後ますます推進していくという選択をするならば、過去の、そして現在の薬害が経済的な要因によって引き起こされたという事実を教訓として、今後起こりうる様々な惨禍を防止するための社会的な仕組みを整備していくことが不可欠である。そして、そのためには、遺伝子のような生体試料の商品化に基づく医療技術の商品化が社会に与える影響を、予見しうる限界まで考察することが不可欠の課題であると考える。

このように、人間の生命と健康にたいして甚大な影響―効能・効果という正の影響と、有害作用等の負の影響―を与えうる医療技術が商品化する事態を、本稿では、人間の生命と健康の、資本のもとへの包摂と呼ぶことにする。

「資本のもとへの包摂」という概念は、資本（資本家）によって労働過程が支配される事態を表す概念としてマルクスが提示したものである（マルクス 1970）。その後、数多くのマルクス経済学者によって発展的・批判的に継承され、資本による労働過程の支配のみではなく、非市場領域までもが商品化を通じて資本の論理に支配されていく事態を示す概念となっている（正上 2006, ネグリ 2003, ネグリ・ハート 2003）。こうした諸学説を踏まえて、人間の生命と健康が、資本のもとへと包摂されるという事態を、より学問的に厳密に定義することは筆者の今後の課題とし、ここでは、上述のような簡単な説明にとどめておきたい。

最後に、本稿の結論を簡単に述べるならば、次のようになろう。遺伝子治療の商品化とは、〈超・過剰商品化〉を通じての、資本のもとへの、人間の生命と健康の包摂の現れであり、人間の心身内奥の、資本のもとへの包摂の現れである。こうした傾向が、現代資本主義の特徴の一部を構成していると思われる。ネグリとハートは、資本がこれまで自然の中のあらゆるものを資本に変え、あるいは資本に従属させてきたことを指摘したうえで、こうした過程が、やがて限界に達するであろうと述べている（ネグリ・ハート, 前掲書, 351-353）。

……資本の差し迫った破滅を予言した者たちは、間違っていたわけではな

く、たんにその時期を早めに設定しすぎたのである。しかし、非資本主義的環境の限界が現実のものであることに変わりはない。かつて豊富であった自然の資源は、早晩、枯渇するだろう（同書, 352）。

生命科学技術の発展がますます加速し、バイオエコノミーが各国の国策となっている今、現代資本主義を、資本主義の歴史の中に定位していくという、より大きな問題の研究も、きわめて重要な課題であろう。

注

1) グラクソ・スミスクラインは、ADA 欠損症、ウィスコット・アルドリッチ症候群、慢性肉芽腫症、異染性白質ジストロフィー等の遺伝子治療分野に参入した。
2) バクスターは、血友病の遺伝子治療分野に参入した。
3) 「コラテジェン」、「キムリア」、「ゾルゲンスマ」の『審査報告書』を参照。
4) たとえば、特定の mRNA に対する「モルフォリノアンチセンスオリゴ（Morpholino Antisense Oligo）」を用いて、タンパク質の翻訳阻害（ノックダウン）することで、特定の遺伝子（DNA）を除去（ノックアウト）した場合と近似した効果（表現型）が得られる。
5) 「コミナティ筋注」に関する『特例承認に係る報告書』の 13 ページを参照。
6) 「モデルナ筋注」に関する『特例承認に係る報告書』の 17 ページを参照。
7) 小島は、17 か国を対象に、ワクチン接種後の超過死亡の増加を検討した研究（Rancourt D. G. et al. 2023）を紹介している。
8) 小島は、この研究では、逆転写された DNA が核内に侵入して宿主の DNA に組み込まれているかどうかは明らかでなく、「本研究結果に対しては、1）逆転写された DNA が核内に存在することが示されていない、2）もともと *LINE*-1 が過剰発現しているがん細胞株を用いて行われた実験結果であり、正常細胞で同じ結果が得られるのかは明らかではないことを理由に、ワクチン由来の遺伝情報がヒトの DNA に組み込まれる可能性を否定する意見も見られる」（小島 2023 年 3 月 24 日）と述べている（引用文中の「*LINE*-1」の表記は原文のままである）。
9) SARS-CoV-2 mRNA vaccine（BNT162, PF-07302048）.
10) 新型コロナワクチンの諸作用については、当初、Gibo ら（Gibo et al. 2024）の論文を参考にしてまとめることを考えていた。ところが、この論文が、突然「撤回」となったために、予定を変更し、Gibo らの論文に引用されている原著論文を直接参照することにした。論文が撤回処分となるのは、その研究に何らかの間違いや不正があった場合である。名古屋市立大学大学院医学研究科公衆衛生学分野教授の鈴木（2024）によると、Gibo らの論文に間違いがあったということである。筆者は、現時点では、

今回の論文撤回に関する著者らの公式見解を確認できていない。

11) 新型コロナワクチンによって産生されるスパイクタンパク質は、SARS-CoV-2 のスパイクタンパク質と完全に同一ではなく、スパイクタンパク質の最適な融合前構造を保つために、2 個のアミノ酸が置換されている（「モデルナ筋注」および「コミナティ筋注」に関する『特例承認に係る報告書』を参照）。

12) 小島は、ワクチン接種後に心筋炎を発症した患者の血液中に、遊離スパイクタンパク質が検出される一方で、心筋炎を発症していないワクチン接種者には遊離スパイクタンパク質は検出されなかったという報告（Yonke et al. 2023）について紹介している。

13) 資本主義社会における生産過程においては、「一般に使用価値は、それが交換価値の物質的土台、その担い手であるがゆえにのみ、生産される」（マルクス, 1969(2), 23）。

14) ただし、家族関係の商品化というカテゴリーに、人体そのものの商品化を位置付けることにはいささか無理があると思われる。実際、田中自身も、家族関係の商品化という項目で「人体そのものの商品化」について述べることは、「やや不適当であるが」と断っている（田中, 2012, 8）。

文献

（欧文の論文のタイトルは、原文の表記をそのまま用い、大文字と小文字の表記は統一していません。）

Aldén, M., Falla, F. O., Yang, D. et al. (2022) Intracellular Reverse Transcription of Pfizer BioNTech COVID-19 mRNA Vaccine BNT162b2 In Vitro in Human Liver Cell Line. *Curr. Issues Mol. Biol.* 44, 1115-1126.

Banoun, H. (2023) mRNA: Vaccine or Gene Therapy? The Safety Regulatory Issues. *Int. J. Mol. Sci.* 24, 10514. https://doi.org/10.3390/ijms241310514.

Braun, C. J., Boztug, K., Paruzynski, A. et al. (2014) Gene therapy for Wiskott-Aldrich syndrome—long-term efficacy and genotoxicity. *Sci. Transl. Med.* 6, 227.

Castruita, J. A. S., Schneider, U. V., Mollerup, S., et al. (2023) SARS-CoV-2 spike mRNA vaccine sequences circulate in blood up to 28 days after COVID-19 vaccination. *APMIS* 131, 128-132.

Drake, V., Bigelow, E., Fakhry, C. et al. (2021) Biologic and behavioral associations of estrogen receptor alpha positivity in head and neck squamous cell carcinoma. *Oral. Oncol.* 121, 105461.10.1016/j.oraloncology.2021.105461.

Dunbar, C. E., High, K. A., Joung, J. K. et al. (2018) Gene therapy comes of age. *Science* 359, 6372:eaan4672. doi: 10.1126/science.aan4672.

枝松佑樹（2022）「十分な説明できず」厚労相が陳謝　ワクチン接種歴のデータ計上問題」『朝日新聞 DIGITAL』2022 年 6 月 14 日．https://www.asahi.com/articles/ASQ6G3VKZQ6GUTFL00K.html（2024 年 10 月 11 日閲覧）

Eguchi, S., Kawai, T., Scalia, R. et al. (2018) Understanding angiotensin II type 1 receptor signaling in vascular pathophysiology. *Hypertension* 71, 804-810. 10.1161/HYPERTENSIONAHA.118.10266.

FDA Guidance for Human Somatic Cell Therapy and Gene Therapy, CBER March 1998, Current Content as of 21 April 2021. https://www.fda.gov/regulatory-information/search-fda-guidance-documents/guidance-human-somaticcell-therapy-and-gene-therapy（2024 年 9 月 7 日閲覧）

Friedmann, T. & Roblin, R. (1972) Gene Therapy for Human Genetic Disease? *Science* 175, 949-955.

Gibo, M., Kojima, S., Fujisawa, A., et al. (2024) Increased Age-Adjusted Cancer Mortality After the Third mRNA-Lipid Nanoparticle Vaccine Dose During the COVID-19 Pandemic in Japan. *Cureus* 16, e57860. DOI 10.7759/cureus.57860. (Retraction)

Hacein-Bey-Abina, S., von Kalle, C., Schmidt, M. et al. (2003) A serious adverse event after successful gene therapy for X-linked severe combined immunodeficiency. *N. Engl. J. Med.* 348, 255-256.

浜六郎（2008）『やっぱり危ないタミフル：突然死の恐怖』金曜日.

浜六郎（2013）「薬害事例からみた安全政策の推移と課題」『社会医学研究』30, 7-22.

花岡龍毅（2022）「遺伝子治療用製品の研究開発および製造過程の分析―生体試料の生 – 資本分析へ向けて―」『教養諸学研究』150, 65-92, 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会.

花岡龍毅（2024）「遺伝子治療の商品化傾向の分析」『人間科学』41, 17-31, 常磐大学人間科学部.

半田正樹（2016）「現代「資本主義」の歴史的種差性―段階論再考」SGCIME 編『グローバル資本主義と段階論』（シリーズ第Ⅱ集, 第 2 巻）, 125-152, 御茶の水書房.

Hirano, T. & Murakami, M. (2020) COVID-19: A New Virus, but a Familiar Receptor and Cytokine Release Syndrome. *Immunity* 52, 731-733. doi: 10.1016/j.immuni.2020.04.003.

ジョンセン, A. R.（2009）『生命倫理学の誕生』細見博志訳，勁草書房.

片平洌彦編（2013）『イレッサ薬害―判決で真実は明かされたのか』桐書房.

河本宏・辻真博（2020）「細胞を薬のように使う時代が来た」『新規の創薬モダリティ細胞医薬―細胞を薬として使う、新たな時代の基礎研究と治療法開発』羊土社, 10-15.

小島勢二（2022）「コロナワクチン接種後に懸念される中・長期的な副反応」『アゴラ 言論プラットフォーム』2022 年 8 月 4 日．https://agora-web.jp/archives/220802235653.html（2024 年 8 月 13 日閲覧）

小島勢二（2023）『検証・コロナワクチン―実際の効果、副反応、そして超過死亡』花伝社.

小島勢二（2023）「コロナワクチン接種後の死亡事例の因果関係を立証するには？」『アゴラ 言論プラットフォーム』2023 年 2 月 23 日．（https://agora-web.jp/archives/230222025318.html 2024 年 8 月 7 日閲覧）

小島勢二（2023）「mRNA ワクチン接種後に見られる自己免疫疾患の増加：新規発症機序の可能性」2023 年 3 月 15 日．https://agora-web.jp/archives/230314044129.html（2024 年 8 月 13 日閲覧）

小島勢二（2023）「コロナワクチンがヒトの遺伝子に組み込まれる可能性はあるか？」『アゴラ　言論プラットフォーム』2023 年 3 月 24 日．https://agora-web.jp/archives/230322232552.html（2024 年 8 月 7 日閲覧）

小島勢二（2024）「コロナワクチン接種と超過死亡の因果関係を示す科学的根拠」『アゴラ　言論プラットフォーム』2024 年 1 月 11 日．https://agora-web.jp/archives/240110004650.html（2024 年 8 月 13 日閲覧）

小島勢二（2024）「なぜコロナ mRNA ワクチンは遺伝子治療と言わないのか？」『アゴラ　言論プラットフォーム』2024 年 6 月 30 日．https://agora-web.jp/archives/240629000421.html（2024年8月7日閲覧（理由は不明だが、現在は削除されている））。

小澤敬也（2020）「遺伝子治療の本格的幕開け―その概念・歴史・最新動向」小澤敬也編『いま、本格化する遺伝子治療―遺伝性疾患・がんと戦う新たな一手』羊土社，10-17.

Langdon, S. P., Herrington, C. S., Hollis, R. L. et al. (2020) Estrogen signaling and its potential as a target for therapy in ovarian cancer. *Cancers* 12, 1647. 10.3390/cancers12061647.

Lei, Y., Zhang, J., Schiavon, C. R., et al. (2021) SARS-CoV-2 spike protein impairs endothelial function via downregulation of ACE 2. *Circ Res*. 128, 1323-1326. 10.1161/CIRCRESAHA.121.318902.

Liu, Y., Soh, W. T, Kishikawa, J. I. et al. (2021) An infectivity-enhancing site on the SARS-CoV-2 spike protein targeted by antibodies. *Cell* 184, 3452-66.e18. 10.1016/j.cell.2021.05.032.

Lukiw, W. J., Pogue, A., Hill, J. M. (2022) SARS-CoV-2 Infectivity and Neurological Targets in the Brain. *Cell. Mol. Neurobiol.* 42, 217-224. doi: 10.1007/s10571-020-00947-7.

マルクス, K.（1969）『資本論』（2）向坂逸郎訳，岩波文庫.

マルクス, K.（1970）『直接的生産過程の諸結果』岡崎次郎訳，国民文庫.

正上常雄（2006）「労働力の商品化についての再考察」SGCIME 編『現代マルクス経済学のフロンティア』（シリーズ第Ⅱ集，第 3 巻），125-146，御茶の水書房.

正井久雄（2020）「新型コロナウイルスの症状の多様性とウイルスの受容体の関係」東京都医学総合研究所，2020 年 9 月 8 日．https://www.igakuken.or.jp/r-info/covid-19-info20.html（2024 年 9 月 2 日閲覧）

McCormack, M. P. & Rabbitts, T. H. (2004) Activation of the T-cell oncogene LMO2 after gene therapy for X-linked severe combined immunodeficiency. *N. Engl. J. Med.* 350, 913-22.

ネグリ, A.（2003）『マルクスを超えるマルクス：『経済学批判要綱』研究』清水和巳，大町慎浩，小倉利丸ほか訳，作品社.

ネグリ, A.・ハート, M.（2003）『〈帝国〉グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲・酒井隆史・浜 邦彦ほか訳，以文社．Hardt, M. & Negri, A. (2001) *Empire*, Harvard University Press.

Neto, C. P. de O., Brito, H. O., da Costa, R. M. G. et al. (2021) Is there a role for sex hormone receptors in headand-neck cancer? Links with HPV infection and prognosis.

Anticancer Res. 41, 3707-16.10.21873/anticanres.15162.

Nirenberg, M. W. (1967) Will society be prepared? *Science* 157, 633.

額賀淑郎（2009）『生命倫理委員会の合意形成―日米比較研究』勁草書房.

Parry, P. I., Lefringhausen, A., Turni, C. et al. (2023) 'Spikeopathy': COVID-19 spike protein is pathogenic, from both virus and vaccine mRNA. *Biomedicines*. 11, 2287.10.3390/biomedicines11082287.

Patra. T., Meyer. K., Geerling, L. et al. (2020) SARS-CoV-2 spike protein promotes IL-6 trans-signaling by activation of angiotensin II receptor signaling in epithelial cells. *PLoS Pathog*. 16: 10.1371/journal.ppat.1009128.

Polykretis, P., Donzelli, A., Lindsay, J. C. et al. (2023) Autoimmune inflammatory reactions triggered by the COVID-19 genetic vaccines in terminally differentiated tissues. *Autoimmunity* 56, 2259123.10.1080/08916934.2023.2259123.

President's Commission for the Study of Ethical Problems in Medicine and Biomedical and Behavioral Research (1982) *Splicing Life: The Social and Ethical Issues of Genetic Engineering with Human Beings*. U.S. Government Printing Office. https://repository.library.georgetown.edu/bitstream/handle/10822/559376/splicinglife.pdf?sequence=1&isAllowed=y（2024 年 10 月 11 日閲覧）.

Rancourt, D. G., Marine Baudin, M., Hickey, J. et al. (2023) COVID-19 vaccine-associated mortality in the Southern Hemisphere. *CORRELATION*, 17 September 2023).

Röltgen, K., Nielsen, S. C., Silva, O. et al. (2022) Immune imprinting, breadth of variant recognition, and germinal center response in human SARS-CoV-2 infection and vaccination. *Cell* 85, 1025-40.e14. 10.1016/j.cell.2022.01.018.

SARS-CoV-2 mRNA vaccine (BNT162, PF-07302048). https://www.pmda.go.jp/drugs/2021/P20210212001/672212000_30300AMX00231_G100_2.pdf（2024 年 10 月 12 日閲覧）

Schwartz, N., Verma, A., Bivens, C. B. et al. (2016) Rapid steroid hormone actions via membrane receptors. *Biochim. Biophys. Acta*. 1863, 2289-2298. 10.1016/j.bbamcr.2016.06.004.

Seneff. S. & Nigh, G. (2021) Worse than the disease? Reviewing some possible unintended consequences of the mRNA vaccines against COVID-19. Int J Vaccine, theory, *Pract. Res*. 2, 38-79, 10.56098/ijvtpr.v2i1.23.

Seneff. S., Nigh, G., Kyriakopoulos, A. M. et al. (2022) Innate immune suppression by SARS-CoV-2 mRNA vaccinations: the role of G-quadruplexes, exosomes, and MicroRNAs. *Food Chem. Toxicol*. 164, 113008.10.1016/j.fct.2022.113008.

Solis, O., Beccari, A. R., Iaconis, D. et al (2022) The SARS-CoV-2 spike protein binds and modulates estrogen receptors. *Sci Adv*. 8, eadd4150. 10.1126/sciadv.add4150.

島田隆（2013）「遺伝子治療の現状と課題」PMDA 科学委員会，平成 25 年 7 月 16 日. https://www.pmda.go.jp/files/000156275.pdf（2024 年 10 月 18 日閲覧）

塩野隆史（2013）『薬害過失と因果関係の法理』日本評論社.

鈴木貞夫（2024）「【識者の眼】「非感染性・慢性疾患の疫学者が語る『撤回論文の問題

点①』」日本医事新報社. https://www.jmedj.co.jp/journal/paper/detail.php?id=24973（2024 年 9 月 14 日閲覧）

Suzuki, Y. J., Nikolaienko, S. I., Dibrova, V. A. et al. (2021) SARS-CoV-2 spike protein-mediated cell signaling in lung vascular cells. *Vascul. Pharmacol.* 137:106823. 10.1016/j.vph.2020.106823.

高野哲夫（1984）『戦後薬害問題の研究』文理閣.

田中史郎（2012）「過剰商品化試論――外延的過剰商品化と内包的過剰商品化――」『季刊経済理論』4，経済理論学会. http://stnk.starfree.jp/articles/Excessive%20Commodification.pdf（2024 年 8 月 17 日閲覧）

上阪欣史（2022）「ワクチン 2 回の陽性率、半数世代で未接種上回る　厚労省再集計で判明」『日経ビジネス』電子版 2022 年 6 月 1 日. https://business.nikkei.com/atcl/NBD/19/depth/01454/（2024 年 10 月 11 日閲覧）

宇野弘蔵（2016）『経済原論』岩波文庫.

van Dijk, A. D. (2020) The functional role of estrogen receptor alpha (ERα) in AML; a new potential therapeutic target for the treatment of inv (16) and MLL-rearranged acute myeloid leukemia. University of Groningen, Groningen, Netherlands. https://umcg.studenttheses.ub.rug.nl/728/（2024 年 10 月 12 日閲覧）

Verdecchia, P., Cavallini, C., Spanevello, A. et al. (2020a) The pivotal link between ACE2 deficiency and SARS-CoV-2 infection. Eur. *J. Intern. Med.* 76, 14–20. https://doi.org/10.1016/j.ejim.2020.04.037.

Verdecchia, P., Cavallini, C., Spanevello, A. et al. (2020b) COVID-19: ACE2centric infective disease? *Hypertension* 76, 294-299. https://doi.org/10.1161/HYPERTENSIONAHA.120.15353.

Vojdani, A., Vojdani, E., Kharrazian, D. (2020) Reaction of Human Monoclonal Antibodies to SARS-CoV-2 Proteins With Tissue Antigens: Implications for Autoimmune Diseases. *Front. Immunol.* 11. doi: 10.3389/fimmu.2020.617089

Walls, A. C., Park, Y. J., Tortorici, M. A. et al. (2020) Structure, Function, and Antigenicity of the SARS-CoV-2 Spike Glycoprotein. *Cell* 181: 281-92.e6.

Xue, J., Yao, Y., Yao, Q. et al. (2020) Important roles of estrogen receptor alpha in tumor progression and antiestrogen therapy of pancreatic ductal adenocarcinoma. *Life Sci.* 260, 118302. 10.1016/j.lfs.2020.118302.

Yonke, L. M., Swank, Z., Yannic, C. et al. (2023) Circulating Spike Protein Detected in PostCOVID-19 mRNA Vaccine Myocarditis. *Circulation.* 147, 867–876.

Zappaa, M., Verdecchiab, P., Spanevelloa, A. et al. (2021) Blood pressure increase after Pfizer/BioNTech SARS-CoV-2 vaccine. *Eur. J. Intern. Med.* 90, 111–113.

審査報告書

『コラテジェン筋注用 4 mg ＿アンジェス株式会社＿審査報告書』平成 31 年 2 月 4 日 独立行政法人医薬品医療機器総合機構.

https://www.pmda.go.jp/regenerative_medicines/2019/20190419001/111298000_23100FZX00001000_A100_1.pdf（2024 年 10 月 11 日閲覧）
『キムリア点滴静注__ノバルティスファーマ株式会社__審査報告書』平成 31 年 2 月 4 日 独立行政法人医薬品医療機器総合機構.
https://www.pmda.go.jp/regenerative_medicines/2019/R20190423001/300242000_23100FZX00002000_A100_1.pdf.pdf（2024 年 10 月 15 日閲覧）
『ゾルゲンスマ点滴静注__ノバルティスファーマ株式会社__審査報告書』令和 2 年 2 月 7 日 独立行政法人医薬品医療機器総合機構.
https://www.pmda.go.jp/regenerative_medicines/2020/R20200407001/300242000_30200FZX00001_A100_2.pdf（2024 年 10 月 11 日閲覧）
『特例承認に係る報告書』（COVID-19 ワクチンモデルナ筋注）令和 3 年 5 月 17 日 独立行政法人医薬品医療機器総合機構.
https://www.pmda.go.jp/drugs/2021/P20211213004/400256000_30300AMX00266_A100_2.pdf（2024 年 8 月 16 日閲覧）
『特例承認に係る報告書』（コミナティ筋注）令和 3 年 2 月 8 日 独立行政法人医薬品医療機器総合機構.
https://www.mhlw.go.jp/content/10601000/000739089.pdf（2024 年 8 月 16 日閲覧）

研究ノート

Kikou Yamata dans la presse japonaise féminine d'après-guerre : l'exemple du mensuel Fujin Gahō

Anne-Aurélie SEYA

L'autrice et métisse franco-japonaise Kikou Yamata (1897-1975) consacra sa vie à être une passeuse de culture, souhaitant expliquer le Japon aux Français avec le plus de justesse possible. Coqueluche des salons parisiens et des milieux intellectuels où elle fit des apparitions très remarquées en kimono, elle publia avec succès en 1925 son premier roman, *Masako*[1] aux éditions Stock.

Le mensuel féminin Fujin Gahō[2] (婦人画報), pour son numéro d'octobre 1947[3], décida de consacrer sa couverture à Kikou Yamata ainsi qu'un article à la métisse franco-japonaise et à son époux, le peintre Suisse Conrad Meili (1895-1969). Le couple résidait alors au Japon depuis 1939[4]. Si la lecture de l'article semble offrir l'image d'un couple baigné par l'art et la littérature, profitant d'une vie à la japonaise heureuse, mélangée à leur identité occidentale, il faut

---

1 YAMATA Kikou, *Masako,* Paris, Editions Stock, 1925.

2 Dès sa création en 1905, la revue se destina à un lectorat de femmes au foyer issues de milieux aisés, éduquées, et souhaitant être à la mode. La revue se voulait moderne et présentait les tendances et les modes de vie occidentaux. Laissant peu de place aux sujets comme la cuisine et les arts ménagers, elle proposait à ses lectrices conseils de mode et de beauté, articles sur la littérature, l'art ou les pays étrangers, essais etc... La revue était aussi connue pour son influence culturelle grâce à la contribution de nombreux écrivains et artistes célèbres. Le mensuel Fujin Gahō est toujours publié à ce jour (Janvier 2025).

3 Notons que la publication du magazine a été interrompue pendant la seconde guerre mondiale (plus pour des raisons financières que politiques ou liées à la propagande, même si la ligne éditoriale était considérée comme « suspecte ») mais a repris dès 1946.

néanmoins s'intéresser aux conditions de production de celui-ci et à l'implication de Kikou dans sa réalisation ainsi qu'à la vie privée du couple pour en comprendre les enjeux.

L'étude des papiers personnels de Kikou (journaux, notes, coupures de presse etc.)[5] a permis de mettre en relief ces détails de production et son contexte, offrant une lecture à deux niveaux du contenu de l'article. Pourquoi et comment Kikou Yamata a-t-elle tenté d'utiliser un magazine féminin japonais destiné à un lectorat privilégié pour son marketing personnel (*personal branding*) et celui de son époux ? Quelle double lecture est-il possible de faire de cet article ?

Il faut d'abord comprendre la situation du couple au Japon, qu'elle soit financière ou familiale[6] pour expliquer son contexte de production. Dans un second temps l'analyse de l'article (texte[7] et photographies) couplé à un travail sur différentes pièces d'archives apporte des exemples précis pour les différents niveaux de lecture et d'interprétations possibles, mais aussi l'implication de Kikou dans son élaboration.

---

4 Kikou avait décidé de retourner au Japon avec son époux à l'origine pour un voyage de deux ou trois mois, mais après son arrivée et le début de la guerre elle se retrouva bloquée dans le pays pendant presque dix ans. Elle fût même incarcérée en 1944 pendant plusieurs mois par la Tokkō, la haute police spéciale. Après une perquisition de leur maison, le couple avait été officiellement arrêté à cause de l'ouvrage *Au pays de la Reine, étude sur la civilisation japonaise et les femmes* (1942) de Yamata.

5 Fonds des Manuscrits de la bibliothèque de Genève, « Papiers Kikou Yamata 19e - 20e s. » coté CH BGE Ms. fr. 6321-6355

6 Les éléments biographiques de Kikou Yamata et de Conrad Meili proviennent de deux ouvrages de référence : PENISSARD Monique, *La Japolyonnaise : essai sur l'écrivain franco-japonais Kikou Yamata*, Lausanne, Favre, 1988 ; MEYER Denis Charles, *Monde flottant : la médiation culturelle du Japon de Kikou Yamata*, Paris, L'Harmattan, 2009. Ces derniers ont été croisés, entre autres, avec un terrain de recherche dans le cadre d'un travail sur la présence féminine française au Japon et une analyse des papiers personnels de Kikou Yamata.

7 Traduction (version) réalisée par Seya Anne-Aurélie pour les besoins du présent article.

Yamata avait bien compris qu'il fallait se prêter au jeu de l'exotisme japonais, portant un kimono et pratiquant l'ikebana, pour asseoir sa popularité et sa légitimé dans le monde littéraire français. Elle ne pouvait s'échapper de son image de Japonaise en France, qu'elle nourrissait elle-même, alors même qu'elle avait plus vécu comme une Française que comme une Japonaise. C'est sous couvert de sa japonéité, qui lui offrait un alibi de choix, qu'elle pouvait y exploiter et déployer tout son potentiel et son talent[8]. Parallèlement, le Japon la percevait avant tout comme une Française et Kikou elle-même avait tourné à son avantage cette situation pour s'octroyer des libertés de paroles ou d'action qu'elle n'aurait pu se permettre en tant que Japonaise. Kikou était donc française (ou trop peu japonaise) au Japon, aussi bien pour sa famille[9] que pour la presse japonaise[10] ou les cercles intellectuels et mondains auxquels elle appartenait. Cette perception de son identité principale n'était d'ailleurs pas forcément traitée de façon négative dans la presse dans la plupart des cas et Yamata elle-même avait parfois encouragé ce sentiment des Japonais à son égard. Kikou jouissait déjà d'une petite notoriété dans quelques milieux intellectuels japonais avant son départ pour la France en 1923, principalement liée à ses activités de pigiste et sa proximité avec plusieurs artistes japonais mais aussi européens. À son retour en 1939, malgré l'épisode de la guerre et un emprisonnement d'environ trois mois, elle avait réussi à conserver quelques précieux appuis[11]. Perçue avant tout comme une femme de lettres française (plus que comme une métisse), incarnant une cer-

---

8 L'article suivant détaille les questions d'identité, de métissage et d'instrumentalisation de la double identité chez Kikou Yamata : SEYA Anne-Aurélie, « Métisses franco-japonaises : de passeuses culturelles à objets exotiques. Kikou Yamata & Eugénie O'kin » in Paola Carrion Gonzalez, Julie Corsin & Laura, Gonzalez Rufo dir., Approches de la culture féminine dans l'Asie et l'Océanie francophones, Paris, L'Harmattan éditions, 2022, p.61-77.

9 L'époux d'Hana, sa sœur, avait tenté à plusieurs reprises de l'éloigner, allant jusqu'à financer son retour en France en 1923 et ses études à la Sorbonne. Ce dernier considérait que Kikou, trop française, exerçait une influence négative sur son épouse.

10 Le Asahi Shimbun particulièrement.

11 Kikou et son époux fréquentèrent notamment beaucoup l'Ambassade américaine (où était installée l'Ambassade suisse pendant la guerre).

taine modernité[12] et mariée à un artiste étranger, ce fut donc sans surprise que Fujin Gahō lui proposa d'apparaître dans la revue en 1947.

Yamata refusa dans un premier temps, considérant avec une certaine méfiance la presse japonaise, surtout après sa détention et des articles de la presse japonaise pendant la guerre qui affichèrent alors hostilité et parfois dénigrement pour cette étrangère, française, et son époux suisse[13]. Sur les conseils d'amis et après réflexion, elle accepta finalement y voyant notamment l'occasion d'améliorer leur situation, espérant par là même des retombées financières. L'article aurait été l'occasion de promouvoir non seulement son propre travail, mais aussi les peintures de Meili et leurs ventes qui auraient été les bienvenus pour le couple qui depuis de nombreuses années connaissait de sérieuses difficultés financières. De la même façon, la parution de l'article aurait permis de faire taire de nombreuses rumeurs sur Meili et leur vie de couple, tout en améliorant l'image générale de Kikou qui pâtissait des frasques de son époux.

Le couple avait vécu pendant quelques temps chez la sœur de Kikou, Hana, et son époux[14] avant d'être priés de quitter les lieux. Le voisinage, excédé notamment par les allées et venues des modèles de Meili, souvent des prostituées, venues poser nues[15], s'était plaint au maître des lieux[16]. Par ailleurs, la

---

12 À double tranchant selon la période : elle était alors perçue comme corrompue et décadente pendant la guerre, mais progressiste après 1945.

13 Après 1940, notamment suite à certaines prises de position de Kikou (par exemple à propos des femmes japonaises dans la société) et de son entourage (étranger ou considéré comme trop proche des étrangers dans le cas des Japonais), la presse japonaise se montre plus dure à son égard.

14 Cette dernière avait fait un très beau mariage avec un héritier de la famille Takashima 高島家. Le couple Meili-Yamata avait donc vécu quelques temps dans la luxueuse maison familiale des Takashima à Kamakura, vers Yuigahama.

15 Peindre en extérieur et en pleine nature semblait trop risqué pendant la guerre pour Meili, qui pouvait être accusé d'espionnage notamment. Il se tourna donc vers le nu, peignant dans un atelier.

16 Faire du nu dans le style de la peinture occidentale (à comprendre ici comme yōga 洋画) posait alors le principal problème, pendant la guerre, d'être perçu par le pouvoir comme une expression de la décadence de l'Occident.

mère de Kikou, Marguerite, avait informé sa fille des rumeurs qui couraient parmi les familles aisées de Kamakura, dont faisait partie les Takashima, sur son mari. Ce dernier était perçu comme un peintre peu talentueux, vivant aux crochets de sa belle-famille et de son épouse, ayant un penchant pour l'alcool et les femmes, et dépensant dans des maisons de plaisir tout l'argent durement gagné par Kikou qui allait travailler jusqu'à Tōkyō. Kikou n'ignorait bien sûr pas les infidélités de son mari, qui disait par exemple s'être fait voler plusieurs fois dans le train l'argent des ventes de ses tableaux, avant qu'une tenancière d'établissement ne vienne réclamer une dette de boisson le lendemain à la maison familiale des Takashima[17]. Le couple fut donc contraint de déménager dans une maison beaucoup plus modeste de Kamakura, où le balai des modèles de Meili perdura et où, là aussi, s'était propagé dans les alentours toutes sortes de rumeurs allant des infidélités aux tentatives de viol[18].

Outre le fait que les actions de son mari soient venues entacher sa réputation et son « marketing personnel », cela avait aussi détérioré les relations avec son entourage et attiré en partie la méfiance des autorités qui surveillaient déjà Kikou, conduisant à l'arrestation du couple par la police spéciale en 1944 et à une mise en détention. Depuis la fin de la guerre, la situation ne s'était malheureusement pas améliorée : les contrats de Kikou n'étaient plus suffisants pour faire vivre convenablement le couple et le retour en France n'était pas encore possible. Quant à la carrière d'artiste de Meili, s'il réalisait parfois des ventes[19], principalement grâce à l'association d'artistes dont il était membre[20], ses revenus, quand ils n'étaient pas dépensés hors du foyer, ne permettaient pas d'en vivre. Quand il n'enseignait pas le dessin et la pein-

---

17 Cf. papiers personnels de Kikou Yamata.

18 Meili fut accusé de tentative de viol par un de ses modèles. Arrêté et interrogé, il passa quarante jours en prison.

19 La majorité des tableaux de Meili, bien que sa peinture soit très appréciée par plusieurs autres artistes japonais et qu'il ait eu des élèves, ne trouva que peu d'acquéreurs. En 1949, lorsque le couple quitta le Japon, Meili emmena avec eux plus de 600 œuvres réalisées pendant ses années au Japon.

20 Meili était membre de l'association Issuikai 一水会.

ture et qu'il ne s'occupait pas des disciples japonais qui admiraient son travail, il écrivait pour quelques journaux en tant que critique d'art, amenant de temps à autre un petit revenu supplémentaire. Ce n'était en réalité pas un problème de talent ou de reconnaissance, sa carrière au Japon souffrait probablement plus de sa réputation et particulièrement de son goût prononcé pour les femmes, surtout ses modèles.
L'article de la revue aurait pu donc être l'occasion de promouvoir son travail auprès d'un lectorat comptant de potentiels mécènes et/ou acheteurs, mais avant tout, Kikou Yamata qui souffrait peut-être plus des rumeurs que des infidélités de Meili, y voyait l'opportunité de présenter son époux et leur vie de couple sous un aspect positif. Elle souhaitait ainsi reprendre le contrôle sur une narrative qui lui avait complétement échappé.

Le peintre Genichiro Inokuma 猪熊弦一郎 (1902-1992)[21] réalisa l'illustration de la couverture de la revue. Il présenta une première version au mensuel qui la refusa : l'illustration ne représentait pas leur ligne éditoriale et ne correspondait pas au cahier des charges fixé. De concert avec Yamata, le peintre avait réalisé cette illustration supposée mettre l'accent sur la double identité de l'autrice et sur sa « japonéité ». La seconde version proposée, représentant Kikou avec un pull tricoté en laine dans le style des îles d'Aran (Irlande)[22] et un collier en coquillages, peut-être un clin d'œil à Kamakura, fut acceptée.
L'article en lui-même n'est pas une interview ou un entretien à proprement parler. Il était à l'origine supposé surtout présenter l'autrice et être un portrait de femme de lettres. Si elle devait donc occuper la majorité de l'espace dans l'article, il n'en fut rien. Cette dernière s'arrangea pour que le focus soit

---

[21] Célèbre peintre japonais, il étudia à l'Université des arts de Tōkyō puis en France sous l'égide d'Henri Matisse. De retour au Japon en 1940 il fut un artiste très apprécié et participa à de nombreux projets (illustrations de revues et de livres, réalisations de fresques, collaboration avec des grands magasins etc.), travaillant notamment pour les magasins Mistukoshi (réalisant par exemple le design de leurs emballages). L'artiste travailla aussi à New-York de 1955 à 1975.

[22] Le modèle de pull représenté sur l'illustration avait été présenté dans Fujin Gahō l'année précédente (1946).

déplacé vers son mari et leur vie à Kamakura.

L'article, titré「ムッシュは繪をマダムは文學を」[23] et sous-titré en français « *Pour Monsieur, la peinture. Pour Madame, la littérature* » propose explicitement de faire découvrir aux lectrices la vie du couple à Kamakura, comme l'indique la mention accompagnant le titre 鎌倉におけるコンラッド・メイリ氏とキク・ヤマタ夫人の生活 (La vie quotidienne de Mr Conrad Meiri et de son épouse Kikou Yamata à Kamakura).

L'article la relégua donc au second plan d'une certaine façon, même s'il dressa d'elle un portrait de femme de lettres occidentale plutôt élogieux. Le texte rappela bien sûr son identité franco-japonaise[24] et brièvement ses publications les plus connues en France mais souligna surtout son implication dans la diffusion de la culture japonaise en Europe, insistant sur sa renommée dans les cercles intellectuels parisiens[25]. Étaient par ailleurs cités plusieurs personnes de son cercle le plus proche lorsqu'elle était en France telles que François Mauriac (1885-1970), André Gide (1869-1941), Delteil Joseph (1894-1978) mais aussi le peintre Léonard Foujita (1886-1968). Elle apparaissait donc comme une passeuse de culture, métissée, respectée et bien intégrée dans les milieux intellectuels français qui l'appréciaient. Cette représentation de Kikou était à la fois proche de la réalité mais surtout proche de sa propre vision d'elle-même, néanmoins elle était plus rare dans les médias japonais où elle était habituellement représentée comme une femme de lettres française, plus que comme une métisse.

Il faut cependant souligner que la partie s'intéressant principalement à Kikou apparaît dans le texte bien après la présentation de Meili et l'histoire de leur rencontre et de leur mariage. Les lectrices du magazine pouvaient ainsi

---

23 Monsieur peint, Madame écrit/fait de la littérature

24 『(…) リヨン駐在日本領事を父に、リヨン生まれのフランス女性を母にもつ、古き国際愛の結晶。』(Elle est le fruit d'un amour international entre un père consul du Japon à Lyon et une mère française née à Lyon.)

25 『ヨーロッパに日本文化を紹介するのに多大の貢献をし、(…) キク女史の名はパリ知識人の間に知れ渡っている』(Elle a grandement contribué à l'introduction de la culture japonaise en Europe (...) le nom de Mme Kikou est bien connue parmi les intellectuels parisiens.)

découvrir la définition du mariage idéal selon Kikou : « Deux pour un et un pour deux »[26] et constater que le couple Meili-Yamata semblait l'incarner à la perfection, unis par leur passion créative, artistique pour l'un, littéraire pour l'autre, qui renforçait leur amour[27]. Alors que nul dans leur entourage ne semble ignorer les infidélités régulières et autres aventures de Meili (y compris Yamata elle-même), ces propos sur l'amour idéal et la vie du couple venaient presque répondre aux rumeurs et aux détracteurs du couple. Outre cette vision d'un couple harmonieux, la revue mettait en avant l'équilibre trouvé entre Occident et Japon dans l'intérieur du couple, leur esthétique et leur vie quotidienne[28].

Plusieurs points importants sont à relever quant au portrait de Conrad Meili. Il est d'abord fait mention de son appartenance à Issuikai 一水会 malgré le fait, selon l'article, qu'il s'adonne maintenant plus rarement à la peinture et fasse principalement des portraits. Une des raisons invoquées par son beau-frère pour faire partir Kikou et son époux de chez lui était la venue incessante de modèles pour les tableaux de nus de Meili. Cette indication à propos des portraits vient ici rappeler, malgré un cliché de l'article représentant Meili peignant un modèle nu, qu'il était avant tout animé par l'amour de l'art et de la peinture, qu'importe l'objet de sa peinture. Toujours dans un désir de le présenter comme un artiste sérieux et appliqué, le texte insista

---

26 『結婚の理想は、、、とマダムはおっしゃる「二つは一つのために、一つは二つのために Deux pour un, un pour deux ということにあるのですよ」(L'idéal du mariage, dit Madame, c'est : « Deux pour un, un pour deux »)

27 『これを実際の生活にあてはめていえば、つまり、次のようになる。ムシュは絵を描いている。そして、マダムは文学をやっている。これは、2つの別々の道を歩んでいるように見えないことはないが、実は創造という1つの目的に理想と歓びを求めているのだ。だから、2つの精進は一筋の流れとなって夫婦の生活を高めあっている。』(Si nous l'appliquons à la vie réelle, ça donne cela. Monsieur fait de la peinture. Madame, elle, fait de la littérature. Même s'ils semblent emprunter deux chemins distincts, ils recherchent en réalité accomplissements et joie dans un seul but : celui de la création. Ainsi, les deux idéaux se rejoignent en un seul chemin et embellissent/enrichissent la vie du couple.)

28 『パリのアトモスフェアと日本の「さび」が怪しく融けあった空気がただよっている。』(L'atmosphère est un mystérieux mélange de l'ambiance de Paris et du « sabi » japonais.)

sur le fait qu'il passait des heures dans son atelier à peindre, tâche harassante, dont son dos courbé[29] en témoignait. L'article continua à brosser un portrait très avantageux de Meili. Il apparaissait aussi au fil de l'article comme un intellectuel ayant étudié le droit et la philosophie à Genève et qui, en digne amoureux de la culture japonaise et esthète, composait même des haïkus, y compris lorsqu'il fut emprisonné quelques mois[30].

L'article est accompagné de dix photographies prises par Miki Jun 三木淳[31] présentant le quotidien du couple, accompagnées de légendes qui créé un dialogue entre images et textes. Sur ces clichés, cinq sont consacrées à Kikou, trois au couple et deux à Meili, ce qui n'illustre pas particulièrement le contenu de l'article qui était plus orienté vers Meili que vers son épouse. Parmi les cinq clichés de Kikou : un la représente attablée à son bureau travaillant chez elle[32], un autre dans son bureau à Tōkyō tapant à la machine, deux autres clichés la montrent de dos, l'un priant à l'église, agenouillée sur un prie-Dieu et tournée vers le sacré-cœur, l'autre à la plage à Kamakura, de loin. Enfin, on peut l'apercevoir sur un dernier cliché cuisinant à l'extérieur debout devant une sorte de niwa kamado 庭竈. La légende de la photographie de Kikou sur la plage, de dos et tournée vers la mer, imagine alors que peut-être « par-delà la mer il y a Paris[33] » et explique que Kikou observant l'horizon et sentant l'odeur de l'automne, ressentait alors de la nostalgie. Il est également intéressant de noter la présence des nus de Meili sur une photographie de Kikou à son bureau chez elle, en train d'écrire, créant un écho à

---

29 『(…) 明けても暮れても背中をまげて、コツコツと絵を描き (…)』(Il peint assidument, jour et nuit, le dos courbé)

30 『「いくたりと出会いたりしぞ冬ながし (拘留生活中の作品)」なぞという俳句を作る』(Il compose un haïku intitulé « Ikutari to deaitari shizo fuyu sagashi » (œuvre écrite lors de sa détention).

31 Jun Miki (1919-1992) était un célèbre photographe japonais. Pionnier du photo-journalisme dans son pays, il fut le premier photographe japonais à être publié dans l'hebdomadaire américain *Life* en 1954.

32 Deux nus peints par Meili sont visibles en arrière-plan.

33 『海のむこうは巴里 ?』

la définition du mariage idéal selon Kikou dans le texte. Ces différents clichés de Kikou et leurs légendes, répondent en grande partie au cahier des charges de l'article imposé à Miki Jun. Ils mettent en avant une Kikou à la fois intellectuelle, moderne et acharnée (au travail chez elle ou dans son bureau de Tōkyō[34]), occidentale (priant dans une Église) mais aussi japonaise (utilisant un kamado pour cuisiner).

Les photographies du couple ensemble viennent elles mettre en avant les aspects japonais de leur vie et de leurs loisirs : contemplant, tous deux vêtus de kimonos, leur jardin ou posant dans un intérieur plus japonais qu'européen, entourés de mingei-hin 民芸品 qu'ils affectionnent particulièrement et collectionnent, explique la légende. Si le couple était surtout considéré comme étranger au Japon, ces quelques pages soulignaient qu'ils n'en étaient pas moins capables de vivre à la japonaise. La légende de la photographie du couple posant dans le jardin indique par ailleurs que « Monsieur ne sort que rarement, et que le jardin est le seul endroit en extérieur qu'il fréquente ». Détail qui interpelle, si la revue présente un Meili peignant du matin au soir enfermé dans son atelier, il est assez bien connu et attesté par plusieurs sources que Meili avait une vie sociale et mondaine riche.

Meili quant à lui n'apparaissait seul que sur deux clichés : le premier peignant un modèle nu dans son atelier, cigarette à la bouche, et le second, allongé dans un atelier au milieu d'un désordre de papiers japonais, de cadres et de peinture, fumant, concentré sur son écriture. La légende indique que lorsqu'il était fatigué de peindre, il écrivait des haïkus. Sur tous les clichés Conrad Meili était plutôt vêtu à la japonaise, habitude prise apparemment bien avant de s'installer au Japon d'après Fujin Gahō[35]. Néanmoins, la seule fois où sur une photographie Meili porte une tenue occidentale, il peint un nu, signalant ici une attitude « étrangère », prétendue

---

[34] La légende de ce cliché indique qu'elle quitte Kamakura à 6h30 du matin et qu'à 8 heures elle est déjà au travail, tapant à la machine.

[35] 『日本ではもちろん、パリでも着物を好んで着ていたムッシュ』(Monsieur adorait porter le kimono, évidemment au Japon, mais aussi à Paris.)

rare chez lui, pour une activité elle aussi venue d'Occident (la peinture réaliste). La surreprésentation de Meili avec des attributs japonais dans l'article met en avant l'amour, supposé, de ce dernier pour le Japon et sa capacité à s'intégrer et à intégrer les éléments de la culture japonaise. Kikou Yamata portait quant à elle des tenues occidentales (sauf sur le cliché du jardin), bien que l'article mentionnât qu'elle ait séduit les Parisiens avec sa tenue japonaise et ses tabis[36]. C'est ici sa double identité qui est relevée : des tenues occidentales sur les photos mais japonaises dans le texte et sur le cliché devant représenter le couple dans une position japonisante. La mise en avant de cette double culture (japonaise et française), semble rappeler que Kikou n'est pas la métisse franco-japonaise qui n'a rien de japonais ou la Française décrite dans la presse japonaise, mais surtout témoigne de l'équilibre entre le Japon et la France/l'Occident dans la vie quotidienne du couple. Marguerite Varot, apparaissait également en photo dans l'article, posant aux côtés de sa fille et de son gendre, installée dans un fauteuil avec un chat sur les genoux. Varot, qui avait à plusieurs reprises mis en garde sa fille à propos de l'attitude de Meili, n'habitait alors pas avec le couple, contrairement à ce que laissait sous-entendre ce cliché, mais avec son fils Junta. Si Kikou avait souhaité que sa sœur Hana apparaisse elle aussi dans l'article, espérant que sa présence contribue à améliorer l'image générale du couple, cette dernière refusa.

Il est intéressant de noter que, contrairement à d'autres numéros de la revue comportant le même genre d'articles sur une personnalité où le nom du journaliste et du photographe étaient mentionnés, ici, seul le nom du photographe

---

36 華やかなパリのパーティに裾模様のモンペに共布のタビといういでたちでパリジャンの面々をアッと言わせたマダム。(Madame a épaté les Parisiens lors d'une magnifique soirée parisienne, en portant un monpe à motifs sur l'ourlet et des tabis assorties faites dans le même tissu.)

Nota Bene : 裾模様 (susomoyou) désigne en général les motifs/imprimés dans la partie inférieure/en bas d'un kimono. 裾模様のモンペ (Susomoyou no monpe) est ici traduit librement comme un monpe à motifs, néanmoins cette traduction est à prendre avec précaution.

(Miki Jun) apparaît[37]. S'il est possible, en s'appuyant sur un certain nombre de papiers personnels de l'autrice, d'attester de sa probable intention d'utiliser cet article pour améliorer l'image de son époux, de son couple et la sienne, il est toutefois plus difficile d'affirmer qu'il ait été totalement ou même partiellement produit par Kikou elle-même. Cet article ne figure par exemple pas parmi les articles rédigés de sa main[38] dans les fonds des manuscrits de la bibliothèque de Genève où sont conservés, entre autres, ses papiers personnels. Néanmoins, un doute sérieux subsiste, alimenté par le contenu de l'article, l'usage de certains termes (ex : monsieur/madame en français), les problèmes liés à la réputation du couple et plus particulièrement à Meili, ainsi que d'autres éléments relevés dans les documents personnels de l'autrice (Fonds / Collection : Papiers Kikou Yamata).

Une femme était tributaire de l'image de son époux dans le Japon des années 1940, et cela était encore plus notable dans le cas de Kikou qui avait une image publique à soigner et entretenir pour assurer sa popularité et ses revenus, particulièrement dans cette période troublée où elle devait faire face à la méfiance et à parfois même à la xénophobie. En 1947, après de longues années au Japon, les rumeurs, ses prises de position, la guerre et l'emprisonnement[39], les dégâts sur la réputation de Kikou et celle du couple en général sont notables. D'une part, elle devait « réinjecter » de la japonéité dans la façon dont elle se présentait au Japon qui la percevait *a minima* comme n'étant pas assez japonaise ou comme une Française/une étrangère dans la plupart des cas. D'autre part, elle devait faire en sorte que son mari apparaisse sous un jour beaucoup plus favorable pour étouffer les histoires de mœurs, d'infidélités et de problèmes d'argent. Ainsi, l'article supposé présenter la femme de lettres à un lectorat féminin issu de classes aisées,

---

[37] Le cahier des charges ne mentionnant que les clichés et les légendes pour le photographe, il est assez peu probable qu'il ait rédigé l'article.

[38] Fonds / Collection : Papiers Kikou Yamata > VII. Coupures de presse > 1. Articles écrits par Kikou Yamata (Ms. fr. 6352-6353)

[39] Aussi bien à la suite de l'arrestation par la Tokkō que pour la tentative de viol de Meili.

répond, par un heureux hasard et avec finesse, aux critiques auxquelles elle et son époux faisaient face : que ce soit la carrière d'artiste précaire de Meili, ses frasques et ses infidélités ou encore le manque d'identité/caractéristiques japonaise chez Kikou.

Cet article de Fujin Gahō aurait donc dû principalement présenter aux lectrices le portrait d'une Kikou, autrice, française, moderne. Néanmoins, ce fut *Monsieur* qui y occupa une place considérable. L'article fit donc la promotion de Meili en tant que peintre et présenta aussi l'image d'un couple uni, partageant leur amour de l'art. Il souligna aussi le fait que le couple vivait *à la japonaise* (Meili portant le kimono et écrivant des haikus, les sashimis étant le plat préféré du couple etc...) tout en gardant l'attrait occidental qui plairait aux lectrices de la revue (les tenues de Kikou, son cercle français et les références à Paris, le cliché dans l'église). Kikou, considérée comme française et ayant usé de cette part de son identité, apparaissait alors baignée par la culture japonaise, équilibrant à la perfection les aspects occidentaux du couple Meili-Yamata et leur vie. Bien sûr, il reste difficile d'évaluer exactement le degré d'ingérence de Kikou dans la réalisation de cet article. Néanmoins, de nombreux faits établis sur les conditions de production de cet article et son implication dans les divers remaniements et sa version finale viennent souligner une tentative de l'autrice franco-japonaise, pourtant méfiante envers la presse japonaise, de prendre le contrôle de son image et jouer un rôle actif dans sa narrative (et par extension celle de son époux Conrad Meili) et la perception de son identité par les Japonais.

Sources primaires

Bibliothèque de Genève, Genève, Fonds Papiers Kikou Yamata, I. Correspondance, Ms. fr. 6321-6326.

Bibliothèque de Genève, Genève, Fonds Papiers Kikou Yamata, II. Papiers personnels et biographiques, Ms. fr. 6327-6329.

Bibliothèque de Genève, Genève, Fonds Papiers Kikou Yamata, III. Journal, Ms. fr. 6330.

Bibliothèque de Genève, Genève, Fonds Papiers Kikou Yamata, VI. Notes, Ms. fr. 6351.

Bibliothèque de Genève, Genève, Fonds Papiers Kikou Yamata, VII. Coupures de presse, Ms. fr. 6352-6353.

Fujin Gahō n° 517 婦人画報 517 号, octobre 1947, Tōkyō : Tokyosha.

Bibliographie

MEYER Denis Charles, *Monde flottant : la médiation culturelle du Japon de Kikou Yamata*, Paris, L'Harmattan, 2009.

PENISSARD Monique, *La Japolyonnaise : essai sur l'écrivain franco-japonais Kikou Yamata*, Lausanne, Favre, 1988.

SEYA Anne-Aurélie, « Métisses franco-japonaises : de passeuses culturelles à objets exotiques. Kikou Yamata & Eugénie O'kin » in Paola Carrion Gonzalez, Julie Corsin & Laura, Gonzalez Rufo dir., Approches de la culture féminine dans l'Asie et l'Océanie francophones, Paris, L'Harmattan éditions, 2022, p.61-77.

執筆者紹介

上田悠久（うえだ はるひさ）	現　職：茨城大学人文社会科学部　講師 早稲田大学政治経済学術院　非常勤講師 専門分野：西洋政治思想史
呉　志剛	現　職：早稲田大学政治経済学術院　非常勤講師 専門分野：中国語音声学
花岡龍毅（はなおか りゅうき）	現　職：常磐大学人間科学部　教授 早稲田大学政治経済学術院　非常勤講師 専門分野：発生分子遺伝学・科学技術論・生命倫理
Anne-Aurélie SEYA	現　職：東京外国語大学世界言語社会教育センター　特任講師 早稲田大学政治経済学術院　非常勤講師 専門分野：日仏関係歴史、紀行、ジェンダー研究

教養諸学研究会
投稿規程

制定　二〇〇四年三月二日
改定　二〇二三年六月七日

早稲田大學政治經濟學會評議員会は、会則第二条に規定された「教養諸學研究」を投稿制の雑誌とし、その投稿規程およびそれに伴う諸手続きを以下のように定める。

１．投稿資格
著者または共著者の少なくとも一人が、投稿時点において、
ａ．早稲田大学政治経済学部常勤教員
ｂ．早稲田大学政治経済学部非常勤講師
ｃ．評議員が推薦し、編集委員会の同意を得た者
の中の一つ以上に該当すること。

２．投稿原稿
ａ．研究論文
ｂ．研究ノート・調査資料・調査報告
ｃ．翻訳（学術的な価値の認められるもの）
ｄ．書評
ｅ．その他編集委員会が適切と認めた文章

３．投稿方法
ａ．原稿はすべて、評議員を経由して編集委員会に提出すること。
ｂ．原稿は二百字詰原稿用紙換算で、研究論文は百枚程度、書評は三十枚程度とする。
研究ノート・調査資料・調査報告および翻訳は、研究論文に準ずるものとする。2. e. に規定する文章については二百字詰原稿用紙換算で十枚程度とする。
ｃ．原稿にはすべて、日本語で千字程度の要旨をつけること。英文またはその他の言語での要旨をさらに付してもよい。ただし 2. e. に規定する文章については要旨を必要としない。

４．投稿原稿の採否およびそれに伴う手続き
ａ．投稿原稿の採否は編集委員会が決定する。
ｂ．当学術誌は査読誌ではないが、編集委員会は採否にあたって、一定の基準に則って審査を行う。

５．公開
「教養諸學研究」は早稲田大学政治経済学部ウェブサイトおよび早稲田大学リポジトリにおいて公開する。研究論文等を投稿する場合は、これに同意したものとする。

The Liberal Arts Research Center
Rules for Submission of Articles

Enacted: March 2, 2004
Revised: June 7, 2023

The Board of Trustees of the Waseda Society of Political Science and Economics has determined that the Journal of Liberal Arts, as defined in Article 2 of the Society Rules, shall be a journal for submissions, and has established the following rules and procedures for submissions.

1. Eligibility to submit articles
   At the time of submission, the author or at least one of the co-authors must be one of the following:
   a. A full-time faculty member at the Waseda University School of Political Science and Economics
   b. A part-time lecturer at the Waseda University School of Political Science and Economics
   c. A writer recommended by a trustee and approved by the Editorial Board

2. Types of articles accepted
   a. Research papers
   b. Research notes, research material, research report
   c. Translations (of recognized academic value)
   d. Book reviews
   e. Other types approved by the Editorial Board

3. Submission procedure
   a. All manuscripts must be submitted to the Editorial Board via the trustees.
   b. Article length is limited to approximately 100 pages for research papers, with one page considered to equal 200 Japanese characters (including punctuation, spaces, etc.). The same applies to research notes, research materials, research reports, and translations. Article length is limited to approximately 30 pages for reviews and approximately 10 pages for other types approved by the Editorial Board.
   c. All articles (except those of types stipulated in 2e) must contain an abstract in Japanese of approximately 1000 characters. Additional abstracts in English or other languages are also permitted.

4. Acceptance or rejection of submitted manuscripts and accompanying procedures
   a. Acceptance or rejection of submitted manuscripts is to be determined by the Editorial Board.
   b. Although the journal is not a peer-reviewed journal, the Editorial Board adheres to certain standards in reviewing for acceptance or rejection.

5. Publication
   "Journal of Liberal Arts" will be published on the website of the School of Political Science and Economics and registered in the Waseda University Repository. By submitting research papers or other materials, you are deemed to have agreed to this.

早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会

（五十音順）

会　　長　　鎮目雅人

評議員　○生駒美喜　○井上　淳　岡本暁子
齊藤泰治　シュラトフ・ヤロスラブ　ソジエ内田恵美
玉置健一郎　中村　理　野邊　厚
平林宣和　ブロッソー・シルヴィ　マルティ・オロバル・ベルナット
室井禎之　○八木斉子　○ロペス・パサリン・アルフレッド
○ロミオ・ケネス

（○印は編集委員）

編集代表　ロペス・パサリン・アルフレッド
編集担当　ロミオ・ケネス

2025年3月25日　発行

教養諸學研究　第百五十三号

編集人
発行人　鎮目雅人

印刷所　三美印刷 株式会社

発行所　169-8050　東京都新宿区西早稲田一丁目六番一号
早稲田大学政治経済学部内
早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会

前　号　目　次

読売新聞にみる殺人関連事件の被疑者・被告人
——犯人視報道と実名報道の観点から…… 高城玲奈・中村　理

遺伝子治療用製品の資本分析
—バイオ・キャピタル（生—資本）研究の課題
…… 花　岡　龍　毅

【研究ノート】
“提着很沉”および“提着很累”について…… 伊　藤　大　輔

Entre jeu et « sinophonie » : retour sur les
débuts du *soft power* chinois. La deuxième
édition du *Hanyu qiao — Chinese Bridge* …… Sylvie BEAUD

Journal of Liberal Arts

No. 153 March 2025

Contents

Radical Enlightenment and Hobbes:
Controversy between J. Israel and N. Malcolm ..... Haruhisa UEDA

Study no Tone Change Mechanism of Mandarin Two-character
Compounds without Neutral Tone
— based on analysis of pitch curve and pitch changes
..... Wu Zhigang

Considerations Regarding the Commercialization of Gene Therapy,
Including COVID-19 Vaccines: Capital's Deep Subsumption
of the Mind, Body and Soul ..... Ryuki HANAOKA

Kikou Yamata dans la presse japonaise féminine d'après-guerre :
l'exemple du mensuel Fujin Gahō ..... Anne-Aurélie SEYA

The Liberal Arts Research Center
The School of Political Science and Economics
Waseda University
Tokyo, Japan